白と黒の王国

橘高　有紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白と黒の王国

【Ｎコード】
Ｎ８６５９Ｊ

【作者名】
橘高　有紀

【あらすじ】
星をわたる列車に乗って、少年たちは旅に出る。遠い異界の地へと――
リンとエドを乗せた星間列車が次の停車駅『白と黒の王国』に到着した。
そこはトリビトの暮らす特異な街だ。翼を持つヒトビトが優雅に空を舞っている。

1

その国が列車の窓から見えたとき、リンは息を呑んだ。オーウェインは空に浮く島だからだ。いや、島ではないのかもしれない。リンは独特な街の外観を『砂時計のようだ』と思った。周りを四本の柱に、中央を一本の柱に支えられた島が、空に浮いている。浮いた島は、上部がほぼ平らで、下方へと木の根のように街が伸びていた。その島の形が砂時計の形と類似していたのだ。ピンクの砂は、真っ白な街にないけれど。

「あれが、オーウェイン？」

リンが小さな手のひらを窓にぺたりとつけて、外の景色を覗き込む。青空と雲海のなかを突き出て、ぽつんっとそれはあった。他は見渡す限り、ただ一面に広がる青と白だ。ぶ厚い雲の下は何も見えやしない。リンはメガネの奥にある青い目を大きくして、街を凝視する。

ネコ族のエドが、読んでいた本をぱたんと閉じた。エドは王子さまみたい、とリンが称するような少年だ。きっちりしたスーツだって軽く着こなす（多分）お金持ち。さらさらの青い毛艶も口調も態度もまさにそれ。

「そう、あれがトリビトの街、白と黒の王国だよ。天井都市（オーバールウ）だね」

「トリビトの街？」

「見えない？　きっと空、飛んでるはずだけど。もっと街に近づいたら見えるかも」

エドが緑と金の入り混じった目をすがめて呟く。普段は大人ぶっているエドも物珍しいのか、窓際までよってきた。

対するリンは人族で「貧しい」の一言がとことん似合う。廃棄寸前の装いに丸めがね、ぼさぼさの赤毛が一張羅。ナイフとフォークの扱いはただいま訓練中で、本人の唯一の自慢は鮮やかな青い瞳、それだけだ。

そんな二人が一緒に旅をしているのは実に偶然だった。たまたま同じ列車で旅をしていて、たまたま年頃が近くって、たまたま目的地がおんなじで、たまたま同室だったというだけだ。出会ってまだまだ一週間目。不思議と気があって一緒にいるだけの二人である。

そう、二人は旅をしていた。星をわたる高価な列車に乗って、目指すのはそれぞれ終着駅『クィダズ』だ。そして今、『エンジャーグル（しるべなき街）』から三つ目の街に到着目前である。

ぐぐっと列車が旋回して街へと降りていく。着陸の合図に汽笛が響いた。真っ白な街がぐんぐんぐんぐん向かってくる。リンは弾む声で言った。

「あのね、妹のエイダはトリビトなんだ。ここ、エイダの仲間の街なんだね」

「……なんで、キミの妹がトリビトなの」

エドが珍しく目を丸くする。ぴくりと動いた耳からして興味津々なのだろう。最近はリンにもエドがちょっとわかってきた。エドの耳やしっぽが動くときは、喜んでいるときや、怒っているときなど、何かしらの感情が大きく動いたときだ。しかし普段の彼は、極力感情が動かないよう努めている節があった。耳や尻尾の動きで、内心が察知されるのを避けているのだ。

わかりやすくていいと思うけどな。そう考えても口にはできない。エドが嫌な顔をしそうだからだ。しかし耳や尻尾が動いていると、リンは触りたくなるから困ってしまう。一度触らせてもらった尻尾はふかふかしていた。触っていい？　と尋ねても、大体はすげなく却下されてしまうけども。

「うん、エイダはトリビトなんだ。片方だけしか翼がないから、空は飛べないけど……」

話しながらリンは思い出す。残してきた大切な家族を。

「泣き虫で、とってもかわいくて、小さくて、歌がうまくて、いつもぼくの後ろをついてきてたんだ」

トリビトたちは、みんなエイダのようなのだろうか。そう思うと、

ドキドキしてしまう。
「そんなこと言ってたね、昨日。会ってみたいな、エイダにも」
うん、とリンがにーっと笑って歯を見せる。
白と黒。
エドがそう説明したオーウェイン。リンは列車が都市へと降りていくさなか、その言葉の意味を理解した。最初は真っ白な街が影と相成って『白と黒』なのだと思っていた。しかし、そうではない。近づくにつれ鮮明になっていく街へ、リンは目を凝らした。
「エド、あの街……なにか変だ」
「どれ。――ああ、汚染対策じゃないの？　完全環境都市（アーコロジー）って少なくないもの」
エドがちらりと街を一瞥して、何でもないように言う。確かに街を覆う変な膜状のものはあったが、訊きたいことはそれじゃない。
「じゃなくって、あの街、逆さまじゃない？　ほら、島の下に向かって建物がある」
いや、そもそもあれは、本当に島と呼べるのか。
街の建物は、地上に向かって突き出ていた。逆三角形という形がわかりやすいか。砂時計の砂のように、街を支える中央の柱へ沿って、徐々に長く、地上へ伸びている。それを細い通路のようなもので連結し、街全体を支えているのだ。
「でね、上の街じゃなくって下の方にも街があるでしょう？　鏡で映したみたいに真っ黒な街が」
真っ白な街の下方から明滅する光が見えた。分厚い雲の切れ目から見えたのは、逆さまの街を支える『柱のようなもの』の底だった。目を凝らせば、中央へ向かうほど背の高い建物が密集している。支柱に近づけば近づくほど、建物は高くなっていく。まるで、空へ伸びようとするようだ。
（なんだろ。二つとも、ヤな感じする）
特に黒いほうは不気味に思えた。白い街が白い雲の只中にあるなら、黒い街は黒い霧に覆われている。二つの街は対照的だった。向

き合い、にらみ合っているようだ。
　するとふうん、と隣でエドが意外そうな声を漏らす。リンが首を捻ると、笑いをかみ殺して「ごめん」となぜか謝ってくる。
「どうしてって訊かれるとは考えてなかったんだ」
　白い手袋を口元に当ててくすくす笑った後、エドは街を指差す。
「説明するとね、下の街は地上都市（ロールエム）、別名『黒の街』。天井都市（オーバールウ）――『白の街』――を補佐する影の国。ほら、真ん中に『支柱』が見えるよね。あれを境に上と下、街が二つあるんだ。だからここは白と黒の国、二つをあわせて『オーウェイン』と呼ばれている。『オーバールウ』が逆さまなのは、トリビトの体質じゃないかな。ほら、トリビトが飛んでいる！」
　振り返ったリンの視界を、白いものが過ぎった。人間だった。ネコ族でもイヌ族でもない、人間だ。だけど彼らは、自身よりも大きな翼が背中から一対生えていた。リンは丸眼鏡を押し上げて、その光景に見入った。天井都市周辺を、トリビトが優雅に駆けている。
　もっと覗き込もうとしたリンの額が、ガラスに当たった。それさえ気に留めず、こくん、と少年は生唾を飲み込む。胸が高鳴った。
　すごい。青い空の下を自由自在に飛び回っている。
　純白の翼が大空をはためくのは夢のようだ。あれはまるで、大きな鳥。彼らトリビトは人間とそう変わらないのに、なぜ空を飛べるのだろう。どくん、どくん、と鼓動が煩かった。同時に、言いようのない痛みも胸を刺す。本当に、なんてきれいなのだろう……。
「どうしてトリビトには翼があるのかな。ぼくにも、あったらよかったのに」
　思い描く記憶の少女も、小さな白い翼を片方だけ持っていた。大きな翼があったなら、この中にあの子も混じっていただろうか。楽しそうに、自在に空を飛んだだろうか。
　エイダが「待って、待って」と追いかけてくるのを思い出し、リンが唇を噛んだ。
　リンの回想とほぼ同時に、エドが顔を強張らせる。勢いよく口を

開いてなにか言おうとしたが、すぐにふい、と視線をそらした。トリビトたちを見下ろしながら淡々と、
「トリビトだからじゃないの」
エドの態度に引っかかりを覚えながら、リンは「そうだよね」と淋しげにうなずいた。
「トリビトだから翼があって空も飛べる……。当たり前だよね。ぼくは人間だから空を飛べない。ねぇ、エドは翼があれば——なんて考えたことある？　空を飛べたらって」
「僕はないね。そういうのって不毛だよ」
フモウ？　と尋ねるリンへ、エドはため息をこぼす。
「飛べないから、僕らは空へ憧れて飛空艇や飛行機なんてものを生み出したんでしょ。他の星へ行ってみたいから、星間列車があるんでしょ。そういう文明を否定してどうするの。トリビトだから空を飛べる。それじゃダメなの」
「そういうことじゃなくて」
みなまで聞かず、エドがくるりと背を向けた。広いコンパートメントに用意されたソファへ腰を下ろし、読みかけの小説を手に取る。ぴりりとした空気が漂った。この話はこれでお終い、と打ち切られたのだ。なにがエドの癇に障ったのかリンにはわからない。「もしも」という仮定の何がまずかったのか。
「あの、エド……」
「言い忘れてたけど、降りちゃダメだからね。降りるなら次の街、『ヒューギー』にしてよ」
「どうして？」
「どうしてもだよ。ここはとにかくダメなんだ。ほら、これにも書いてある」
エドが見せたのは、星間列車に備え付けられているガイドブックだ。ガイドブックと言っても、エドが持つカード型のコンピューター末端と同じようなものだった。見た目は二つ折りの分厚い紙で、見開いて操作すると、内容がホログラフィ（立体映像）となって飛

び出てくる。様々な情報がリアルに引き出せた。
　しかし、共通語が不完全なリンには扱えない。簡単な文字しか読めないのだ。だからほら、と見せられてもリンは顔をしかめるばかりだった。エドはそんなリンに代わり、手早く片手でガイドブックを操作する。現れた映像の一部に指を這わせた。
「ここ。赤い文字で『警告』って。安全とは言えないんだよ。だから絶対降りちゃダメ。こないだみたいなことになっても大変だし」
「どうして？」
「トリビトがよそ者を嫌うんだ。停車時間も今回はぐっと短い。すぐ出発する」
「どうして？　だってトリビトの街だよ」
　エドがばんっと乱暴にガイドブックを閉じた。苛々とリンを睨みつけ、
「危険なんだって言ってるだろ。ここがトリビトの街だからさ。キミは行っちゃいけないんだ。わかった？　ヴィーグエングみたいなことになっても知らないからね」
「……そんな大声で言わなくても」
『前科』のあるリンが唇を尖らせると、エドは声をはりあげた。
「わかった？」
　さすがにリンもむっとした。エドが自分のせいで苛立っているのはわかったが、理由がわからない。今までのエドは、リンにわからないことがあれば、丁寧に教えてくれたのに。
　トリビトが危険であることも、信じられなかった。だってこの街は妹（エイダ）と同じ種族の住む街だ。視線を転じると、窓の外にトリビトの姿が見えた。ぐんぐん近づいてくる逆さまの街『オーバールウ』も。優雅に空を舞う彼らの何が危なのだろう。
　しかし強く反論できないのは、『前科』があるためだ。前の駅領である『工芸の街（ヴィーグエング）』で、リンはかばんを盗まれた。それも自分の不注意が原因で、だ。無事に列車へ再乗車できたのは、エドの助けが大きい。

そこを指摘されると、リンは何も言えなくなってしまう。
黙り込んだリンの耳に、列車のアナウンスが滑りこんだ。
『お客さまへご連絡いたします。当列車は間もなくオーウェインへ到着いたします。軽い揺れがございますので、念のためシートにお着きになってシートベルトを着用してください。繰り返します。お客さまへご連絡いたします。当列車は――』
気まずい雰囲気の中、リンは無言でシートについた。身体を固定するベルトは自動で伸びてくる。
「どうしても降りたくなったら絶対に言って。ステーションの中だけならついていってあげるから」
リンが答えようとしたとき、不気味な振動が列車を揺るがした。発着以外どんなときも揺れない列車が、はじめて揺れた。思わず悲鳴を発し、リンは身を縮こまらせた。
「大丈夫。ドームの中に入ったんだ。あれに接触するとこうなるんだよ」
エドが余裕の声を出す。リンはちらりとエドを見ると口をつぐんだ。
どうしてか、苛々していた。

停車時間は短いという言葉通り、今度の停車時間はたったの二十分だった。それにしたって二十分もあるが、前の駅では五時間だったのだから、十分に短いと言えた。ちなみに始発（エンジャーグル）では、丸一日停止していたようだ。その時間を使って、エドが一通りの買物をしたと言っていたのを思い出す。エドの読んでいる小説は、そこで手に入れてきたものだった。
（でも、二十分あればお手紙ぐらい出せるよ）
アニエスへの手紙は、送れるときに送っておきたかった。機械なんてリンの故郷である『フォーグル』にはないので、列車から無料

で送れる『メール』や『映像通信』も使えやしない。エドにアナログ過ぎると呆れられた手段でしか、近状を伝える術がなかった。手紙は、遠ければ遠くなるほど料金も高くなる。財布の事情もあって、投函できるチャンスをリンは逃したくなった。

誇りを持って行くのよ、リン。そう言ってくれたアニエスに頑張っているんだよ、と。ここまで来ているんだよ、と伝えたくて。

そろ、と荷物を持ったリンが窺うと、エドは読書の真っ最中だった。今のうちである。

2

「どこ行くの」
唐突に声が飛んできて、リンは肩を弾ませた。恐るおそる笑みを作って振り返ったが、エドは読書状態のままだ。鋭い眼差しを向けられずにすんで、リンは胸をなでおろした。あの目は苦手だ。とくに後ろめたいことをしている今は。
「のど渇いたから、何かもらって来ようと思ったんだけど」
何でもないように、ごく自然にリンは返す。エドがふうん、と小説のページをぱらりとめくった。
「オーダーはここからでもできるのに、慣れないよね。じゃあ僕のもお願いしていい？　軽く食べられるものならなんでもいいから。飲み物はホットココアで」
「うん、ココアと何かだね」
そそくさとリンが扉に手をかけた。うん、手紙を出したらもらってくるから。
「ねえ」
またかけられた声に、息をつめた。扉をあけた姿勢で固まったリンに、エドが釘を刺す。
「街へ行っちゃダメだからね。もう一度言うけど、ここはトリビトの街なんだ。キミが行っても傷つくだけだと忘れないで」
また始まりそうなお説教に、リンは苛立ちを募らせた。どうして、エドばかりが偉そうに。
「わかってるよ」
ばんっと扉を乱暴に閉めてキッと外を見る。列車は無事にこの街についた。宇宙連盟に加入している星を、なぜ危険だと断言するのかわからない。危険なら、星間ステーションなど建てないだろうに。
リンは『オーウェイン』がどんな場所なのか知らない。だけど、ここはトリビトの街でトリビトは人間に近い種族だ。なぜエドに、

あれこれ指図されなければならない。親しみを感じてはいけないのか。
だいたい、エドだって同じ子どもだ。たまたま同じ部屋だっただけだ。アニエスじゃなければ、ローラおばあちゃんでも、テッサでもニコラでもない。あんな風に命令される筋合いはないのだ。
イライラが爆発しそうだった。手紙を出しにいく、ほんの数分も許されないのか。手続きは一人でできるし、問題などどこにある。
ずんずん廊下を踏みしめて進むリンの行く手に、ゴリラの車掌が見えた。エリックだ。大きく立派な身体は、遠くからでもすぐに判別できた。各車両の廊下に二つはあるシャンデリアを、彼の頭は毎度ギリギリで通過する。今は黒い制服を腕まくりし、半透明なチェックボートとペンを片手に、何かを書き込んでいる最中だ。
少年に気づくと、車掌はいかつい顔を不器用な笑みに変えた。少年の頭がすっぽりおさまる手のひらで、わしゃわしゃとリンは撫でられる。
「どうした、今日は一人か。いつも一緒にいるネコ族の坊やはどうした？　……ん？」
リンの装いに、車掌は顔をしかめた。
「もしかして出かけるのか」
「お手紙を出したくて」
「そりゃかまわねぇけどよ」
こまったなぁと顔に書いて、車掌は巨体を窮屈そうに丸めた。あいまいな笑みでリンを覗き、
「俺としちゃあ、列車を出て欲しくねぇなぁ。お前さんは人族で、ここはトリビトの街だからよ。なにが起こるか責任持てねぇ。どうしても行かなきゃならないのかい。次の街じゃダメかい」
「……エドと同じことを言う」
口の中でリンがつぶやいた。トリビトならエイダもそうだ。「待って、待って」と追いかけてくる小さなあの子の同族たちを、どうして危険だと言い切るのだろう。エイダは危険でもなんでもなかっ

た。
　エドに感じた苛立ちの原因がハッキリした。家族をバカにされたようで腹立たしかったのだ。エイダの街だね、と喜んだのはついさっきだった。ここはエイダの同族たちが大勢いる街なのに。
「んあ？　何か言ったか」
　立ち上がり際に大きな身体を折り曲げて、車掌が尋ねる。リンは「いいえ」と応え、素早く車掌の脇を抜けた。そのすぐ後ろが列車の出入り口だ。今は停車中なので、扉は開け放たれている。
「あの、すぐ戻ってきますから！」
「ちょ、おい！　危ねぇって言っただろうが！　街へ出るなよ！？」
　エリックが引き止めるのを無視して、リンは列車を飛び降りた。
　自分でも、どうしてこんな嫌な子になっちゃったんだろう、と思いながら。

　がらんとした星間ステーションを抜けたら、そこは一面の白と青だった。
　建物は上空から見たとおり真っ白に塗りつぶされていて、粘土をこねたような曲線のフォルムをしていた。窓枠が小さく、出入り口が見当たらない、そんな不思議な建物だ。
　空を見上げたら、雲ひとつ見当たらないバケツで塗りたくったような濃い青があった。それもそのはずだ。この街は雲海を突き出ていたのだから。
（あの膜みたいなの、見えないんだ）
　外側から見たときはドーム状に膜がかかっていたが、内側からは見当たらなかった。違和感のない空が目に痛いほどだ。ステーションの日陰から外に出ると、凄烈な陽光にくらくらした。予想より温かくて、リンは上着を脱いだ。うん、これぐらいでちょうどいい。半そでで十分なすごしやすさだ。

ふと路上を黒いものが横切っていくのに気づいた。いや、あれは影だ。
「うわ……ッ」
リンの真上を、トリビトが舞っている。
間近で見たトリビトは、予想通り真っ白だった。髪も肌も、着ている服も、背に生えている翼も純白である。一人だけではない。視界いっぱいに見えたトリビトたちは、みんな真っ白だった。
（そういえば、エイダもこうだった）
エイダは隻翼のトリビトだったが、ミルクのような肌とふわふわした髪が白かった。トリビトとはこういう種族なのか。

リン、行っちゃヤだよぅ
どうして行っちゃうの

別れ際は泣きべそをかいて、リンの服をつかんでいた。嫌だ、いや、行かないで、と何度もなんども繰り返して大泣きしていた。エイダ、今は泣いていないかな。ケガはしていない？　アニエスの焼いたクッキーが大好きでリンの分も欲しがっていた、小さなちいさな女の子。
ぜんぜん、危険なんかじゃないよ。トリビトはきれいで、大空を泳ぐように飛んでいるんだ。エイダも空が飛べたらいい。そうしたら、きっと気持ちがいいはず。
片方だけに小さな翼をもつエイダは、オレンジの目が飴玉のようで白い肌は滑らかなミルクのようだった。リンの後ろをよく追いかけてきた。リン自身は腕白なニコラの後を追いかけていた。その三人を率いるのは十四歳のテッサで、テッサの上官がアニエスだ。――いつだって、兄弟四人でいたのに。
ときどき、どうしようもなく淋しくなった。ふとしたことで、家族を思い出すのだ。みんなどうしてるだろうか、と思いをはせれば涙がこぼれた。本当は、手紙なんかじゃなく、みんなの声が聞きた

かった。みんなに会いたかった。もう一度、名前を呼んで欲しかった。

ぎゅっと手紙をにぎりしめて、リンは切ない思いを押し込める。早く手紙を出して駅に戻らないと。エドにココアと何かをもらってくる約束をしたのだ。忘れてはいけない。

さて、郵便局はどこだろう。『オーウェイン』は、特徴のないよく似た建物ばかりが並んでいた。そういえば工芸の街ヴィーグエングも家の壁がずいぶん高く、思わぬところに道があって迷子になったものだ。ここはあそことはまた違った迷宮のようだ。どれもこれもが、同じに見える。

（どうして変わった街ばっかりなのかな）

不思議だった。リンの故郷は、もっと不規則にばらばらな建物が林立していた。大きかったり小さかったり、高かったり低かったりと外見もさまざまだった。レンガで組み立てた家や木の家、コンクリートでできた家。それでも粘土をこねたような建物は見当たらなかったが。

この街は新しい街のようであり、歴史ある古い街のようだ。今まで感じたことのない、不思議な雰囲気をしている。旅をしていて楽しいのは、こうして見知らぬ文化に触れることだ。家族への土産話がたくさんたまっていく。本当は、手紙だけじゃ全然足りないのだ。

「あのぉ、すいません」

丁度空から降りてきたばかりのトリビトに、リンは駆け寄った。駅の中にはヒトがいなかったため、郵便局の位置がわからなかったのだ。気軽に声をかけたのが過ちだったと、知りもせず。

トリビトは少年を見た瞬間、腰を抜かした。目を見開き、呼吸を止めて、リンを凝視する。「あ、あ……あ……」と、その顔は恐怖へと塗りかわっていく。落とした紙袋から、ころころといくつかのパンが転がった。トリビトが持っていたものだ。驚いて立ち止まっていたリンは、拾うために一歩踏み込む。それがまずかったのか。ガチガチと歯を鳴らしていたトリビトが、甲高い悲鳴を発した。ぴ

いいいい、ともきいいい、ともつかぬ声だった。
リンは耳をふさいだ。突然の悲鳴に頭が混乱する。え、え、と左右に視線をやっても、悲鳴をあげるようなものはどこにもない。顔をあげて、驚きに言葉をなくした。トリビト特有の赤く丸い瞳が、恐怖に見開かれていた。リンだけを映している。ざわりと、空気が揺れた。
「人間だ……」
その一言に、辺りを舞っていたトリビトの目が少年に集中した。ぎょろと動く、大きな虹彩を持つ瞳が見開かれていく。彼らは金縛りにあったように息を詰めていた。空気が凍りつく。
「あ、の……」
リンが喉にはりついた声を出したときだった。
「人間だあああ！！」
「ひい！　逃げろおおお！！」
「人間がでたぞ、人間が！　子どもたちを隠せ！　逃げるんだぁ！」
リンの声を合図に、蜘蛛の子を散らしたようにトリビトたちが消えた。耳の痛くなる悲と共に。
「あ、待って、あの！　パン……」
リンが捕まえたトリビトが振り返る。ギリギリまで見開かれた赤い目と絶叫に、リンは思わず手を放した。乾いた音を立ててパンが転がる。全身で拒絶するトリビトは、恐怖に怯えていた。リンは、それ以上声をかけられなかった。
（なん、だったんだろう）
過敏な反応にリンは身体を硬直させた。訳もわからず、恐ろしさに身がすくむ。どうしてみんな逃げていくのか、わからない。一歩、一歩と身体は後退した。空いっぱいに飛んでいたトリビトは消え、白い街と青空だけになった。そこにぽつねんと残されたのは、リン一人だけ。駅へ戻ったほうがいい――そんな声が聞こえた気がした。いちゃいけない。ここにいてはいけない。ドキドキと心臓が早鐘のように鳴っている。早く、はやく列車に戻らなければ。ここにいて

はいけない！
くるりと方向転換したリンは息を呑んだ。誰かが、いる。目がくらむ光の中で、リンをうかがう子どもがいる。同じようにぽつん、と立って。
（エイダ？）
妹のように見えたのは、トリビトだからだろうか。リンよりも小柄なせいだろうか。女の子だからだろうか。
あの子に訊こう。今度はもっとちゃんと話しかけるんだ。自分より小さい子だという安堵も手伝って、リンは緊張を緩めた。手紙を出したらすぐに戻ろう。エドの言うように、ここは、ちょっと変だ。
しかしリンがぱたぱたと近寄る前に、何かが飛んできた。ころころと転がったそれが石だと気づくのに、時間はかからなかった。ずきん、と肩に痛みが走る。
「え……？」
「何しにきたのよ」
羽毛のような髪の下で、赤い目がリンをにらむ。ぎゅっと握り締められた手は、ワンピースのすそをつかんでいた。まるで逃げるのを必死にこらえているようだ。リンは目をしばたたかせた。
「あの、」
「何しにきたのよ人間が！　出てってよ。ここにはあなたたちの欲しいものなんか、ひとつだってないんだから。出てってよ！」
きりりと眉をつり上げた女の子は、妹（エイダ）と同い年ぐらいだった。髪が短かったならエイダとそっくりだっただろう。そんな子が、顔を真っ赤にして怒鳴っている。
「ここにはもう何にもないんだから！　何の用なの。何しにきたの。今度はあたしを連れて行くの？」
無茶苦茶だった。初めてこの街に降り立ったリンは混乱するばかりだ。しかし、女の子は恨みのこもった目で睨みつけてくる。
「シエラ！」
別の声が飛んできた。少年が、上空にいたのだ。少年は翼をたた

んで降りると、「お兄ちゃん」と泣きそうな女の子を背中にかばう。
二人はよく似ていた。ふわふわな髪と頬に浮いたそばかすや気の強そうな目元で、兄妹なのだとわかった。同じように白い髪をきらめかせ、背中には翼を持って、真っ白な服を着て。そのはかない印象は、アニエスが話してくれた天使さまのようだ。しかし、二人の表情は決して慈愛に満ちたものではない。
兄は自分の服をつかむ妹の腕を取ると、叱りつけた。
「隠れろって警告が聞こえなかったのか。どうして勝手に出て行ったんだ」
「だって！　あいつ、あいつ、人間なんだよ。今度は何をするのか――みんながいなくなっちゃうかもしれないじゃない。お母さんも、お父さんも……お姉ちゃんだって連れていかれたんだよ！？　今度はお兄ちゃんが……お兄ちゃんまでいなくなっちゃうなんて嫌！」
「黙ってるんだ」
「でも――」
「黙るんだ」
シエラと呼ばれた少女は、ぐっと唇を結ぶと涙目でリンのせいだとばかりに睨んでくる。リンが口を開こうとしたときだ。
「何しにきた」

3

やってきた少女の兄も、リンに助け舟を出してくれないようだ。怒り混じりで刺々しく睨みつけられ、リンは怯んだ。このヒトもか。今にも手が伸びてきて、胸倉をつかまれそうだ。しかし、兄のほうは妹よりいくばくか冷静だった。

「用がないなら出て行くんだ。ここはトリビトの街。人間のいていい場所じゃない。怪我したくないなら、早く行け！」

声が礫（つぶて）になるなら、こんな感じだろう。赤い双眸がリンをうがつ。

「ぼくは手紙を……出したくてきたんだ……」

ニンゲン。

ニンゲンが出たぞ。

そんなことは言われたことがなかった。リンを見てヒトビトが逃げ出すなんてことも、ない。どのヒトも親切でやさしかった。困っていると、と手を差し出してくれた。泣いていると「どうしたの」と聞いてくれた。こんなに怖いと思ったことはない。

もの陰から、たくさんの赤い目玉がきょろりと動き、リンをとらえた。

うそだ！　人間がやってくるなんて。

ここには、人間はこないって言っていたのに！

だから言ったんだ。星間ステーションなんか建てるべきでないと。

でも、女王さまは私たちを守ってくださると仰ったわ。

見ろ！　女王は協定を覆した。人間がやってくるなんて聞いてない！

だが、あの人間はまだ小さい。まだ子どもだ。

そうだ。何を恐れる必要がある。

敵意に満ちた目線と、ひそひそした囁き声が、リンを恐怖の底へ

突き落とす。がたがたと今さらのように身体が震えた。トリビトたちの理不尽な怒りは、けれど真に迫っていてリンが悪いのだと思えた。自分を囲む輪が縮まってくる気がする。

――キミが行っても傷つくだけなんだから

今さらのようにエドの声が耳朶をかすめた。ああ、ああ、本当だ。エドの言うことは正しかった。でも、なぜ？

「さっさと帰るんだ。ここはお前のいていい場所じゃない。――早く消えろ！」

くるりとリンは背中を向けた。どくん、どくん、と脈打つ心臓が破裂しそうだった。……恐怖で。

リンを包んだざわめきが、いっそう大きくなった。

……捕まえろ。捕まえるんだ。

あの子どもを逃がすな。人間を倒せ、人間を！

自分を覆う影が大きくなる。口が、利けない。縫い付けられたように、動かない。どっくんどっくんと心臓がやぶけそうだ。こわい！　駆け出した足は、一直線に星間ステーションへ向かっていた。怖いこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい！　がちがち、と歯の根がなる。戻らないと！　だがあと少しのところでつまずいて、リンは転んでいた。足がもつれたのだ。

すぐさま身を起こしたが、その瞬間、真っ白な視界に黒いものがよぎった。路上に広がった影は、すっぽりと振り返ったリンを包み込む。ばさり、と聞こえたのは鳥の羽ばたきか。あ、と思った瞬間には足が地面から離れていた。

「シエラ！？」

驚きの声は、トリビトの兄のもの。何をやっているんだ、という問いかけだ。しかし、その返答は甲高い科白だった。

「こうしちゃえばいいのよ、人間なんか！」

リンが見たのはだんだん遠ざかっていく街だった。高くたかく舞

い上がっていくのは自分のほうだ、と理解するのに時間がかかった。まるで星間列車が旅立つような視界の変動。それが、街の端でぐるんと逆を向く。

自分が突き落とされたのだとわかったのは、空中だった。いやだ、と抗う術さえ少年は持てないまま、どんどん落ちていく。

ああ、だからエドは危険だって言ったんだ。

エドとリンにあてがわれた部屋は、三等客車のコンパートメントを六つ足してもまだ広かった。それもそのはずだ。ここは列車の二階部分に当たる最後尾。八両編成の列車は、一～二両目の三階部分が一等乗客のコンパートメントにあてがわれているのだ。そのうち二両目の列車最後尾を丸々部屋にしたここが、リンとエドのためのスペースになっている。リンが言うには、「ぼくのお家ぐらい広い」らしい。エドが、どれだけ狭いのさ、と呆れたのは内緒だ。

星間列車は、その種類にもよるがとても大きかった。数千、場合によっては数万位で乗客を収容できた。その上、生活に必要なものはほぼすべて揃っている。銀行や病院、カジノやバー、レストラン、大浴場、映画館、スポーツジムなど。クィダズ行きは小さいので、大きなグランドこそなかったが、バスケットボールならできるスペースはある。

クィダズ行きの列車は、星間列車の中でもランクが高く、基準が三等客車となる。四等客車がないのだ。三等客車は小部屋（コンパートメント）でそれぞれ区切られていた。エドがリンと出会った場所だ。現在二人がいる部屋との違いは、受けられるサービスの違いだった。ランクが上がれば上がるほど、出てくる料理や使える設備が変わってくる。

エドが小耳に挟んだ話によれば、三等客車でもコースがあって、追加料金次第でランクが上のサービスを受けられたりするらしい。リンが「列車って言うより、えーっと……ホテルみたい？」と呟い

ていたのを思い出す。
　それとは別に、共有している施設もあった。リンが安いカフェに出入りできるのはその為だ。
　大きなトラブルが列車内でそう起こらないのは、セキュリティ面が高いからだ、とエドは思う。これ見よがしな警備員や保安職員を必要としないのは、機器のサポートが大きい。また、この列車には四等客車がないため、むき出しのシートでぎゅうぎゅう詰めになることがない。乗客同士の接触が少ない分、トラブルが減るというものだ。それがリンを驚かせた点であった。
「そっか。コンパートメントなのに、自由席なんだ」
　あまり深く考えずにコンパートメントの扉を開けたリンが、目を丸くしていたのを思い出す。
　それも仕方がないことだ。リンが乗ってきた列車は、やたら古くてデカイ万単位収容の巨大列車だった。シートコンパートメント（座席区画）では六人がけのシートが、三列も並んでいたという。そのほうがエドには驚きだった。
「じゃ、とっても狭かったんじゃないの？」
　呆れて尋ねると、リンは真剣な表情でうなずくのだ。
「うん、もう人でぎっちり！　足元にも寝ている人がいたんだよ。シートとシートの間も、あんまりなくて……こう、足を伸ばしたら前のシートにすぐぶつかるんだ」
　限りあるスペースを有効活用しようと、自由区画はシートにあぶれた人々でいっぱいだったそうだ。かろうじてシートを確保できても、リクライニングできない、クッションの硬い代物だった、と大真面目にリンが言う。
「ずーっと座ってると、おしりが痛くなるんだよ」
　エドの頭はくらくらした。信じられない。
　耳にした設備内容は、一等客車（ファーストクラス）でも、ここの三等客車（スタンダードクラス）程度の代物だった。
　それぞれ風呂や食堂といった車両もあったらしいが、話を聞く限

りでは時代遅れでかなりの『年寄り（ロートル）』だ。型からして、おそらく五世代は昔の列車だろう。しかし二十両編成の、大きな大きな列車だった。

（今時あんな列車があるのか、なんて僕は笑ったんだ）

エンジャーグルで、リンの乗ってきた列車を、見下ろして。

この列車がそれであったなら、間違いなくエドは嘆願書を提出しただろう。別の手段で旅を続けるなり、車両や列車自体を変更してもらうなり、エドだけ待遇を変えてもらうなり……多少無茶でも実行してそうだった。手足を伸ばしただけで他人とぶつかるなんて、考えたくもない。

冗談半分でそれを口にしたら、困ったように眉をハの字にしてリンが微笑んだ。

「うん。この列車とは、本当に、ぜんぜん違うんだよ」

そのようすが少し寂しそうで、エドはまたもや自分の失言を悟ったのだった。リンが一人でいるのは、家族も一緒に旅をする費用がなかったためだ。エドにとっては最低の列車であっても、現地民（リン）にとっては違う。

それが満員御礼で運行されている現状を、忘れていた。

難民たちは休戦宣言がされて七年が経過しても流出の一途を辿っている。いつ、事態が戦争へと転がり落ちるかわからないためだ。自分たちの住む星が、そのとき戦争に参加しないとは限らない。

惑星（地上）まで戦闘が及ぶことはあまりなかったが、先の戦争で『フォーグル』は欠陥惑星にされるほどの被害が出た。そのことが星域の人々を震え上がらせたのだ。やろうと思えば、大気圏さえごっそりと奪う兵器がある。星そのものが一瞬で消滅する可能性もある。非戦闘員であっても、容赦なく抹殺される。

異種族は人間を憎んでいる。容易く命を切り捨てる――

事実無根の噂は、瞬く間に広がってパニックを引き起こした。そんなことはありえない、と報道されても亡命希望者は後を絶たなかった。人々は平和を求めて、辺境や戦争を放棄した星へ逃げている

のだ。星間列車もその手段の一つだった。金を貯めて、やっとの思いで人々は列車に乗り込んでいる。
貧富の差が激しい『フォーグル』では、あの廃棄寸前のポンコツでさえ重宝されているのだ。リンの家族も、豊かとは決して言えない暮らしを強いられているなら、エドの発言は思慮に欠けていた。
「ごめん。悪気はなかったんだ……。その、キミたちをけなしているつもりは、なくて」
すぐさまエドは謝った。気にしてないよ、とリンは笑って許してくれた。しかし、エドは自己嫌悪が拭えない。
仮初であれど、休戦宣言がされるまでずいぶん長い時間がかかった。あの星の傷は、どれほど深いものなのだろうか……。
わずかにエドの表情が曇る。そんな場所からリンはやってきたのだ。
工芸の街以降、沈みがちだったリンの気を晴らしたかったがため発言が、裏目裏目に出てしまっている。リンがホームシックにかかっていると気づいていたのに、どうすれば良いかわからない。先ほどだって――やっと屈託なく笑ってくれたのに、エドは水を差さねばならなかった。
オーウェインは危険なのだ。
リンが、危ないのだ。
そうとも知らず、リンは街を見て歓声を上げ、妹の話を楽しそうにした。家族の話ができるのはうれしいだろう。妹と同じ種族だというなら、なおさらだ。だが、オーウェインは感傷に浸れるような甘い場所ではない。
「卑怯だったかな……あんな言いかた」
膨れ面になったリンを思い出して、エドは苦笑した。無邪気なリンが悲しむのは、傷つくのは、嫌だったのだ。ちゃんと理由を説明することも考えていた。だが、それを教えるとリンの屈託のなさが消えてしまうような気がしたのだ。
そして今、広いスペースの窓際にあるシートで、エドは調べ物を

していた。ヴィーグエングでの事件が気にかかったからである。
エルザ・スコーピオともあろう女があっけなく捕まったことが、腑に落ちなかったのだ。奴はこの二十年近くを逃げ回ってきた。義賊だと自称する通り、彼女の狙う獲物はいつだって何らかの裏がある。その裏を暴き、世間に露呈させていたのだ。
いただくのは名誉。
そう言い残すエルザが盗んだものは、宝石や金などの類以上に価値のあるものだ。彼女がつかんだ完璧な証拠は、毎度人族の世界を揺るがした。正攻法では何年もかかってしまう、高級官僚や政治家などの権力者の汚職も、彼女は次々に暴いてしまった。とくに戦争を強行しようとする輩には容赦がない。戦争の裏側で暗躍している武器商人たちやそれに繋がるものたちを、徹底的に追及した。ゆえに、莫大な賞金がかけられたのだ。
弱者の味方――確かにそう名乗れるのは明らかだ。そして、彼女が市民たちに慕われていることも。二十年近くを逃れてきたのは、協力者や賛同者の多さを物語っている。
エルザは神出鬼没だが、種族の境界を越えて活動していなかった。あくまでターゲットは人族であり、こちら側には干渉してこなかったのだ。しかし、ここ三年弱の間、彼女は境界を侵している。あちら側での活動は、それを証明するようにぐっと減っていた。一体なぜ。
（怪盗フルムーンだなんてバカバカしい仮面をつけて、さ）
気にかかるのは、エルザだけではなく、あのとき出会った警察のほうもだ。女装していたことはともかく、なぜ彼があの場所に現れたのだろう。エンジャーグルからこちら側は『僕たちの世界』なのに。
（宇宙警察のエリートさんって部分は本当だと思うけど……人族には人族の警備範囲があるはず。そこを超えてまで追いかけてきた理由はなに）
アベルとエルザの二人は訳アリのようだったが。

（それに、エルザはなぜ、たった一人で行動してたんだろう）
仲間が捕縛されたとはいえ、無茶な行動さえしなければ、工芸の街を脱出することは可能だったはずだ。動かなければならなかったと、いうのだろうか。
なぜリンは狙われたのだろう。いや、狙われたのはリンの鞄だったか。なぜ、『こちら側』であんな行動をとる必要があったのだろう。たまたまエルザが、こちらに来ていたからだろうか。

4

平和を維持するために『住み分けること』が重視されてきた。『中立の街（エンジャーグル）』でさえ、資格を持ったもの以外は人間たちの領域へ送り出すことを躊躇っている。あそこのヒトビトは商人が占めるゆえに、人族への偏見があまりない。いち早く戦争についての疑問を投げかけた街でもある。それでも二の足を踏んでいるのは、人族を慮ってのことだ。

エドは大きな目をすがめると、シートにもたれかかって大きく息を吐き出した。エルザを検索にかけても、自分たちの領域では望んだ答えが出てこない。

（なにかが起こってるんだ。人族のあいだで）

あのエルザが動くような何かが。

知らないことが多すぎる、とエドは臍を噛んだ。問いたかったことは、工芸の街ではぐらかされたっきりだ。こうして自分で動くしか情報は手に入らない。

（まさか、戦争がまた……？）

エドはため息をついた。ただの憶測だ。エルザはもう捕まったのだ。列車との接続を中断し、エドはカードブックをしまった。何か飲み物を、と手を伸ばして気付く。

リンがいない。

「え、まだ戻ってないの」

思案に熱中していて気付かなかったが、もう十五分が経っている。いくら長いといっても長すぎる。嫌な予感がして、エドは仕度もそこそこに立ち上がっていた。

どうせ誰かのところへ遊びに行っているに違いない。リンは人懐っこく、子どもなのでいつも誰かに構われている。いつだったかはヘビ男と一緒にかくれんぼをやっては「見つかっちゃうの」と楽しそうに話していた。だけど今回は胸騒ぎがした。探しに行くのは、

毎度エドの役目だとはいえ……。
そうしてエドは知る。
車掌のエリックからリンが外へ飛び出して行ったということを。
すぐ戻ると行って、いまだ戻ってきていないことを――

十五分ほど前に出て行っちまったきり、戻らねえ。
がらんとしたホームで改札口を眺めていた車掌の言葉が、何度もなんどもエコーした。列車の下方では自動（オート）で動く機械が荷物の出し入れを行っていた。そろそろ終了間際だ。オーウェインのホームには駅員が一人もいない。機械だけが静かに、忙しなく動き回っている。一拍置いて、くらりと視界が傾いたのを、エドは堪えた。
「どうして、止めなかったんですか！」
食って掛かったエドに、車掌も苦ったようすだ。
「止めたさちゃんと。だが飛び出して行っちまったんだよ」
「無理にでも止めるべきでしょう、あなたは。何見送ってるんですか！」
「お前さんこそ、教えてやらなかったのかい？」
呟いたエリックをにらみ付け、ああもう、とエドは頭をくしゃくしゃにした。どうしてヒトの忠告を無視するのだろう。釘をさしたのに伝わってなかったのか。リンが出て行くと告げたとき、自分も行っていれば止められたのに。
しかし落ち込んでいられなかった。すぐさま顔をあげ、エドはコンパートメントにとって返した。手早く荷物をまとめ「探してきます」と車掌に告げる。トランク片手にステーションを駆けるエドを、エリックが慌てて追いかけた。
「諦めろ。お前さんまで列車に遅れちまう」
諦めろ？　カッとなったエドがつかまれた腕を振り払った。緑の瞳に怒気が宿る。

「あなたがそれを言うの」
心の内にあるのは、エリックに対する怒りと飛び出していったリンへの怒り。でもそれ以上を占めるのはエド自身への怒りだった。あいつが納得していないことぐらい想像がついたのに、どうしてちゃんと見張っていなかったのか。言うことを聞かないリンもリンだが、不注意だったのはエド自身だ。あれほど危険だって言ったのに。
――リンが傷つくことが嫌だった。
トリビトを見たとき、家族といっしょだと言って嬉しそうだった。知らないままでいて欲しかったんだ。
――だけどそれは、僕の都合だった。
落ち込んでいたリンを、さらに突き落としたくなかった。悲しむことは目に見えていたのだ。
しかしこんなことになるぐらいなら、ちゃんと全部、話せばよかった。
「アイツにとって、この街がどれほど危険か知っているあなたが。一人で行かせたあなたが、それを言うの。バカみたいにホーム眺めても、あいつはここに今、いないのに？」
エリックの静かな眼差しに、エドは唇を噛みしめた。彼のせいにして失態を誤魔化そうとしている自分に気がついたせいだ。リンが傷つくから、とエドは逃げたのだ、真実を打ち明けることを。そしてまた目を逸らそうとしている、自分のミスから。
ぜんぶ見透かして、なにも言わないこのヒトに、罪をなすりつけて。
（最低だ）
エドはエリックの腕をつかんでいた手を、力任せに振りほどく。これが八つ当たりだと――わかっている。
（僕のミスなんだ）
懐中時計を見ると、もう停車時刻はとうに五分を切っていた。止めたか止めなかったか……そんなことを言ったってリンはここにはいない。揉めている時間はない。

「あいつをこんな街に、置き去りにするつもり？」
エリックは無言のまま、初めて視線をそらした。エドはそれを見て、唇をゆがめる。
「だったら、僕だけでもあいつの傍に行く。あなたにとって僕ら（乗客）は積荷の一つかもしれないけど、あいにく意思を持っているんだ。――邪魔しないでくれる」
「列車は、待てねぇんだ。わかってんのか」
恐らく、残り時間でリンを探し出すのは不可能だ。リンは「すぐに戻ります」と言って出て行ったのだ。列車の出発間際になっても、戻ってこないことはありえない。そして、この街は人間にとって危険すぎる。何らかのトラブルに巻き込まれた可能性も否定できない。
ゆえに、エドは自分の荷物も持ってきた。その覚悟を決めて、だ。
車掌をひたりとエドは見据えた。
「僕らは助けてもらおうだなんて、考えていない」
低い声でエドは呟くと、トランクを握りしめて走った。車掌が力なく止める声を背に受けて、その姿は光の中にとけていく。真っ白な街のどこかに、リンがいるはずなのだ。
どうか無事でいて、とエドは願わずにいられなかった。

残されたエリックは重い息を吐いて、少年を再び見送った。エドの金色にきらめく瞳は必死で、止めたって無理なことなどわかっていたのだ。リンもそうだった。真剣な表情を垣間見せた少年に、エリックの言葉は届かなかった。二人とも、この列車を飛び出していってしまった。
でも言うしかねえじゃねえかよ。俺は車掌なんだから。
「諦めろ、か……。諦めきれねえからこの列車はあるんだろうよ」
無人の星間ステーションの薄暗い内側で、淡々とした声が響いた。軽くかぶりを振るそのようすは、疲れた老人のようだった。諦観に

も似たまなざしは、エドの消えたほうを見る。
「……なにもあの坊主だけじゃねえんだよ、俺が送り届けた奴は」
エリックは、帽子を目深にかぶり直すと、響く自分の足音を聞きながら、列車に足をかけた。星間列車は時刻通りに出発するものだ。
客が戻ってこなくとも。

「戻ってこいよ、次もちゃんと」

＊　＊　＊　＊

5

『朝よ、ほら、みんな起きて』
アニエスの声が、聞こえた。
『もう、遅刻しちゃうでしょう？　ほらニコラ、リン！　テッサはもう起きているわよ』
起きなさい、というアニエスの声でリンの一日はいつだって始まった。ご飯のにおい。鳥の声。お日さまの白い光。家の外を通る人々の気配。枕を放さないニコラの「もうちょっと……、寝かせて」という声。それさえ見越して起こすアニエスの、「五分だけよ」と苦笑する声――
いつもの、日常。
リンの意識が浮上してきたとき、がちゃん、がたん、と遠くで大きな機械の動く音が聞こえた。ああ……ラスの工場だ。リンの故郷の工場では鉄くずを集めては再精製する作業をこなしていた。周辺諸国で使い物にならなくなった機器を一手に抱え、ラスの街は生きてきた。そこで集まる労働者を相手にアニエスは店を開いていて、リンたち子どもも工場へ手伝いに行っては日銭を稼ぐ。いつか自分たちもそこで働くのだ、と当然のように思いながら。
ラスの街には巨大なゴミの山が鎮座していた。ゴミと言っても電化製品からソファやベッドまで様々なものがある。それらはお宝の山だ。まだ動く機器から修復すれば使えるものを分類し、売り払う。壊れて使い物にならないものは解体し、備品ごとに分け、各下請けへ流す。貴金属は種類ごとに仕分けされ、新たに生まれ変わっていくのだ。これらが工場の仕事だ。そうしてラスの街は動いている。
暇ができれば、よく兄のニコラとお宝を求めて、リンはゴミの山（親しみをこめてバケットと呼ばれていた）へ分け入った。使えそうなものがあったら、工場のヒトにお伺いを立てて持ち帰った。新品同様の『掘り出し物』も中にはあって、遊び半分で二人は工場へ

通っていたものだ。
最新の機器は見当たらないが、生活するのに不便さを訴えるほどではなかった。コンピューターのある生活をしてこなかったからだろう。その恩恵がわからないのだ。あそこで最新と呼ばれる設備は、大昔のテクノロジーではないかと思う。
今の列車に乗ったら、よくわかった。あまりにも……世界が違いすぎたから。バスルームやトイレ、座席（シート）に照明、そんなものでさえ全く違うのだ。便利な世界。発達した世界。みんなが幸せそうで、色んなヒトたちのいる世界。リンの住む世界とはちがう、異質な場所。
まるで夢だと言うような。
だけど、ラスの街ほどすてきな場所なんかないよ。そう、リンは思う。あの街には、かけがえのないものばかりがつまっている。たとえエドに笑われたって――あそこがぼくの故郷で、あの街以外に、ぼくは何もいらないのだから……
リン。
家族に名前を呼ばれるのが好きだった。
リン。どうしたの。起きないの？
アニエス、ううん、待って。すぐに起きるから――
目覚めに眠気は伴わなかった。うすく目をあけると、視界がぼやけている。目をこすったら何故か頬がぬれていて、泣いたのだろうか、と不思議になった。夢のことは覚えていなかったけど、胸が苦しかった。それでもほの暗い部屋と、遠くで聞こえる機械音から、癖でとなりで眠っているはずのエイダを起こそうとする。右手はめがねを探そうと枕元へ手を伸ばして、左手はエイダの肩を触る……はずだった。
「……？」
めがねがない。
いつも枕元に置いておくのにめがねがない。
触れたのは、冷たい床の感触。

「エイダ……？」
不透明な視界に目をこらし、リンはむくりと起き上がる。すると、肩や腰、背中にずきりと痛みが走った。
「いた……」
はら、と落ちたのは、かけられていた見慣れない厚手の布だ。リンはぼやける視界に目をすがめて、改めて辺りを見渡してみた。周りは、継ぎ目のない平坦な壁と床だ。触れるとひんやりして冷たかった。つるりとした表面だ。耳を澄ませると、雑音に混じって時計の時を刻む音が聞こえる。この薄暗い室内のどこかに、時計があるのだ。
ベッドもやクローゼットは、なかった。リンは、つるりとした床の上に直接転がっていたのだ。近くにクッションひとつ見当たらない。そもそも、エイダの大好きな大きなぬいぐるみもない。リンのお気に入りのラジオもない。窓辺から差し込む光もない。
ぼんやりした頭が覚醒するにつれ、リンの顔が恐怖に彩られる。ここは、ラスの街じゃない。ここはぼくらの家じゃない。
「落ちたんだ」
あの白い街から、ぼくは落とされた――
声に出して状況を確認したら、トリビトたちの声が頭をよぎった。

ニンゲンダ
ニンゲン

捕まえろ！

今さらのように恐怖がぶり返し、リンは身をすくませた。ウサギのように部屋の片隅に這い寄ると、小さくなる。かけられた布を頭からかぶってぎゅっと目を瞑った。
こわい。
どうしてこんなところにいるの。ここはどこなの。どうして、ぼ

くは生きているの。あんな高いところから落とされたのに！
そのとき、不意に背後のかべが消えた。背中を預けていたリンは、支えを失って眩い光の下へ転がり出るはめになる。刹那、世界が黒から白にぬりかわった。そこで、呼吸が止まる。
「……っ？」
誰かがいる。飽和状態の視界に入ってきた裸足の『足』を見て、リンは凍りついた。トリビトなのか。こっちへ来る。気付いた瞬間から息ができない。血の気が引く、という感覚が今なら理解できた。目と鼻の先で、足は止まる。顔を、上げられない。つ、と汗がこめかみを流れていく。身体がみっともなく震える。
硬直するリンの背中へ、何かが触れた。ぎゅっとリンは目を閉じ、全身を強張らせた。
しかし触れたものは厚手の布だった。身体をすっぽりとおおった布は、さっきまでリンがかぶっていたものとよく似ている。
逃げることさえできないリンの前で、そのヒトは膝を折って顔を覗き込んできた。現れたのは黒い髪で黒い肌をした、お姉さんだ。しかし目だけが、赤い。あのトリビトたちと同じような真紅だ。きょろ、とリンを四方から見つめてきたあの目。物陰から聞こえてくる、囁きが脳裏に繰り返される。
リンが泣きそうな悲鳴を上げた。いやだ、こないで！　こっちに来ないで！
こないで、と半狂乱で声をあげ、かたかたと縮こまった。だがいつまでたってもなにも起こらない。殴られることも、胸倉をつかまれることも、罵声も、石も飛んでこない。
「……？」
そろ、と目をあけてみると、困ったようすのお姉さんがいた。首をかしげ、困惑顔でリンを見つめている。それは「どうしたの？」と問いかけているようだった。リンはおどおどしながらも、ずり、と後ろへさがる。黒くて長い髪の彼女は、テッサよりも年上だろうけど、アニエスほど大人には見えない。幼さの残る顔立ちで、不意

にリンの腕をつかんだ。身体が恐怖で弾む。
「いやだ、ごめんなさい、こっちこないで！」
すると、真っ黒なトリビトはわずかに眉をよせた。「なぜ？」と問いかけているようだった。困ったように彼女は近づくのをやめ、距離をとった。ゆっくりと片手を前に出し、リンの顔をじっと見つめる。開かれたトリビトの手のひらを見て、リンは「あ」と声をあげた。
「ぼくのメガネ！」
ただし、フレームは歪んでレンズにみごとなひびが入っていた。これでは使い物にならない。申し訳なさそうな彼女からメガネを受け取ると、リンはぎゅっとにぎりしめた。大切につかっていたメガネだった。ボロボロのメガネに比べて、リン自身がこの程度の怪我ですんだのは、幸運としか言いようがない。
そうして、ハッとなる。いったいここはどこなのだろう。今の時間はどれぐらいなのだろう。列車はまだ停車しているの？
とたん、リンはあたふたと周りを見渡した。身体が痛むのも無視して、がばりと起き上がる。かばんがない。背負っていたが、落っこちた拍子にどこかで引っ掛けたのだろうか。躊躇ったのは一瞬だけだった。リンは恐る恐る、口を開く。
「……あの、おねえさん」
返事が返ってこない。相手のほうも、なぜだか戸惑っているように見えた。
「ぼくのリュックサック知りませんか？　メガネ以外に、ぼくの荷物も見なかった？　大切なものなの、知らない？」
だが返事はない。辺りを見渡しても、それらしいものなんかない。あれだけは、失くしてちゃいけなかった。絶対手放してはいけないよ、とローラおばあちゃんに言い含められた。それをリンも重々承知していたのだ。手放さないよう注意していたのに、どこへいっちゃったのだろう。
「ねぇ、かばん、知らない？　ないと困るんです、おねえさん！」

「だめだよ」
唐突に割り込んできた第三者の声に、リンは驚愕した。こつ、こつ、こつ、と響く足音が聞こえてくる。それがリンの近くでぴたりとやんだ。何が起こるのか、不安でいっぱいのリンの眼前で、前触れなく壁に穴が現れる。ヒト一人がくぐれるほどの――扉ほどの大きさの、穴だ。
そこにいたのは翼のない、人。
背中に光があるせいで、顔まではわからない。
「だめだよ。いくら話しかけても」
男の人だった。どこか悲しみに彩られた声色で、淡々と彼は言った。
「彼らは言葉を使わない。そういうトリビトなんだ。……黒種と呼ばれる種族だよ」
リンの青い目が涙を浮かべて男の人を見つめる。
「……こくしゅ？」
「そう。欠陥品、という黒い翼を持つ者たちのこと」
男の人は少し淋しそうに微笑んだ。

欠陥品、という黒い翼を持つ者たちのこと――
思わずリンは、おねえさんを仰いだ。そこで、息を呑む。黒い翼の彼女は、静かな笑顔のままだった。あんなことを言われたのに、どうしたの、と問いかけるやさしい表情のままなのだ。それが、リンの心をえぐった。思わず彼女の腕をつかんで、
「あのっ」
そう言ってみたが、続きが言えない。欠陥品なの？　なんて問いかけられるはずもない。だが男の人の言葉を聞いても、彼女は動じていなかった。何かが欠落した種族……言葉を解さないヒトビトなのだ、と本能的に悟った瞬間だった。そういえば、おねえさんは一

言も話していない。リンのために膝を折り、リンのために目線を合わせてくれるけれど、メガネをもって来てくれたけど、一言もしゃべってはいないのだ。その戦慄に、不安がさざ波のように押し寄せてくる。

こんなヒトたちもいるのかと。

疑問を返すように、助けを求めるように、リンはもう一度男の人を見た。すると、

「ところで坊やは、どうしてこんなところにいるの？　このケガはどうしたの？　この子がとても困っているよ」

迷子？　とその人はリンの前でかがみこんだ。黒っぽい髪はリンと同じような癖っ毛で、白いものがところどころ混じっていた。人の良さそうな顔立ちの中、青い瞳が印象的だ。リンのものより少しくすんでいる。笑うと目じりが下がって、一層やさしそうに見えた。

そして間近で見るとおじさんだった。目元と口元に笑い皺がある。お兄さんだと勘違いしたのは、ひょろりとした体つきのせいだろう。リンの知る『おじさん』という人たちは、みんな筋肉むきむきなごつい人たちばかりだったから。

男が着るパールグレーの服は、何かの制服のようだ。ひざ上まである上着が、細身の身体によく似合っていた。

「ぼくは……」

そう言ったきり、リンの言葉は喉の奥に落っこちた。ふと視界に時計が目に入ったのだ。今の今まで全然目につかなかったのは、暗がりに紛れていたためだ。男の人によってもたらされた光源が、時計を照らし出している。

目を見開いて固まったリンを怪訝そうに見つめた男の人は、少年の視線を追いかける。

「ああ、時計？　少し変わっているのかな」

わかる？　と男が時計に触れた。それはエドの持つ懐中時計とはまた別の形をしている。一～十二の数字のようなものはあるけれど、丸くない。縦に長い。それが、かち、かち、かち、と動いているの

がわかる。乗ってきた列車に置いてそうな、骨董品だ。
リンは視力の悪い目を凝らした。
「あの、今、何時ですか……？」
恐々尋ねたリンは、女の人の手をぎゅっとにぎった。彼女はリンのそんなようすを不思議そうに見下ろす。手のひらが、汗ばんでいた。
男の人が、時計を見たまま、「今は十六時十分を過ぎたころだよ」とにこやかに教えてくれた。
「ほら、こっちの針が一番下までいくと、上までジャンプする仕組みになっているんだよ」
古時計にそっと触れて、男の人は時計の見方を教えてくれる。こちらが長針。こちらが短針。そしてこれが秒針。慣れると結構面白いんだよ。なんて台詞は、リンの頭を右から左に素通りした。
リンの喉はからからになっていた。声が張りついて、出てこない。だが、訊かずにいられない。リンは答えを十分に予測しながらも、問いかけた。
「……あの、列車は？」
男が振り返る。驚きに険しい表情をのせていた。その唇が動くのを、リンは見ていた。
「十三時発の星間列車は出てしまったよ。次の到着は一月後だ。そんなことも、知らずにいたのかい」

6

聞きたくない言葉を聞いた気がした。でもリンの目はゆっくりと動く薄い唇を見つめてしまう。

「坊やはあの列車に乗ってきたんだね。……どうして、降りてしまったんだ。ここが危険だと、教わらなかったのかい」

リンは数秒固まり、「うそ！」と叫ぶと首を左右に振る。うそ、うそだ、と狼狽しながらも、列車はないだろうか、と目があちこちを探すのだ。そうだ、外に出なくちゃ。

「わ、どこへ」

身体があちこち痛い。それでもリンは一目散に部屋を飛び出した。出てすぐの場所は通路だ。室内と同じくのっぺりした印象を抱いた。どこかおもちゃみたいな空間だ。窓一つ、扉一つ見当たらない。生活する空間だとは思えない素っ気なさだ。家屋ではないのか。

ここはどこ。外へ出るにはどうしたらいいの。右も左も記憶にない場所だった。左側を突っ切ると、すぐ壁にぶち当たる。

「そっちは何もないよ。突然どうしたんだい」

男の困ったような声が響いた。ターンしたリンは追ってきた男の脇を抜け、外を目指す。そこへ、先ほどの黒いトリビトの少女がいた。彼女が手をかざすと、唐突に壁に穴が開く。リンは何も考えずそこへ飛び込んだ。

外へ――

とたん、薄暗い街並みが視界いっぱいに広がる。一瞬夜なのか、と思った。だが、ちがう。視力の悪い目をこらし、リンは懸命に辺りを見た。これは黒い霧と、この時間ならあるべき日差しがないせいだ。……ここはいったいどこだろう。三度目の声なき問いかけは、力なくリンの内側をたたいた。

碁盤の目のように整然と整っていた白い街とは全然違う。無造作に乱雑に立ち上がる建物は圧迫感さえ与えて反り建っていた。隙間

を縫うように入り組んでいるのか、道の見通しが悪い。薄汚れた壁やガラス戸、むき出しの配管。ゴミは散らばっていなかったが、倒壊した建物の欠片が視界の隅にうつる。日光が当たらないせいなのか、緑の一つも見当たらなかった。まばらに歩いているヒトは翼があったりなかったりした。だが共通しているのは、灰色や薄汚れた服を着てうつろに歩いているところか。

列車の窓から見えた、あの楽園のような光景はどこに消えたのだろう。

ゆっくりと首をそらせ、リンは息を詰まらせた。あの青空が、なかった。トリビトたちが優雅に泳いでいたあの空が、ない。幾重もの網目がまず目に入り、街の中央に立つ杭のような建物が右手にずーっと高く伸びていた。その上に広がっているのは、今にも落ちてきそうな逆さまの街。ここを覆う傘のように広がっている街だ。

声にならない悲鳴をリンがあげた。あれが天井都市だ、とわかったからだ。ここから見たら、まるで大きな樹が枝を伸ばしているようだった。

だとしたらここは、

「……地上都市（ロールエム）」

ぞわり、と悪寒が背筋を這った。

（ぼくは、あそこから落とされたんだ）

身体から力が抜けて、リンは腰砕けに座り込んだ。無言で、黒い翼の彼女がリンを気遣うようにそばへくる。その手をリンは、つかんだ。左手はこわれたメガネをにぎりしめたまま。

「あの、列車はどこですか？　星間列車はどこ？」

リンの青い目が涙でにじむ。欠陥品だよ、という男の台詞が頭をよぎった。このヒトは望む答えを与えてくれない。しかし、問わずにいられなかった。

「列車はどこなの？　ステーションへはどうやっていったらいいの？　ねえ答えて！　答えてよおっ！　ここはどこなの！？」

耳ざわりな甲高い声が、自分の声だと気づいた頃には、リンは男

の人に押さえられていた。はあ、はあ、はあ、と肩で息をするリンに、彼は険しい表情をした。
「列車はもう三時間以上前に行ってしまったんだよ。ここは黒の街だ。ステーションはない。坊やは……乗り遅れてしまったんだ」
その言葉がリンに止めを刺した。乗り遅れてしまった――
リンの顔が見る間に青ざめていく。男は、急にへたり込んだリンを慌てて支えた。肩をつかまれ、リンは驚いたように男を仰ぐ。
「あ……えと、……あの……」
言葉がうまくつむげなかった。乗り遅れてしまったのだ、と改めて指摘されて、頭の中が真っ暗になったのだ。突然底抜けの穴に落ちた気がした。どこまでもどこまでも落ちていく錯覚がした。一歩も動けなくなる。しゃがみこんで、うずくまって。
「とりあえずもう一度あの部屋へ戻ろう。外の空気は毒だから辛いはず」
促されるまま、うつろに足だけが動いた。うそだ、と思った。うそだ、という言葉だけが頭の中を埋め尽くした。思考が停止する。ぺたんと座り、リンは必死に自分を落ち着かせようとした。だが、置き去りにされたショックは消えない。目を閉じ、どうしたらいいか考えるのだが、なにも思いつかない。
あの奇妙な時計はちくたくちくたく、進んでいく。あの針が動くたび、気を失っていた時間を思い知らされる。降りちゃダメ、とエドにあれだけ言われたのに飛び出したバカな自分を。
アニエス、と呼ぼうとしてリンは口をつぐんだ。アニエスはいない。もうずっと傍にいてくれてない。ぼくしか、いない。ぼくしかここにいない！
でたらめな、声ばかりが出た。言葉にならず、ただ、あ、とかう、と繰り返す。身体が、思うように動かない。考えることが、声にならない。荷物もない。
キミ、一人なんでしょ？　だったら荷物の管理くらいしっかりし

なきゃ！

不意にエドの言葉が頭をよぎった。エンジャーグル（最果ての駅）に到着したとき、リンは嬉しくなって鞄を放り出してしまった。やっとここまできた、という思いが溢れてきて、アニエスとローラおばあちゃんに散々言われたことを指摘されたのだ。

そうだ。鞄を、探さなきゃ。

リンは、クィダズまで行かなければならない。そのために、あの荷物は必要だ。リンは、ぎゅっとまぶたを閉じると自分の顔を思い切り叩いた。男の人がぎょっとして止めようとするが、リンの手は構わず頬を引っぱたく。痛かった。だけどこれは罰だ。

しっかりしなきゃ。

しっかりしなきゃ！

鞄を探す。立ち上がる。座り込んでいても、だれも助けてくれない。何も変わらない。だから、自分が行かなきゃならない。立ち上がれ！

リンはぐっと顔を上げた。行かなければ。とりあえず、荷物を探さなければ。

「ケガが痛むだろうに、無茶をする子だなぁ。だがよかった。打ち身と擦り傷だけのようだね。きっとネットがいい具合に引っかかったんだろう」

男は出て行こうとするリンを、問答無用で抱えあげた。細い腕が小さなリンを軽々抱えてしまう。ビックリしたのはリンだ。

「やっ！　はなして！　はなして！」

鞄を探さなきゃならないのに、とリンが喚くと、男の人は苦笑した。だいじょうぶだよ、とつぶやいて。何がだいじょうぶなのか、荷物を探さなければならないのに！　リンが暴れても「だいじょうぶだよ」、と男の人はささやく。微笑んでだいじょうぶだよ、大丈夫、大丈夫だから……と何度もなんども口にして、そのたびリンの背中をやさしく叩いてくれる。暴れていたリンだが、徐々に肩を落

とした。やさしい言葉とたたくリズムの心地よさに、リンはぎゅっと男の胸をつかんだ。顔を寄せて、すがってしまいたかった。

（泣きたい）

勝手に流れる涙じゃなく、悲しいから辛いから溢れてくるのではなく、泣きたくて、泣いてしまいたかった。この人は、それを許してくれる気がした。両足で立ち上がらなくとも、駄々っ子のように泣き喚いても、許容してくれる、と。どうしてそう思ったのかは、わからない。

大丈夫だよ、という言葉がすとん、と胸を突いたからか。

（泣いて、しまいたい、アニエス）

泣いちゃダメよ、と言われてきた。懸命にこらえてきたつもりだった。今まで何度か泣いてしまったが、わんわん泣いたのはエドに会ったあのときだけだ。すん、と鼻を鳴らしてリンは目をこする。

「あの列車に乗らなきゃ、いけなかったんです」

嗚咽交じりにつっかえつっかえ、男の人に訴えた。泣くことより、荷物の行方を尋ねたかった。そのためには、話さなければならない。今はまだ、泣いちゃいけない。今は、まだ。

「あの列車に乗って、行かなきゃ、いけなかったんです」

気丈に話すリンの背をぽんぽんさする男の人は、うん、うん、と相槌をうってくれた。

「危ないって、ここは降りちゃダメって、言われてたの。止められてたの。なのに、降りちゃった。ぼくは、トリビトに会いたかったんだ。だけど、トリビトのヒトたちに囲まれて……突き落とされて」

「そうだったのか……。こわかったね。驚いただろう」

こくん、とリンがうなずく。

そう、怖かった。訳がわからず、逃げた。しかし、捕まってしまった。

「ここは人間が訪れるには、酷な街だ。坊やが悪いわけじゃないんだけど、辛かったね」

やさしい言葉が心地よかった。抱き上げてくれる腕と、落ち着い

た大人の声。安心する。弱りきった今なら、何もかも、ゆだねてしまいたかった。子どもであることに甘えて、思考を停止して。

だが、脳裏をよぎる言葉がある。リンだってエンジャーグルに来るまでの間、いろんな人に会ったのだ。切ない思いも、悔しい思いも、歯がゆい思いも、悲しい思いもしてきた。その経験が、リンを立ち上がらせようとする。

（アニエス、アニエス、アニエス、ローラおばあちゃん、エド……、エド！）

リンはまぶたをきつく閉じると、歯を食いしばった。しっかりしなければいけない。親切な人ばかりとは限らないのだ。フーリー警部補は、警察だったからリンはホッと安堵した。彼の言葉は本心だとわかったから、すぐ信用できた。しかしこの男は、どういう人かも、何のためにここにいる人なのかも、わからない。

人を油断させるためにやさしくして、裏切る人もいるの。

逆に言えば傷つけるために、近づいてくる人もいる。

あなたの感覚では理解するのが難しいかもしれないけれど。

そう言ってくれた人がいた。その人のためにも、リンは気を付けなければならない。簡単に誰かを信用してはならない。信用する根拠を探し、納得してから心を開く。旅をして学んだことだ。騙されないために、賢くならなければならないのだ。

（ひとりだから）

泣きたくても、誰かに頼りきってしまいたくても、リンはひとりだから、まず己を守らなければならない。安全だと思えるまで、気を張ってなければならない。差し伸べられた手も、疑ってかからねばならない。

「それで、かばんがどうしても必要なんです。アレがないと、困るんです。ぼくが悪いんだから、ぼくが、ちゃんと、しなきゃ。探さなきゃ！」

エドのときは同じ子どもだから、という気安さがあった。列車の内部も安全であった。でも、この人は大人だ。

やさしくしてくれる人でさえ、信じられなくなっちゃう。

そんな風にぼくも、ならなきゃダメなの？

そんなのは悲しい、とリンはここまで来る間、ある人に訴えたことがあった。裏切りにあうから誰も信じちゃいけないの、と訊いたことがあった。だれとも仲良くなれなくなってしまって、そういうのが大人になることなの、と。

嫌でも思い出してしまう。今リンは、この人にやさしくしてもらっている。でもそのやさしさが、怖くて怖くてたまらないのだ。こんな風に、人を見るようになると思わなかった。こんなふうに疑っている自分が嫌だった。だが、こうするしかできない。

「だから、降ろして！」

必死に足掻く少年へ、男の人は大きくうなずいた。リンの警戒を逆なでしない、ゆっくりとした動きだった。リンは降ろされると毛布で身体を包まれ、そっと頭をなでられた。かがんだ男の人はにこ、と笑んで、

「だいじょうぶ。みんなが探してくれているから、荷物はすぐに見つかるだろう。ねぇ、ケガの手当てをしないかい？　その、壊れたメガネも」

きつく握りしめていた手を、大きな手がそっと触れた。思い出したようにリンが力を抜いてゆっくり開くと、そこに歪んだメガネがある。

「修理できると思うんだ。メガネがないと困らないかな」

はっきりとしないぼやけた輪郭で、男の人が微笑している。

リンは青い目をゆらめかせた。困っているのは、確かだった。

「僕の部屋へおいで。ここでは修理もできないから、ね？」

申し出を否定することもできず、薄い布にくるまれたリンは男に連れられて歩いた。迷子になりそうな暗い街を、彼は迷いなく進んでいく。黒い翼のお姉さんとは、別れることになった。彼女は最後まで、一言も何も話してくれなかった。それでも、別れぎわにくれた微笑みが目に残っている。

――ぼくは、どうしたらいいのかな。

たったひとつの荷物である鞄がなくて、リンのものは身につけている服と靴だけだった。もしあの鞄が見つからなければ、どうなるのだろう。ここでひとり、ひっそりと死んでしまうのだろうか。

7

一瞬浮かんだ自分の末期にぶんぶんとかぶりを振った。そんなのはダメだ。

リンは、行かなければならない。それがあの人たちとの契約である。アニエスの元に戻るならなおさらだ。こんなところで、死んでしまうなんて嫌過ぎる。

（あ、お金ならちょっとだけある。それでアニエスにどうしたらいいのって聞けば……）

旅に出るとき、一箇所にまとめてお金を持ち歩いてはいけない、とアニエスに口をすっぱくして言われた。そのおかげで、リンはまだいくらか持っている。靴の中に少し、ズボンのポケットの中に少し。それを使えばアニエスへ手紙が出せるはずだ。どうすればいいのか、きっと教えてくれる。ほのかに立ち直りかけたリンの顔が、すぐさま掻き消えた。今まで出した手紙さえ、届いたかどうかわからないのだ。アニエスからの返事が届くのは、いつになる？　一月後？　二月後？

（それまで、どうしたらいいんだろう）

（電話を……かけたら、いいんだろうけど）

残り少ないお金を使うのは、こわかった。アニエスに電話をかけるとなると、どれだけ料金がかかるのだろう。リンの故郷であるラスの街は、電子機器に疎い。『こちらの世界』ならあって当たり前の技術も、ない。気軽に通信もできないのだ。

仮に連絡が取れた場合を想像し、リンは暗澹とした気持ちになった。アニエスは、リンの無事を喜んでくれるだろう。八方に手を尽くして、どうにかしてくれるはずだ。しかし、どれだけ家族に迷惑がかかるか。列車のチケット一つ購うのを断念した家族だ。こんな遠いところまで、迎えに来てもらうなんて無理がある。

紛失した乗車券をリンの分だけ再発行してもらう場合も同様だ。

少なくない金額が、家族の負担になってしまう。警告を無視して身勝手に列車を降りたリンのために。
そして乗車券の再発行ができた場合も、一月以上リンはこの街に足止めを食うのだ。どんなに早くても、次の列車は一月後なのだから。その間、リンはどう過ごせばいいのかわからない。文無しのリンが、こんな不気味な街に一人きりで。
途方もない気がした。
自分自身へ失望して、リンはうつむいた。なんて、かっこ悪いのだろう。
（じゃあ……エドに）
エドと連絡がついたら、ぷんぷん彼は怒るだろうけど適切なアドバイスをくれるだろう。しかし、どうやったら連絡が取れるのか、わからない。
（車掌さん……星間列車……）
いろんなヒトの顔が浮かんでは消えた。連絡手段がわからないためだ。
もう、どうしたらいいの！
だれかに「こうだよ」と道を示してもらえたら、どれだけ楽だろう。自分で決めて、自分で選ぶことは、こんなにも大変だっただろうか。何をするにしても考えが足りない気がした。ひとりぼっちが怖いと初めて知った。星間列車から降りなければよかった。トリビトに会いたいだなんて思わなければ。あんなにも、列車が連れて行ってくれるから、と言われていたのに……。
（いつもだれかの後ばかり、ついていたから）
旅に出る前はアニエスがいて、ローラおばあちゃんがいて、テッサ（姉）とニコラ（兄）がいた。列車に乗ってからは、列車が道を示してくれた。エンジャーグル以降は、エドがそばにいた。あらかじめ用意されていた道を、自分から踏み外したのだ。その代償がこれである。
ずしりと、リンに重く圧し掛かる。

突然、男の人が「ここだよ」と立ち止まった。リンはさらに肩を引き止められて気づいた。どこをどうやって歩いてきたのか、すっかり記憶が抜けている。きょろ、と辺りへ目を向けると先ほどと全然違うようで、同じように見えた。ただ、さっきは右側にあった大きな木――天井都市を支える支柱――が視界のまん前にそびえ立っている。上部は支柱で埋め尽くされていた。どれぐらい歩いたのだろう。息が上がっている。

「歩かせてゴメンね。何度かおぶろうと言ったけど考え込んでいたようで」

「えっ、あ……、すいません」

「ああ、いや、傷が酷くない証拠だから構わないんだ。でも手当てはしておかないと。その布がきみを守っているとはいえ、ここの空気は刺激的だしね」

リンをすっぽり包む布は、フードのついたマントのようだった。小さなリンには大きくて、本来なら大人が着るものなのだろう。これはトリビトに見つからないためだと思っていた。そういえば、あの白いトリビトたちがいない……。ずっと黙考していたが、さすがに白い翼を見たら気付いたはずだ。これだけ真っ黒なのだから。

（ここは黒の街なんだ。だから、黒い翼の人しかいない）

それなら――この人はだれ。

ふわふわと実体のない人形みたいに進んでいたリンの目に、わずかな正気が戻った。リンの手を引いて歩く、この男の人はだれ。トリビトではない。この人は人間だ。どうして、こんなところにいるのだろう。トリビトたちは、人間を嫌っているのではないのか。

狼狽してリンが男の人を仰ぐ。微笑する彼が無言で壁に手をかざすと、出入り口のなかった建物にぽっかり穴が開いた。大人一人なら充分に通れる程度の大きさの穴だ。びっくりしたリンは、目覚めたときにいた部屋の壁も、唐突になくなってしまったことを思い出した。そのせいで背中から転がり出て、頭を打ったのだ。思い出して頭に触れたリンの腕は、すり傷だらけだった。服も血がついて、

びりびりに裂けて、どろんこだ。
「さあ、どうぞ」
ろくに考えず、こんなところまでいざなわれてしまった。なかなか進もうとしないリンを、男が覗き込んでくる。どうかした？　と心配そうに。
見ず知らずの汚い子どもでも、だいじょうぶだから、とこの人は抱きかかえてくれた。ケガだらけのリンの手を引いて、ここまで連れてきてくれた。今さら疑ってかかるのは、おかしいだろうか。
警戒交じりに一歩踏み込むと、背後の壁が元通り埋まり、パッと明かりがともった。リンは不安そうに照らされる室内を見渡してみる。キッチンとリビングと寝室が合体したような広い部屋だった。一番奥に、簡素なベッドが置いてあった。観葉植物の緑がいくつもみえる。入って右手にキッチンだ。左側と中央を陣取っているのは立派なソファーと、テーブル。それらを仕切るように、太い柱がある。壁にはフォトフレームや絵がいくつも飾られてあった。
男はリンをまずバスルームへ案内した。何もなさそうな壁に手をかざすと、案の定ぱっくりと口が開いて、浴槽とシャワーがあった。洗濯機（と思われるもの）もある。そこへリンだけを放り込んだりせず、服を脱がせるのや、身体を洗うのを男は手伝ってくれた。（おかげで、訳のわからないシステムに翻弄される危惧は去った）
やさしい手つきでリンの頭を洗う彼は、人の世話を焼くのが楽しいみたいだ。上着を脱いで腕まくりし、ズボンもまくりあげ、傷口に注意してリンを泡だらけにするのだ。そしてふかふかのタオルで身体をふくと、髪を乾かして、くしで梳かしてくれる。テキパキと傷の手当ても終えてしまった。
「坊やはもしかして、ウィルの――……いや、何でもないよ。きっと僕の考えすぎだ」
言いかけたことをやめ、にっこりと男は微笑んだ。
「大きいけどこの服を着てくれるかな。子ども服を探すのは時間がかかりそうなんだ。このぼろぼろの服は……洗濯して汚れが落ちれ

ばいいけど」
　それから男の人は、お茶の用意をするね、と行ってしまった。大きなTシャツを着せられたリンは、言われるままにぼんやりと座る。ところが、ソファが十センチほども沈み仰天した。自然と背もたれに身体が倒れ、リンは慌てて起き上がろうともがく。けれど足がつかない。起き上がるために手をつくとそこも埋もれてしまう。
（な、なにこのソファ！）
　プチパニックだ。星間列車のシートもふかふかだけど、起き上がれないことはない。
「いいよ、くつろいでほしいためのソファなんだ」
　ソファに悪戦苦闘しているリンを見て、彼がくすりと笑った。ぷん、とお茶とお菓子のいい匂いがただよってくる。リンへ渡すべきカップをテーブルに置いて、男の人は向かいのいすに座った。こちらを面白そうに眺める彼が、悪い人には見えない。
「探してみたんだけど、こういうものしかなくて」
　どうぞ、と勧められたのはビスケットだった。果たして食べてもだいじょうぶかどうか――男をちらりと見ると、ニコニコしていた。出会ったときからそうだが、なぜかこの人はリンを歓迎してくれている。
　それに裏がないか、と探ってしまう自分が恥ずかしい。でも、ここは星間列車ではない。食べ物が安全かどうかもわからない。知らない人から物をもらっちゃいけない、とアニエスにしつけられてきたリンだ。ためらいと、戸惑いの入り混じった顔でリンがビスケットを見つめていた。
　するとひょい、とつまんで男の人が口の中に放り込んでしまった。あ、とリンが目を丸くする中で彼はふふ、と笑う。釣られるようにリンもえい、とばかり一口ビスケットをかじってみた。すると口の中で甘みが広がっていく。懐かしい、と思う味だった。アニエスの焼き菓子に、よく似ている！
　もう一つ欲しい、と思う間もなく手は伸びていた。どんどん口へ

と運んでしまう。もう止まらなかった。ビスケットと一緒に、この人のやさしさが、沁みこんでくる。
　あらかた口におさめて、リンはハッとわれに返った。気まずげにそうっと男を窺い、ドキッとした。彼は、本当に嬉しそうにリンのことを見ていたのだ。リンが困惑したのを察したのか、笑いながら姿勢をかえて、
「すまないね、お茶に付き合わせてしまって。外からの人は久しぶりで、つい……うれしくなってしまったんだ。そんなに美味しそうに食べてもらえるとも思ってなくて」
　かかか、とリンの頬が熱くなる。そうだ。初対面の人の家で、無遠慮に食べ散らかしてしまった。リンが慌てて居住まいを正すと、男の人はくすくす笑う。気にしなくていいよ、と。
「それより身体の調子はどうかな？　眩暈がするとか、吐き気や息切れはない？　ケガは大したものじゃないし、骨折や異常は見当たらなかったけど、おかしいな、とか変だな、と思ったらちゃんと教えてくれるかい？」
　男の声色は落ち着いてやわらかい。ゆっくりとしたしゃべり方が耳に心地よくて、気持ちが、緩やかに元の状態へ戻っていく。すさんで、へこんで、もうダメだと思った。だけど、
（元気がわいてくる）
　だいじょうぶだよ、と繰り返し言ってくれたように、だいじょうぶなのかな、と気持ちが持ち上がる。自然と、リンにも笑顔が戻ってくる。
「だいじょうぶ、みたいです」
「よかった。ところで小さなお客さん、失礼じゃなければお名前を聞いてもいいだろうか」
「ぼく、リンです。リン・ユイです」
　するりと名前は出てきた。彼は破顔して、
「僕は、ヴォルフガング。ヴォルフと呼んでくれるかな。あっ、まだあるよ、食べるかな」

いそいそとお茶とビスケットのおかわりを用意しようとヴォルフが立ち上がる。
「あの、ありがとうございます、ヴォルフさん」
すると、彼は頬を持ち上げてふり返った。
「人に名前を呼んでもらえるのってうれしいね。リンくんはお客さんだから、ゆっくりしていて」
そうなのかな、とリンはビスケットを頬張る。
「あっ、荷物のほうは探してもらっているから気にしないで。見かけたら教えてくれるから。さっきの……名前をマーサと言うのだけど、彼女も君を見つけた付近をもう一度見てくる、と言っていたから」
ぴょこん、とソファを降りようとしてやっぱりもつれるリンが、慌てて言った。
「あの、ぼくも、探しに」
言うと思った、なんて言葉が聞こえそうな笑い声が響いた。
「すぐ戻ってくるよ。人の所有物を悪用する者はいないから。その代わり……少しの間でいいから、話し相手になってもらえないかな。あの子たちは、しゃべってくれないから……」
「あ、はい。……えっ？　でも今、マーサさんが鞄を探すって言ってたって……え？　あれ？」
リンは思わず口を手で覆うと、狼狽してヴォルフをあおいだ。
「あれ？　え？　え？　ぼく、この言葉って！」
リンはようやく、自分が母国語をしゃべっている事実に気付いたのだ。そうだ。ヴォルフは、最初からリンの国の言葉をしゃべっていた。エンジャーグル以降、さっぱり耳にすることがなくなっていた言葉だ。同じ人族でも、アベルは共通語で話していたことを思い出す。目を丸くしたリンを笑いながらヴォルフが、
「気がついてなかったのかな？　そう、これは僕らの言葉だよ」
ついと細められたヴォルフの目が、懐かしい、と語っていた。
「だからね、もうちょっと話をしていたいなぁと思ったんだ。マー

サたちはね、言葉を使わなくても意思の疎通……ええっと会話ができるんだ。思ってることを相手に伝えることができる。だから声に出す必要がないわけだ。彼らは障害を抱えている。そのハンデを補うために、ＩＣ（インプラントチップ）を組み込まれるんだ」

「ＩＣ？」

「小さな電子チップだよ」

8

ヴォルフはリンの手を取って、子指の爪ほどの大きさだとささやく。

「こんな小さなものだけど、立派なコンピューターなんだ。脳へ組み込むとコンピューターネットワークと意識的に接続できるようになる。世界のすべてと繋がれるんだ。便利で優秀だけど、危険極まりないシステムだね。今は宇宙規模で禁止されているけど、脳へダメージがあるものには補助として限定的な使用が許可されているんだ。そうじゃないと、彼らは個としての意思さえ表明できなくなってしまう。苦肉の策、というわけだね」

はてな、と頭を傾けるリンは、ヴォルフの言っていることがわからない。くす、と彼は微苦笑した。知らなくても当然だねぇ、と言外に言われたのがわかる。でもそれはリンをバカにして、というわけじゃない。これから知っていけばいいよ、と言ってくれているのだ。

「僕は、それの管理者なんだ。媒体者、とも呼べるかもしれない。彼らとは違う異質なものだから、こうして言葉を使わないと忘れてしまいそうで不安になる。……怖いんだね。情けない話だけど」

ヴォルフが苦笑する。リンはビスケットを食べる手を止めた。怖い、と口にしたヴォルフの微妙な変化を感じたせいだ。それまでの彼との違いがわかった訳ではないが、この人は一人ぼっちなのかもしれない、とふと思い至った。だから親切にしてくれているのだ、と。

ヴォルフが「もうお腹いっぱいかな」とお茶をついでくれた。その手にそっとリンは触れる。

「……さみしい、ですか」

知らず、口をついてそんな言葉が飛び出していた。

「ヴォルフさんは、さみしいの」

ヴォルフの眉が持ち上がり、やがて控えめな微笑へ変わる。
「どうかな。マーサのような子もいるし……管理者としては充分めぐまれた環境にいると思うよ」
肯定とも否定ともつかない言葉だった。余計なことを言ったのだ、と悟ってリンはパッと手を離す。子どもが口を挟んでも良い問題ではなかったのかもしれない。後悔するリンの手に、ヴォルフはカップを乗せた。
「でも、こうしてリンくんとお話できるのは、うれしい」
ヴォルフは少しはにかんで笑ってくれた。――悪い人じゃない。出会って間もないが、リンは疑うことをやめようと思った。この人は、そんな人じゃない。信じられる。
そう安堵したとき、ヴォルフが顔をしかめて立ち上がった。彼から微笑みが消えただけだなのに、部屋の温度が急激に下がった錯覚があった。あたたかいと感じていた部屋の内装まで、ひんやりして思える。
ヴォルフは虚空を見つめ「まさか」と呟いた。信じられない、と眉根を寄せている。そこからヴォルフは機械のように微動だにしない。無表情になってしまった。どうしたんだろう。彼の急な変貌にリンは戸惑いを隠せない。
「……ヴォルフ、さん？」
ゆっくりとヴォルフの手をつかんだ。初めて彼はびく、と露骨な驚きを見せた。息をつめ、目を見開いてリンを見下ろしてくる。それがやがて、微笑へと変化した。
「ああ、すまない。驚かせてしまったね」
驚かせたのはリンのほうだが、彼はやさしく言った。
「ちょっと急な用事が入ってしまったようだ。お茶に誘ったのはこちらなのに、管理者として行かなければならないみたいだ。またゆっくり話ができればいいのだけど。少しここで――」
言いかけたヴォルフは、ああ、そうか、と小さくうなずいた。謎々を解いた子どものように満足そうだ。「白種が一人で降りてくる

はずはないから……」とぶつぶつ口の中で呟いている。「リンくんがここにいるからか」と笑いを堪えるように口元へ手を当てた。
しかし、すぐさま微笑は冷静なそれへと切り替わる。
「だけど、危険だ。あれ以上留まらないよう、注意しないと。でも機器に命じても聞いてくれるかわからないし……かと言って僕が出て行くのも難しい……。黒種たちはああだからなぁ」
一人ごちて、ヴォルフは少年と目線を合わせるようにひざを折った。胸騒ぎのするリンが困惑しているのを、彼は察したのだろう。申し訳なさそうに、言ってくれた。
「少しだけ、ここで待っていてくれるかな？　必ず迎えに来る。そのときはいい知らせを持ってこれると思うよ。……ひとりでも、平気かい？」
心がざわついていた。しかし二つ返事でリンは了解を伝える。そうだ、彼にも仕事がある。一人になるのが怖いだなんて、言ってはいけない。リンは、ケガをしていたから家まで連れてきてもらえたのだ。これ以上、甘えてはいけないし、邪魔をしてもいけない。
ヴォルフはアニエスやローラおばあちゃんとは違う。少年が気軽に甘えていい人ではなかった。また、リンもそうやってアニエスたちに甘えたことが、ほとんどなかった。だいじょうぶ？　と訊かれるたびに、うん、と返事をしてきたリンだ。これも、同じだ。
（怖くなんか……ない）
ここに白い翼のヒトたちはいない。平気かい、と訊いてくれたヴォルフの気持ちだけで、充分うれしかったから。
「それじゃあ、あとで」
ヴォルフを見送ったリンは、ソファの上で膝を抱え込んだ。ぽつねんと残っていると、悲しさや寂しさがどんどん湧き上がってくる。ぎゅ、と膝小僧に爪を立てて、リンは顔をうずめた。

人間だ……
人間が出たぞ。人間が！

胸が苦しくなる。ずきん、ずきん、と痛い。リンは全身打撲と擦り傷だらけだった。この程度ですんだのは幸運だったと言われた。命を落とす可能性もあったのだ。リンは、殺されかけた恐怖を堪えた。憎しみや殺意を向けられたのは、初めてだったのだ。

こうしちゃえばいいのよ、人間なんか！

そう言ってリンを突き落とした少女は、妹（エイダ）と年頃が似ていた。リンがどうなろうと構わない、と暴挙に出たのに、傷ついた目をしていたのが悲しかった。落ちる瞬間に見た彼女は、目に涙を浮かべていた。こんなことをする自分を許せない、と葛藤していた。人間が、あの女の子にああまでさせた何かをしたのだ。

あの女の子とよく似た台詞を、故郷でリンは聞いたことがある。

化け物のくせに。飛べないトリビトのくせに！

このとき、負の感情をぶつけられたのは、トリビトのエイダだった。ラスの街は人間の街だ。人間と似ていても人間じゃないエイダは、敬遠されていた。時には差別の標的にもされた。

涙でぐしゃぐしゃになって、妹はリンにしがみついていた。肩を震わせて、化物なんて言われたのに反論もできずに。

ぎゅうっとリンは身体を丸めて小さくなる。あの時はわからなかったエイダの気持ちが、今ならよくわかった。これほど、怖いものだったのだ。

リン。リン、待って。待って。そう呼んで後ろを付いてきたあの子と、あのヒトたちは、同じものだ。白い身体、白い髪、白い翼。ミルクのようだ、雪のようだと、家族みんなから愛されて、傷ついていたエイダ。身体も、心も、あの子はボロボロだった。

エイダも、同じようにリンたち人間を憎いと思ったことが、あっただろうか。殺してやりたいと、殺意を抱いたことが。

「エイダ……」

ぽつりとこぼれた声は、静まり返った部屋に響いた。

待たせてごめんね。そう言ってヴォルフが戻ってきたのは、どれぐらい時間が経ってからなのか。もしかしたら一時間。もしかしたら二時間以上……。あのソファに転がって待っていたリンはいつしか眠ってしまっていて、時間の経過がわからなくなっていた。ふかふかのクッションはやさしくリンの身体を沈めてくれたから。

短い中で見た夢は、直前に思い返していた妹のエイダをふくめ、家族が出てきていた。にーっと笑った兄（ニコラ）、「こらあ！」と怒っている姉（テッサ）、飴玉を口にふくんで嬉しそうなエイダ。そして困ったように笑っているリン。中でもニコラがリンを盾にテッサから逃げ回っているのは、とても懐かしかった。

ニコラは取ってきた飴玉を、リンとエイダに分け与えたのだ。もちろん自分の分も確保しながら。もらっちゃってどうしようと困るリンと、それは今日の分じゃないでしょ、と怒り半分で追いかけまわすテッサ。にこにこしているエイダ。いつもの日常。――いつまでもあの場所にいられると、思っていたのに。

悲しくて幸せな夢は、そっと肩をゆする大きな手によって遮られたのだ。夢から目覚めたとき、リンは悲しかった。もっと、家族と会っていたかった。待たされたことより、夢が溶けてしまったことのほうがショックで。

「黒種の夢にとらわれちゃダメだよ。彼らはなくした記憶を探して夢を見るからね。夢を渡り歩いて、自分を探そうとするんだ」

ぼんやりしたままのリンが疑問に思っていると考えたのか、彼はさらに言う。

「黒種たちは、自分を見失ってしまったヒトビトだ。この暗い街にいても光を求めている。……元の場所へ帰りたいんだろうね。きっとリンくんの感情（おもい）に惹かれたんだろう。きみの記憶があたたかいから」

彼らはその記憶にすがりつきたいんだ。かつての自分がそうであ

って欲しいと願っているのだろうね。そう話してくれるヴォルフは、寂しさに陰った笑みを浮かべていた。幸せな記憶に、黒種たちは干渉するのだ、と。

「ぼくが夢を見たのは、彼らのせい……」

そういえば、落とされて気がついたときも、アニエスの夢を見た……気がした。ああ、そうだ。アニエスに起こされる夢を見たのだ。だから、ラスの街にいるのだと寝ぼけてしまって。

見たいな、と思ってもなかなか見られない家族の夢。あたたかい、なつかしい記憶。あれはマーサのような黒いトリビトの能力（ちから）のせいだったのか。

（それでもよかった）

夢の中でもいいから、会いたい。もっと、あいたい……。

声を、きかせて。名前を呼んで。

夢でもいいから……。

「ダメだよ」

強い意志のこもった声が、リンをうつつへと引きずり戻した。焦点を結んだリンをひたりと見つめるのは、少年とよく似た色の瞳。

「リンくんは旅人だ。ここからいずれ旅立ってしまうんだから、黒い霧に当てられちゃいけない。心を強く持って。ここはリンくんのいるべき場所じゃない。引きずられちゃ、出られなくなるよ」

いいね、と厳しく念を押され、リンは動揺しながらもあごを引いた。ソファから降りる少年に手を貸した男は、それじゃあ行こうか、と言う。

「ごめんね、とりあえず離れられそうだったから急いで降りてきたんだ。でも、すぐ戻らないと。起きぬけで悪いけれど」

ヴォルフからは、別れたときの険しさがなくなっていて少なからずリンをホッとさせた。だが急ぎの仕事は終わってないと告げられて、不安になる。合間を縫って迎えに来てくれたのだろう。しかしそこへ連れて行かれても、リンに何をさせるのか。どこにですか、と尋ねると「上へ」と彼は人差し指を立てた。その回答にリンの顔

が強ばる。
「と言っても白の街じゃないよ。まだトリビトたちのパニックはおさまっていないんだ。むしろ、悪化させちゃったからねそんな場所へ案内はしない」
悪化させた、と言う部分でヴォルフは苦笑する。
じゃあどこへ、と訝ったリンの頭を彼はなでた。
「きみを待っているヒトがいるんだ」
どくん、と心臓がはねた。リンが期待のこもった顔をヴォルフに向ける。待ち人は、だれ。その答えを半ば予期しながら。
「言ったはずだよ。いい知らせを持って帰ってこれるから、と」
ヴォルフはリンの肩を叩いた。行こう、と言って。

その部屋の扉が開いたとき、リンは大きなカプセルに寄り添う少年を見て、息を呑んだ。
明るいライトの照らす小部屋で、彼は透明な箱の中にある何かを見つめている。貴族然とした白のフリルがついたブラウスにリボン、灰色に青が混ざったズボン、茶色のブーツ。ベージュのコートはいすの背にかけられてある。あの王子様みたいなスタイルが似合う少年だ。だぶだぶの借りたシャツをかぶっているだけのリンとは、全然違う格好の。
だが、いつもの彼らしくなく、皺や汚れが少し目立っていた。埃にまみれたのを叩き落としただけ、というような姿だ。それさえ気にかけていられない、とでも言うのか。額に見受けられるケガの具合も気になった。いったい彼になにがあったのだろう？
まだ、彼はリンに気づいていない。いつもならひょこ、と動く少年の耳はぺたんこで、ふさふさのゆれるしっぽが今は床を掃いているのみだ。ヒト一人がすっぽり納まりそうなカプセルに何があると言うのか、片手をついて覗き込んでいる。元気がないのだ、とリン

にはすぐにわかった。あの緑にゴールドがかった不思議な目こそ、見えないけれど。

「エド」

声にならず、唇だけがうごいた。身体の奥底が熱くなってくる。どうして、ここにいるの。列車はもう行ってしまったのに、どうしているの。頭の片隅でそんなことを考えながら、リンは指先一つ動かせなくなっていた。一歩でも動いたら、エドの名前を呼んだら、少年が幻のように消えてしまうんじゃないかと。

9

「どうしたの？」
やさしい低い声が、リンの背を押した。ヴォルフが、たたずむリンを不思議そうに覗き込んだのだ。言葉はすでに、共通語になっていた。あれは、リンと二人きりのときだけなのかもしれない。リンの情けない顔がヴォルフを見つめたときだ。声に反応してネコ族の少年が、ふと面をあげた。ドアの傍らで立ち尽くすリンに気づき、大きく目を見開く。くしゃりと顔を歪ませた彼は、しかし表情をすぐに引き締めた。
「ほら、入ってもだいじょうぶだよ」
肩に乗せられた大きな手が、リンの背を後押しした。明るい小部屋にそっと入ると、足が震える。エドが、いる。目頭が、つんと熱くなってリンは一歩一歩進むたび、壊れそうな思いを押さえ込んだ。目の前にエドがいる！　涙でかすむ視界の向こうに、一緒に旅をしている友だちがいる！
――ぼくは一人じゃなかった。
だが、そんな感動とは裏腹に、トゲのある言葉が無常にもリンへと突き刺さる。
「ばっかじゃないの！？」
エドは耳をぴんと立て、しっぽや髪の毛を逆立てて、立ち上がる。乱暴に蹴立てたせいでいすが転がった。しかし、エドの気に止まりはしない。
「あれほど出ていくなって、危険だって言ったのに、なんでキミは勝手に降りて勝手に行方不明になったわけ！？　どれだけ心配したと思ってるのさ！　なに一人で泣きそうになってるの。泣きたいのはこっちだったんだからね」
ぎ、とねめつけられて、先ほどとは別の意味でリンの足は止まった。いきなり怒鳴られるとは思ってもいなかったのだ。しかし怒れ

るエドは、容赦などしてくれない。つかつかと大またで近づき、憤然となってリンを見下ろしてくる。ひんやりとしたエドの後ろには、目の錯覚か、ブリザードまで見えそうだ。
「おかげでぼくまで列車に乗り遅れてしまったんだけど？　こっちがどんなに肝を冷やしたかわかってる？　どうしてヒトの忠告無視するの。僕がどれだけびっくりしたか、欠片も考えなかったの？――それで、どうなの」
縮こまって吹き荒れる嵐が通り過ぎるのを待っていたリンは、先ほどとは別の意味で泣きたくなっていた。え？　とビクビクしながら尋ねると、エドが角を生やして怒鳴る。
「身体！　落ちたって聞いたよ。ケガしてないの？」
「あっ、えっと……」
エドの言うとおり全身打撲とすり傷だらけのリンは、とりあえず「ここと、ここと」と、傷口を見せた。片面がジェル状になっているシートが、あちこちに貼られてある。顔と、手と足と服をめくってお腹と、腰の辺りまで進んだら、次はリンが「あれ？　こんなとこまである。あ、こっちにも」と自分の傷をしげしげ眺めだした。後ろで二人を眺めていたヴォルフが堪らず、くすくす笑い出す。エドが、顔を赤くしてまなじりを吊り上げた。
「そうじゃなくてね！　大きなケガしてないかって聞いたの！　ああ、もう、いい。パッと見たところ何もおかしなとこはないしね。普通に立ってるし、歩いてるし、しゃべってるし」
う、と眉尻をさげるリンはそうならそうと言ってくれたらいいのに、なんて思う。エドは重たく息をついて、髪をかきあげた。
「それで、メガネはどうしたの？　鞄も見当たらないけれど」
逆光の中、憤っていたエドが、目で案じてくれるのがわかった。綺麗なグリーンと金が混ざった瞳が、本当に大丈夫なのか、と。身体の傷だけじゃなく、リンの心も大丈夫か、と。
何だかんだと文句を言いながら、こうして怒っているのはリンを心配してくれたからなのだ。リンは困ったように、少しだけ微笑ん

だ。
「メガネは、壊れ、ちゃっ……たっ」
不意に、リンの目から涙がぽろっと落ちた。「あ、あれ？」と言いながら笑った顔の目をこするリンだが、涙は次から次にあふれ出てくる。なんでもないって言いたかったのに、のどが震える。おかしいな、と思いながらも必死に口を開いた。
「かばんは……っ、落ちたときに、なくしちゃっ……っ」
それ以上は、声にならなかった。ぎゅっとまぶたを下ろしたのは、エドの叱責を予想して身をすくませたからじゃなかった。必死に堪えていたものが、徐々にもれ出てしまっているのだ。泣くな、と懸命に努力したけれど、身体の震えは止まらない。
（なんで？　ヴォルフさんのときは平気だったのに）
どうして、エドの前でこんなふうになっちゃうんだろう。泣くな。必死にリンは目をつむって心の中で繰り返した。泣くな。泣くな、泣くな！　そう思っているとエドがそっとリンの腕に触れた。
「ごめんね、ひとりにして」
独白のような台詞は、ぽつり、と転がった。それが引き金になって、リンの心は突然悲鳴を上げる。胸が苦しくて、くるしくて堪らない。リンは引き込まれるようにエドへ手を伸ばした。触れても、エドは消えない。本当に、エドはここにいる。ここに、いる！　――ぼくは、一人じゃない。
「言ったよね。クィダズまで、列車を降りるまでは一緒だって」
ゆっくりと面を上げたリンが見たのは、泣きそうなエドの微笑だった。やさしい言葉にうなずくことさえできず、エドの細い肩にリンは顔をうずめた。
「こわかったよね。よくがんばったね」
もう、泣いていいんだよ。
そう、言われた気がした。
堰を切ったように溢れ出した涙は、しばらく止まらなかった。

「ラッカ・セスナの具合はどうかな」
リンが泣き止んだ頃合を見計らったヴォルフは、もたれていた戸口から離れてエドに尋ねた。エドは、リンの背中をさすっていた姿勢から心持ち首を伸ばして透明な器を覗き込む。
「一度もあれから目覚めていません。ずっと見ていましたけど……」
そう、と返すヴォルフの声も覇気のないもので、リンが目でエドに疑問をぶつけた。エドはリンに、立てる？　と言ったあと、硝子ケースを指差す。覗いてごらん、というのだ。
リンはそっとケースの内部を覗いて息を呑んだ。このヒトは！
顔立ちの整った少年だった。真っ白いミルクのような肌と、羽毛のようなふわふわの短い髪。うつぶせになって横たわる彼の背中には、折りたたまれた翼があった。肌や髪、翼と同じ白い服。リンよりもエドよりも高い身長なのに、二人よりも華奢な体つき。真っ白な彼がまぶたを上げれば、あの赤い瞳が見えることを、リンは知っていた。
無言の悲鳴に、リンの表情が固くなる。記憶が再生された。人間がいる、と驚かれ遠巻きに囲まれたのだった。訳のわからない悪意をぶつけられ、逃げ出したところに現れた女の子。何しにきたの！
という悲鳴にも似た問いかけ。その、傍らに現れた少年。
思わず身体が後ずさったリンを、後ろから抱きとめたヒトがいた。エドだ。エドはリンの肩をつかんで、だいじょうぶだよ、と言う。
「ラッカはね、地上都市（ロールエム）への道を案内してくれたんだ。彼はキミを攻撃したりしないから、責めないからっ」
エドの言葉があっても信じられなかった。こくん、と上下するのど。逃げようとする身体。彼が目覚めたらどうなるのだろう。また、あの高さから落とされるのだろうか！
「だいじょうぶだから、ね？　彼はなにもしない、敵じゃない。いいヒトなんだ！　ここまで無理を承知で案内してくれたんだ。彼を

知らないで否定するのは止めて。話をしてなんて言わない、でもトリビトだってだけで拒絶しないで」
怯えるリンの身体を押さえるエドの声に、懇願の響きがあった。リンは、首をひねってネコ族の友人を顧みる。エドは、辛そうに瞳を揺らめかせていた。
「そうやって否定してばかりいたら、きっとこの先は、進めないから……」
……本気で、言っているんだとわかった。逃げようとしていた力を総動員して、ケースをもう一度リンは見る。首をゆっくり動かして、息を詰めて、その中にいる、トリビトを。
思い出してみればこのヒトは、わめく妹を押さえてくれていた。出て行けと言ったけど、厳しい声だったけど、感情をむき出して怒鳴ってくることもなかった。見ようによっては、リンを助けようとしてくれたふうにも取れた。
そして、エド。エドはずっとこのケースを見ていた。この少年を心配していたのだ。いつもぱりっとした服装で、汚れなんか許せない、というようなエドの格好は、薄汚れていた。――それは、どうして？
（ぼくが、列車に戻らなかったから）
エドの忠告を無視し、トリビトといざこざを起こして地上都市に落とされたからだ。エドがこんなに必死なのは全部自分のせいなのだ、とわかっていた。ラッカという名前の翼持つ少年も、リンを探すために協力してこうなったのだ。
（ぼくが、わがままを言ったから……！）
リンは無言でこくん、とあごを引くとエドを振り切ろうとする力を抜いた。エドがほっとしたのを感じる。わだかまりは残しつつも、ケースへと今度は恐る恐る手をついて覗いた。改めて間近で見たトリビトは、人形のようで近寄りがたい雰囲気をしている。歳はリンと変わらないぐらいだが、目を瞑っていると大人びて見えた。
これが本物の、トリビト。

本物の。

エイダはね、本物のトリビトじゃないの。

だから捨てられたの。

不意に時間を越えて耳朶に触れたのは、幼い妹のことばだった。

リンは唇を結ぶ。エイダと彼らとの違いは、その翼だけなのに――

片方だけの、それも小さな彼女の翼では、空を飛ぶことができなかった。空を飛ぶ鳥を見つけるたび、切なそうな眼差しを向ける妹。エイダも、空が飛べたらいいのに。そんな呟きを耳にするたび、リンは「空が飛べなくても、ぼくといっしょだよ」となぐさめてきた。

エイダの全開の笑顔なんて、リンは何度見ただろう。いつも無表情に近くて、泣くときもぽろぽろとただ涙を落とすのがエイダだった。大声をあげたりしない子だった。いつもリンの傍にいたがって、リンの後を追いかけてきた。翼が片方しかなくてバランスの取れないあの子は、すぐこけてケガばかりだ。だからリンは時間のある限りそばにいた。学校があったりなかったりしたのは、よかったのかもしれない。エイダは学校へ行けるほど大きくなかったから、その分一緒にいられたのだ。

あのラスの街の中にいても、エイダは異質な存在だった。表立っての差別や非難こそなかったが、少女が避けられているのは幼いリンにだってわかった。大人たちの態度に敏感な子どもは、エイダへ簡単に憎しみを募らせた。きっとあれは、ラスの街にいる人たちの本音だ。

『トリビトのくせに、なんでここにいんだよ。仲間んとこ帰れ！この化物！　――ああ、ちがった、お前トリビトじゃないんだったっけ。空も飛べない出来損ないなんか、だれもいらねぇよなぁ！』

あの誹謗を耳にして以来、リンたち兄弟は街外れの工場さえエイダを連れて行くのはやめた。あの言葉はエイダの不安を的確に射抜いてしまっていたのだ。反論さえできず、幼い妹は逃げ出すことし

かできなかった。その後、ニコラの復讐がひそやかに行われたが、エイダは目に見えて口数が少なくなってしまった。

その異常に、最初に気がついたのは、テッサだった。絹を裂いたような悲鳴が聞こえ、リンとニコラは家に飛び込んだのだ。そして、立ちすくんだ。窓から入る夕日が、小柄な影を引き伸ばしていた。緋色に染められた部屋の中で、逆光を背に少女は白と赤をまいていた。ぽた、ぽた、と滴る赤は少女の翼から。真っ赤に染まった小さな手に握られたのは、大きなフォーク。足元に散った大小の羽。はらはらと視界を惑わすのは、小さな羽毛。

エイダは、自分で翼から羽を引き抜いていたのだ。呆然となったニコラの肩を揺さぶるのは、テッサだった。アニエスを、アニエスを呼んできて！　店にいるから、早く！　悲鳴のような指示でニコラが出て行った間も、リンはその場所から動けなかった。見開いた目が釘付けになって、エイダを見つめていた。

「エイダ……？」

そう呟いたのに、声にならなかったのをリンは覚えている。一歩、踏み出そうとしたのに足が動かなかったことも。エイダから伸びた赤い筋がつ、とリンのほうへと流れて足に当たった。ぬらりとした感触。頭のどこかで「エイダを助けないと」と警報が鳴っているのに、身体がすくんで動けない。そのリンを、うろのような赤い目が射抜いた。悲しみをたたえたエイダの瞳――

ぐい、と手を引っ張られ、リンの視線は何かに遮られた。夕日を背に立つ妹の姿が見えなくなって、リンは我を取り戻す。何か、強いものに意識を絡め取られていたような気がした。かちかちかち、と歯の根が鳴っていた。ふー、ふー、と呼吸をしてみて初めて、テッサに抱きしめられていると気づいた。恐慌状態から立ち直った姉は、身体を硬直させている弟に気づき、抱き寄せたのだ。

涙があふれていたのは、エイダじゃなかった。

10

ぎゅ、と腕に力を込めているテッサでさえ、どこか身体を震わせている。リンは、せめて嗚咽を殺した。反射的に拒絶してしまった兄弟たちを見た、エイダの顔。近寄らなければ、と思うのに足が動かなかった。ぼくもいっしょだよ、といつも言っていたのに。こうしてテッサに抱きしめてもらうまで、魂が抜けたように見つめるしかリンにはできなかったのだ。

バタバタと足音が聞こえ、蒼白になったニコラとアニエスが駆け込んできたのはその時だった。一歩中に入ったアニエスが息を呑む。驚愕まではリンたちと同じだ。しかしそのあとエイダへと、アニエスは歩み寄った。誰も近づけなかった場所へ、ゆっくりと血の川を越えて進むと膝をおる。壊れ物に触れるようにそっと抱きしめたアニエスの、エイダ、という声。どうしてこんなことを、と問う呼びかけに虚空を見つめる幼いトリビトは、ぽつりと呟いた。

エイダは、人間に、なりたかったの。

部屋の時間が、止まった気がした。エイダは小さな手で固まっているアニエスをつかんで、顔を寄せて、大声で泣き出した。きっと今まで泣くのを堪えていたのだろう。リンは、初めてエイダが声をあげてわんわん泣いているのを見たのだった。

エイダは、みんなと一緒になりたかったの。人間に、なりたかったの。翼なんか、いらなかった！　どうしてエイダはみんなと違うの？　どうしてトリビトなの？　どうして？

悲痛な叫びは、しばらく止むことがなかった。たとえ翼を切ったとしても、エイダはトリビトなのだ。望んだ人間になどなれやしない。そんな悲痛なまでの訴えがリンの胸をえぐった。エイダの抱える闇は、想像以上に深くて、暗くて、リンでは支えることも守るこ

ともできなかった。ただ、ごめんなさい、とテッサにしがみつきながらくり返すしかできなかったのだ。
天井都市（オーバールウ）を星間列車から見たとき、リンは確かに感動していた。自由に空を駆るトリビトの姿に、その美しさに。エイダもあの中にいればいいのに、とすぐ思った。あの楽園で暮らせたらいいのに、と。そうしたら、あんな言葉を投げつけられることはなかった。エイダがあんなことを、せずにすんだ。
「翼が欲しい」と願ったのは空を飛びたいからじゃなかった……。
（ぼくがトリビトだったなら、エイダにあんなことさせなかったのに）
寂しい思いなどさせなかったのに。エイダをあの暗いふちから引っ張り上げられたかもしれなかったのに。
翼があるか、ないか。ただそれだけがどうしてこんなに、重たいの。
目の前でうつぶせに眠る本物のトリビトに、いっそ憎悪さえ感じてしまう。その容姿が、どこかエイダと重なるからよけいだ。
（この翼がエイダにあれば）
（こんな翼が）
リンの暗い思考の渦を止めたのは、どん、という壁を叩いた音だった。
目線を上げたリンは、眉を寄せる。壁を叩いたのはエドだったのだ。乱暴なことをするタイプじゃないので、苛烈な態度のエドに不安を覚えた。エド、と問いかけるリンを無視して、つかつかとカプセルに寄った少年は、挑むようにヴォルフを睨みつける。
「もし、ラッカがこのまま目覚めなかったら、どうなるんですか」
トリビトの管理者は目をそらした。その腕をネコ族の少年がつかむ。
「どうなるんですか」
重ねて問うエドの態度は、誤魔化したりしたら承知しないと、訴えている。観念したヴォルフが目を伏せた。

「最悪……死んでしまうかも、しれないね。黒種になるにしてもリスクが高いうえに、その代償は大きすぎる」
「ラッカは守らなきゃいけない妹がいるんです。帰らなきゃいけない場所があるんです。天井都市へ戻す以外に方法はないんですか。この支柱のさらに上部へ行くとか、他に対策はないんですか。こんなところで目覚めを待つ以外に何か！」
「彼が目覚めないことにはどうしようもできないよ。やれることはやったのだから」
「どうしたら、いいんですか。僕に……何ができますか」
ヴォルフの上着をつかみかかる感情的なエドは、歯を食いしばった。「ラッカを、助けて……！」と祈るように訴える。
「なにがあったの」
友だちの悲壮な態度に、リンは部外者だとわかりつつ口を挟んでいた。あのエドが、なりふり構わずヴォルフに絡むなんて信じられなかった。しかし、リンの問いかけに二人は目を背ける。口をつぐんだエドの肩をゆさぶり、リンは問いただす。
「なにがあったの、エド！」

それはリンが気を失っている間のできごと――

＊　＊　＊　＊

11

真っ白な街は何かにおびえているように、息を潜めていた。ヒトの気配はあるのに、誰の姿も見えない。物音一つ、聞こえない。

「……嫌な街だな」

ステーションを飛び出したエドは舌打ちすると、どんどん街の奥へと進んでいく。リンは手紙を出すと言っていた。ならば郵便局を探せば、足取りはつかめるはずだ。手首につけた受信機をオンにして、周囲を見渡した。ヴィーグエングで懲りたエドは、発信機をリンのバッグにつけたままにしていたのだ。あの街でちょこっと一緒に行動した変態……もとい女装刑事がリンに付けていたものを、そのまま持ってきていたのだ。

迷宮のように入り組んだ街でも的確に動き、はぐれたリンと合流できたのはこの発信機のおかげだ。その後、リンのかばんを盗んだドロボウと衝突したり、列車へ飛び込み乗車をしたせいで、返しそびれてしまった。あのバタバタした出発では仕方がない。

というわけで、大いに有効活用させてもらっているのである。

だが、エドは受信機を見つめて眉間にしわを寄せた。反応がさっぱりなかったのだ。発信機が外れたのか、受信エリアから離れているのか。電波が遮断されたのか。

「くそっ」

歩きながら、エドは街の奇妙さが気持ち悪くなっていた。この街は、真っ白だ。汚れが一つもない。ゴミ一つ落ちていないのだ。真っ白な路上を踏みしめていると、自分だけが特異な存在のようだ。

いくばくか進み、街を浄化するロボットがいることに気付いた。黙々とゴミを拾い、汚れを取り除いている。それも、白かった。

ふと、辺りを見渡してみて思う。この街は何かで読んだ「のっぺらぼう」みたいだ、と。街に表情がないことが、この街の顔なのだ。

（エンジャーグルはごった返してた。色んなヒトたちが溢れかえっ

てて、色んな文化がせめぎあっていた。機械の特色が強かったよね。でもそれによってヒトビトは活気づいていた）

エンジャーグルは、境界の街で商人の街で、中立の街だ。あそこはひずみがあったけれど、賑やかであたたかい街だった。しかし、ここは。

見上げれば雲ひとつない、目の覚めるような青。それは道の先でも必ず覗いていた。どの道も幅に差はあれど彼方に空があるのは、この街が完璧なまでに整然と碁盤状に設計されているからだ。道の途切れ目が際立っていた。「ここまでがお前たちの世界だ」と強調しているようで、癇に障る。

（これじゃ監獄と変わらない。……彼らをこうしたのは、人間か）

つかつかと早足で郵便局を目指すエドが、懐にしまった時計をちらりと見た。タイムリミットまでもうわずかだ。列車はやはり諦めねばならないのか。こんな道半ばで、いきなり。

見つけた郵便局も、予想通り空っぽだった。だれもいない。見慣れたコンピューターはいくつか鎮座していたが、これをリンが操作したとは思えない。ヒトに尋ねれば早くすみそうなのに、聞き込みさえまともにできない。

それでも行ってくれるの、エトムント。

お前は私を軽蔑するかもしれない。これが……事態を悪化させるかもしれない。それでも……

約束をした。

思い出す記憶のヒトは、いつだって寂しそうで悲しそうだった。あのヒトは命令なんてしなかった。いつだって勝手に動くのはエドのほうだ。だが、今回は違う。約束したのだだ。あいつ（リン）を必ずクィダズに連れて行くと。

「おい、さっきから僕を見ている奴、いい加減にしろ。出て来い！」

出て来い、来い、来い、と反響（エコー）する声は空に吸い込まれて消えた。

数秒待ち、エドは舌打ちして駆け出す。ジグザグに走って、幅の狭い路地を見つけては飛び込んだ。とっとっと、と壁を蹴り上げ屋上へと駆け上がる。着地をしたあと、後ろを振り返ってみたが誰もいない。わずかに眉をひそめ、そのまま平らな屋上伝いにジャンプした。

（大体これで見つけられるんだけどな）

ステーションを出てしばらくしてから、纏わりつく視線を感じていた。どの道を選んでも、どこへ行っても追いかけてくる。今も続いている。エドはうっすらと笑った。かくれんぼと鬼ごっこは、お手のものだ。隠れるのも、追いかけるのも。

（小さいころ散々やったからな、と）

勢い良く走った。どんどんスピードを上げていく。どこを通っても目に付く景色はあまり変わらない。酔いそうだ。不快さを堪え、目についた路地へ飛び込んだ。壁にべたりと貼りついて息を潜める。ここで捕まえてやる。エドの猫の目がきらりと光る。付けてきているのは、どいつだ！

だがエドの勢いは挫かれた。ばさ、という微かな羽ばたきに唖然となって真上を仰ぐ。逆光の中見えたのは一つの影。驚きに目見開かれた赤い瞳。予想を裏切って現れたのは、ほっそりして小柄なトリビトだった。それも手の届かない上空に――

あっ、という声は二人が同時に上げたものだ。

「……トリビトは飛ぶんだっけ」

エドの口から思考がつるりとこぼれる。せっかく罠をはっても、これは空を飛ばない者に対して有効だ。翼あるトリビトが空を飛ぶのは当たり前なのに！

思わぬ失態にじたばたしたくなったが、とりあえず付けてきた奴は見つけた。内心で恥ずかしさにもんどり打つエドの前に、ふわりとそれは下りてくる。真っ白な少年だった。肌も、髪の毛も、服装も。ただその目だけが鮮やかなほど、赤い。

相手がなにか言う前に、エドはキッと睨んで牽制する。尻尾が山

なりに曲がって揺れた。
「僕に何の用だ」
上背はエドの負けだった。歳も、相手のほうがいくつか上かもしれない。そばかすの浮いた少年は身構えるエドをじろりと見つめた後、露骨な舌打ちをした。ヒト違いか、という呟きを耳が拾う。かすかに顔を引きつらせたエドを無視して、トリビトはふん、と鼻を鳴らす。
「勘違いだ。あんたを付回していたわけじゃない。……悪かったな」
「は？　あれだけ人を追い回して人違い？」
「そっちこそ用がないならさっさと戻ったら。もう列車は出発するはずだろ」
「列車の出発が間近なのは知ってるさ。連れを探してるんだ。手紙を出しに街へ降りた。それっきりまだ戻らない。お前たちは空を飛べるんだ。見かけなかったか」
相手の反応を慎重に窺いながら、エドはカードブックを取り出した。手のひらより小さなそれに触れると、立体映像が浮かび上がる。走っているリンの姿がそこにあった。
「この少年だけど」
トリビトは血相を変えた。
「お前、人間の仲間か！」
見る間にトリビトが、翼を広げる。羽ばたいて上空へ舞い上がるつもりだ。そうはいくか、とばかりにエドがその足をつかんだ。エドのジャンプ力を侮っていた翼持つ者は、突然かかった負荷に仰天する。「げっ！？」と素の悲鳴をあげ、二人はもつれながら路上に落っこちた。
「何考えてんだよ！　っぶねぇ、放せ！」
「嫌だね。突然逃げ出すなんて、何か知っていると告白しているようなじゃないか」
白い少年の動きが鈍った隙をついて、エドは馬乗りになった。乱暴にカードブックをポケットにしまい、トリビトの腕の関節を極め

る。暴れるなら多少痛めつけてやろうか――と考えたときだ。
「何なんだよあんた。放せよ！　何もしてない奴にいきなり関節極めんのか。尋問でもしようってのか、初対面の奴に。ネコ族って奴は乱暴もんの集まりか」
露骨な嘲笑がエドの頬を張る。……その通りだ。自分の不甲斐なさを苛立ちにして、他人にぶつけているだけだ。しかし認めるのも癪で、エドも冷たい笑みで応戦した。
「逃げない、暴れないって約束するなら。そっちこそものを訊ねた旅人に対する礼儀がなってないんじゃないの。この街は不気味だしね」
そのときだ。空を裂くほどの汽笛が響いた。
エドがせつな硬直する。その背後で、青空に真っ黒な線が走った。真っ直ぐかなたへ引かれていくライン。エドは振り向けなかった。列車が、いってしまう……。
その覚悟はしていたはずだった。だけど現実に置いてけぼりを食らい、こんな異質な場所でたった一人だけ。
突然見えない何かに身体を絡めとられたかのような不安が、覆いかぶさってくる。汽笛は遠のいて、きっともう米粒ほどの大きさになってしまっているはずだ。
動揺を抑えこむことができたのは、常日頃から冷静であろうと努力してきた成果だろう。吸って、吐いて、息をしたら唇を結んだ。旅をするツールは列車だけとは限らない。だからここにいる分には問題ない。こんなトラブルなど的確に処理できる。だから……今はまず、リンのことを。
凍りついたエドから腕を引っこ抜いたトリビトが、決まり悪そうに瞬いている。
「おい、あんた。列車が――」
「いいんだ」
強い口調でエドは台詞をさえぎった。自分自身の不安など、今はどうでもいい。優先しなければならないものがある。

「戻れないことは承知していた。……いいんだ」
それでも、声から不安を剥ぎ取れない。奥歯を噛み締め、エドは深く息を吸い込む。平静を何とか装って、
「さっき見せた人族について……何でもいいから、教えてくれないか。知っているなら」
トリビトに会える、といって喜んでいたリン。この碁盤の目の街で、どうして見つからない。追跡をかわそうとあちこちを駆けたときだって、この街は動くものがいなかった。見晴らしのよい建物の屋上から見渡しても、がらんとしていたのを思い出す。不安が足元から這い上がってくる感覚をエドは必死に打ち消した。
きっと、リンは発信機も届かない場所にいる。例えば電波状況の悪い場所とかに。奴のことだ。好奇心に駆られてあちこち覗きまわっているうちに、迷子になったのだろう。怯えるトリビトを追い掛け回したのかも。だから、迎えに行かないと。
命令するんじゃない。リンにしたように、頭ごなしに怒鳴りつけるんじゃない。命令じゃなくて――
「頼む、教えてくれ。あいつは、どこにいる……？」
しかし、トリビトの少年はちっぽけな祈りさえ打ち砕いた。
「妹が……上空から突き落とした」
目の前が真っ暗になった。突き落としたってどういうことだ！
エドは怒鳴りたくなった。だが激情を抑えると唇を噛んで「そうか」と、少年を解放する。トリビトが人間を受け入れるはずがない。だから行くな、と言ったのに。傷つくだけだと、わかっていたのに。
「どこへ落ちたか……知らないか」
「わからない。あれが起こったのはステーションの前だった。妹に訊いても知らない、の一点張りだ。それより、どうして人間なんかと一緒にいるんだよ」
「それこそ関係のない話だろう」
取りつく島もないエドは、用済みだ、とばかりにトランク片手に歩き出す。リンはどこまで落ちたのだろう。街のどこかに倒れてい

るかもしれない。ケガをしているだろうから、早く探し出さないと。最悪の結果を予想して、エドの表情がかたくなる。血にまみれたリンの姿が、一瞬脳裏をよぎった。お願いだから、死んだ、なんて、ことにだけは……！

「待てよ」

エドを、今度はトリビトが引き止めた。

「こっちだって混乱しているんだ。どうして人族がやってくる。ネコ族のくせに、なんで人族と一緒なんだ。おかげでこっちはパニックだ。みんな隠れて動けない。俺たちは息を潜めて、身を隠すしか手がないからな！」

最後にはヒステリックに声を荒げ、少年は翼を毛羽立たせた。感情に任せて広がった翼の影がエドをすっぽりと包み込む。

「あいつが、何かしたか」

「いるだけでこうなってしまうんだよ。存在だけで、俺たちを傷つけるんだ人間は！」

ヒトのいない街に、その声がこだました。エドの目は、冷たい光を放ったまま翼持つものを見つめる。

「だからって、何もしてない旅人を傷つける理由にならない。ネコ族を野蛮だと罵る前にまずはトリビトが礼儀を知るべきじゃないのか。あいつは、過去なんて知らないんだから」

「礼儀？　その言葉は人間にこそ言うべきじゃないのか。そうだ、人間はすぐに忘れる。過去の話で片付けようとする。だが俺たちは違う。忘れたくても忘れられないさ。あいつらが俺たちをこんな風にしたんだから！」

「あいつはっ！」

エドのトランクが音を立てて倒れた。エドは刺すような目でトリビトを射抜くと、

「トリビトに会えるんだって、喜んでいただけだった」

白い少年は息を呑んだ。

「あいつは、僕が止めるのも聞かずに降りたんだ。お前たちに会う

ためだけに！　危険だって何度も忠告したのに！」
噛みつくように怒鳴ると、落ち着かせるように肩でエドは呼吸する。そうだ。ただ純粋に会いたいと、思っていただけだろう。家族を思い出して、話をしたかっただけなのだ。手紙を出すだけの、軽いコミュニケーションでも、リンにとっては重要だったのだ。トリビトと、話をした、という事実だけが。
危険じゃなかったよ。きれいだったよ。
きっとそんな風に、あいつは言いたかっただけだ。手紙を出してこれたよ、と。僕に向かってなんでもない風に。

12

「……それでも俺たちはああした」
かたくなな拒絶に、エドはもう何も言うまいと背中をむけた。理解を求めていたわけじゃない。こうなることは、わかりきっていた。そうじゃなければ、リンが落とされることもなかったはずだ。
「人間には過去で、これからああいう奴が増えるんだと理解していても、感情が納得できないんだ！　条件反射と言ってもいい。俺たちの傷は、深い。わかるだろ？」
わかるわけがない。思考の中で一刀両断して、エドはかばんを握る手に力をこめた。あんなにも嬉しそうにしていたリンを思うと、怒りがこみ上げたのだ。何も知らないからこそ屈託なくいられたリンに、しがらみのあるトリビトはどう映っただろう。
（とりあえず駅前に向かって、そこからもう一度探していこう）
駅の周辺は一通り見たにも関わらず、エドは思う。無事でいてとはもう祈れない。だけど、最悪のことを考えるには不確かなことが多すぎる。まだ、諦めない。まだ……。
（約束したんだ）
リンを導いていくと。
この列車を降りるまでは、一緒だね、と。
（約束をした！）
「多分もう、ここにはいない」
エドの決意を聞いたように、トリビトの声が響いた。え、とエドが振りかえる。
「街を回ったけど、それらしい影は見なかった。あんたぐらいだ、動いていたのは。だからきっと、いるならこの下だ」
たんたん、とトリビトは足を踏み鳴らした。エドが乾いた声を出す。
「この下って」

「そう。地上都市（ロールエム）だよ」

「こっちだ」

ラッカと名乗ったトリビトはエドを待って指差す。彼らは翼があるので、障害物がない分エドよりも移動が速いのだ。翼があるって便利だな、と思ったら、街が見えたとき「いいなぁ」と呟いていたリンを思い出した。あのときは「これだから人族は」と憤慨したが、「便利だな」と「欲しいな」では意味が全然違うことに気がつく。

リンは純粋にいいな、と思ったから口にしたのだろう。こうであればいい、という理想から夢は始まるのか。走りながら空を仰ぐと、ラッカがエドのトランク片手に手招きしている。僕だって足が遅いわけじゃないんだけど。

白い街を二つの影が駆けていく。エドのふさふさのしっぽが揺れる。

ラッカは地上都市までの案内を申し出てくれた。唐突な話にエドが訝ると、トリビトは苦い顔で少し笑んだ。

「手紙を出したい、と言っていたから」

「……そう言って街へ降りたからね」

素っ気ない返事は「だからどうした」とばかりに先を促す。言いにくそうにラッカは言葉を続けた。先ほどあれだけ人間を否定しておいて、捜索に手を貸すのは変だと自覚しているのだろう。理由を考えるようにしばし沈黙が落ちた。

「……泣きそうに、立ち尽くしていたんだ……。シエラも長いこと、あんな感じだったから。でも俺は、あいつがどうなったのか知りたいだけなのかもしれない」

「シエラって？」

妹、とラッカは答えた。リンを突き落としたという少女だ。ラッカもヒステリックな性格をしているが、突き落とすほどの暴挙に出たなら相当手ごわそうだ。だが「妹」、という言葉が引っかかる。

「シエラって、僕より小さい？」

「え？　ああ。シエラは俺の胸辺りだから……大きさだけを言えば」
会いたいなら準備がてらうちに帰るし、会わせられるけど、とラッカが言う。エドは遠慮などしなかった。準備しなければココから出られない、と前もって教えられている。少しでも急ぐなら従え、と白い少年は怒った。それからエドをなだめるように、落ちたのが地上都市ならあの人間は助かっているはず、と大真面目にうなずいたのだ。
何を根拠にしたか不明だったが、少し気持ちが軽くなったのは事実だ。
リンの笑顔を思い出す。トリビトに会えると喜んだのは妹が同じ種族だからだ、と言っていたリンを。
「わかりあうことは、本当に不可能かな。もう拒絶するしかないと思う？　あいつは何も知らないんだ。それは罪かな。会話も、望めない？」
案の定ラッカは不愉快になったようだ。答えを聞くまでもなく、その態度だけで回答は明らかだ。だけど、エドは訊かずにおれなかった。会話だけでもして欲しい。あいつを知りもしないで拒絶しないで欲しい。陽だまりのようなリンを。
「あんたなら、許せる？」
知らないこと、忘れられたこととして、納得ができる？　と、ラッカは静かにエドへ切り込む。時間の流れが人間よりも緩やかなトリビトにとって、今でも彼らにされたことは『少し前』のできごとなのだ。それは、このがらんとした街を見てもわかる。リンが現れただけで、こうだ。列車から見た街は、空を舞うトリビトの楽園のようだったのに。
「俺には、もうシエラしかいない。父さんも、母さんも……姉さんも、連れて行かれた」
エドは、反論できなかった。ラッカが怒りを殺して言うから、なおさらだ。
「殴った相手忘れてさ、目の前で幸せですって笑われて、あんた、

許せる？　納得ができる？　奴らはこんなことがあった過去さえ忘れようとしてる。私たちもボロボロなんです、これからはそんな過去など忘れて仲良くしましょう、なんて言われて我慢できる？」
　自分たちがした行いを忘れ、抜けぬけと平和を唱えられても信用できない。厚顔無恥も甚だしい。殴りつけた相手をさらに踏み潰しているのと同じ行為だ。
「あんただって奴らに侵略された種族だろ。それでいいって言えるのか」
　エドは即答できなかった。それでもいい、と答えられる自分自身に戸惑い、回答をためらったのだ。
（そうだ。僕はあいつを許すとか、許さないとか、そんな次元で見たことがない）
　憎んでいただろうか。
　訊かれて初めて考えた気がした。あれだけ一緒にいたのに今頃その可能性に気がついた。エドにとっても憎しみの対象として、リンが映っていたかもしれないのだ。
（ちがう。僕は初めからそういう存在だとあいつを認識していなかった）
　どうでもいい、仕事上の付き合いだと割り切っていたせいだ。あいつはバカ正直で田舎者で、面倒くさくて、すぐに「アレなに？」と聞いてくる。いつだってにこにこして、そうじゃなければとろくさくて、手が焼けて、仕方がないから一緒にいたのだ。
（ああ、本当なら、僕もトリビトたちのようにアイツを見ても不思議じゃなかったのか）
　拒絶して、否定して。
　エドは、人族が正直なところ嫌いだった。大切なヒトを傷つけるだけの存在で、周りが涙を流す原因の多くは人族だったから。だが嫌悪を表面にださず、如才なく振舞うことはできた。感情を廃するようしつけられたエドだから、この仕事を任せられたのだ。
（僕が子どもだから、適任だったというのもあったんだろうけど）

確かに、リンはすぐ打ち解けてくれた。出会うまでは緊張と警戒がない交ぜになっていたものだ。軽蔑していた人族との接触には、好奇心と期待も伴った。その分、落胆も大きかったが、補って余りあるほどのリンの素直さと屈託のなさには驚かされた。共に旅することの懸念が杞憂へ変わるのに、時間はかからなかった。

（最初の出会いが、あれだったから）

もし、リン以外の人族と旅をしていたら、どう行動していただろう。

感情的になって、車掌に噛みついて、必死になっただろうか。もしかしたら置いていったかもしれない。

先行して空を飛んでいたラッカがふと足元を見た。後ろを走っていたはずのエドが立ち止まっていたからだ。首をひねって、降りてくる。「どうかした？」とラッカが尋ねると、エドは瞳に迷いを宿しながら、

「僕は、人族が嫌いだ」

きっぱり言い切った。ラッカが「へ？」と、ぱちぱち瞬きをした。

「無神経で傲慢で、おろかな種族だから。まだ飽き足らず、戦争を画策しようとしている奴らが嫌いだ。僕らを認めないあの頭の悪さが嫌いだ」

そのために大切なヒトが泣いた。エド自身、あいつらのせいで、と何度恨んだか。あいつらさえいなければ、と喚いたか。それらの感情をすべて封じて、平然と振舞うよう求められてきた。だからといって、忘れられるものではない。

「でも、あいつと出会ったから、人族全てがそうじゃないと知っている。家族を失って、戦争を憎んで、和平を望むヒトがいることを知ってる。……あいつが、そのためにここにいるんだってことも」

だから、僕もここにいる。そう思うと迷いは消える。

「あいつなら……、僕は僕でいられるんだ。変に作る必要もなくて、一緒にいて楽しいんだ。僕はあいつを許すとか許さないとか、そんな風に考えられない。知らないことに対する怒りもない。逆に、知

らないままでいてくれたらいいとさえ、思っていたんだ」
至極まじめなエドに対し、ラッカはぽかんと口をあけた。
「もしかして――ずっと考えてた、とか？」
あんなにも憤っていたラッカが、呆気に取られた顔でエドを見る。え、とエドのほうが戸惑うと、白い少年はぶぷっと噴出た。「まじめだな！」とけらけら腹を抱えて笑いだす。それまであった二人の壁がほどけてしまう程の笑いっぷりだ。わなわなとエドがふるえる目の前で、
「いや、だ、だって、まさかずっと考えてるなんて！　あははっ、すげ、うん、あんたっていい奴だなっ。ちょっ、堅苦しいけど」
うわ、やべ、呼吸できね……っ、うわ、どうしよ。なんて大笑いするラッカに、エドは「知らないよ！」とそっぽを向いた。切り替えが早いな、このトリビトはっ。ちゃんと考えていたのに！　と、腹立たしさでいっぱいだ。なおもひぃひぃ笑う彼を恨みがましい目つきで、エドが睨む。いい加減笑いすぎだ。
「いいだろ別に。ちゃんと考えたことなかったから、考えてたんだよ。悪いのか！？」
「いや、悪いなんて言ってないって」
きりっとまじめに返事もらっても、腹を抱えて笑われた後だ。説得力がない。傷ついたハートを抱えたまま、エドは半眼になった。不信でトゲトゲいっぱいの目だ。
「そういえば……だれか探してたけどもういいわけ？」
「え、今ごろそれ言うんだ？　俺が探してたのも、お前と同じなんだって気付いてるかと思ったのに。どうなったのか知りたいってさっきも言ったろ」
ぴく、と反応してエドが軽く身構える。リンを仲間と吊るし上げるために探していたのか、と警戒したのだ。だがラッカはそんなエドなど感知せず『兄の顔』をする。少年としてのラッカではなく、どこか保護者めいた表情だ。
「妹が……シエラが、泣くんだよ」

エドは星を散らした緑の目を意味深くラッカに向けた。
「自分からあの子を突き落としたくせに、俺にしがみついてぼろぼろ泣くんだ。自分のやったことを正当化できるとは、思ってないんだよ。だけどそうしないと、俺までいなくなるんじゃないかって……怯えて。怖がって。今は薬で眠らせてる。ちょっと前まであいつ、ろくに眠ることもできなかったんだ」
この街も、そうだったのだろうか。
白い街は、相変わらず物音一つしなかった。エドとラッカの会話だけが、響いていた。ここは今まで、びくびく怯えて、安らかに眠ることもできなかったのだろうか。人間がいなくなって、何年も、何十年も、時間が経ったのに。
ラッカの妹は、そうまでして守りたいと願ったのか。この街の静けさを。列車の窓から見えた、あの世界を。自分の心を傷つけてまで。
エドはなにか言葉を探すが、適当なものが浮かばず口をつぐんだ。気の利いた言葉が言えないのは、こんなときこそ悔しかった。するとラッカが苦い笑みを浮かべる。
「そんな顔する必要ないよ。シエラは大丈夫、俺が守るから」
な、と慰められてエドは自分がひどく子どものように感じた。別に、そんなつもりじゃなかったのに。
「それで、地上をうろついてる影を見て気になったわけだ。もしかしたらって思ったんだよ。そのときにここら辺は見渡してる。だから人間は地上都市だと言ったんだ。ＯＫ？」
傍にいてやりたいだろうに。自分を責め続ける妹のためにも、リンの安否が気になったのだろう。妹の行為に責任も感じているのかもしれない。わかりあえないのか、と気軽に口にしたことを、エドは後悔していた。
（僕のわがままなのかな）
しんみりした感情が広がったあと、エドはふと気になったことを尋ねた。

「ちょっと待って。僕を見つけてすぐ降りてきたのか？」
「そうだけど？　移動早くて見失うし、手こずったけどな」
どうかした、とトリビトが首を傾けた。なんでもないと返事をしながら、エドはそれとなく辺りへ視線を這わせた。首筋に、手をあてる。そこに視線が集中している気がした。
（見ていたのは、ラッカだけじゃ……ない？）
ずっと誰かがエドを追いかけていたはずだ。絡みつく負の感情を感じていた。あの手の視線を察するのは、エドには容易い。移動が早くて、とラッカが言うなら、追跡者を見つけようと走り出してからではないのか。
「エド？　何やってんだ、行くぞ」
一緒にいて、ラッカは大丈夫だろうか。いや、エドはネコ族だ。人間ほどに敵意をむき出しにされることはないはず。だけど、とエドは胸騒ぎがして、唇をかんだ。

13

ラッカも、人間に対してあれだけの反発をした。その妹はリンを街から突き落とした。他のトリビトたちは、どんな反応をする？エドはふと背後を振り返った。白い建物の続く路地の真下が、トリビトにとって本当の『街』だ。エドが見ているのは、この表層だけでしかない。

嫌な可能性に気づいて、前を進むトリビトを引きとめようとし――エドはやめた。リンとの出会いと同じに、杞憂かもしれないのだ。それにエドは、一刻も早くリンに会いたかった。

エドはラッカを追いかける。今はまだ、ラッカの助力が必要だから。

地上までどれぐらいあるのだろう。真上から地上都市を見下ろしているのに、その詳細がさっぱりエドにはわからなかった。模型のような景色が見えるのかと思ったが、それさえ目を凝らしてもわからない。真っ黒なかたまりがあるだけだ。日差しをさえぎる、巨大な天井都市の影だからか。

吹きすさぶ風は冷たく轟々（ごうごう）と音を立て、エドの着る薄いコートを翻した。この風に足をすくわれて落っこちたら、果たして死なずにいられるか……。ぶるり、と身体が震える。ただ見下ろしているだけなのに、くらくらした。しかし、目ははるか遠い地上を探してしまうのだ。じっと見ていると、高さを実感できなくなる。このまま真っ逆さまに落ちてしまったら――

「おい、身ぃ乗り出しすぎ」

ぐい、とベルトを引っ張られ、エドは眩暈のする高さから顔を引

っこ抜いた。くは、と無意識のうちに止めていた息が出る。知らず身体が強ばっていた。高所恐怖症というわけじゃない。むしろエドは高い場所が好きだ。でも、こんなところをあいつが落ちたなんて！

「おい、あいつが無事だと言う根拠はどこにあるんだ。こんな高さなのに！」

顔と同じく引きつった声を、鬱陶しそうにラッカは追い払った。

「よく見たらわかるだろ」

「？　よく見たらって――」

惑ったエドは、冷淡なラッカが指差した場所をよくよく見つめて目を見開いた。

「……くもの巣みたいじゃないか」

「そう。白の街は、落下物が多いんだよな。不要になったものはどんどん落としているし。それをふるいにかけるんだ。徐々に網の目は細かくなっていく。下の住民を守るための処置だよ」

だが、下手したら死ぬのではないのか。四肢を切断する可能性はないのか。首が引っかかって宙吊りになった場合、無事でいられるのか。

エドの不安を聞いたように、タイミングよく何かが白の街から落ちてきた。見ている前でそれはくもの巣に引っかかる。ぐいん、とゴムのように伸びるだけ伸び、ぷちん、とくもの巣は切れた。強度はそれほどないのか、ぷちん、ぷちん、と切断され、幾重も通過していくうちに、やがて止まる。それらは落下しながらある一点まで集められると、ゆっくりゆっくり、下の街へと落とされた。砂時計の砂のように、塊となって降っていくのだ。

適当に落としているわけではないのか。この網の先にリンが倒れている可能性も――

「衝撃は緩和されて、必ずあの網の上に落ちんだる。人間が落ちる設計はされてないだろうけど」

エドを安心させておいて、この言い草だ。ラッカは行くぞ、と重い足取りで、支柱につたのごとく絡まる階段を下りていく。エレベ

ーターか何かで一気に降りるのだと思っていたエドは、この頼りないゆるやかな螺旋階段を下っていくのに不安を覚えた。どれぐらい回ったら地上に着くのだろう。ところどころサビが浮き、表面の塗装がはげた手すりと足元は、この階段の長い時間を物語っていた。いつからこのヘンテコな街はあったのだろう。

（落ちないだろうな、この階段っ）

風にさらわれないよう、エドは内側の手すりを両手でしっかりつかんで、一歩一歩慎重に進んだ。虚勢を張っているが、内心はおっかなびっくりだ。前を行くラッカに「意気地なし」だと思われるのが癪で、口を結んで必死に彼を追いかける。その白い少年は、どこか不機嫌だった。先ほど大笑いしていた彼とは一変して、無口で無愛想だ。後方のエドを振り返ることなくどんどん進んでいく。

（妹のシエラを見てから、ずっとああだ）

エドが出会ったラッカの妹は、眠りについたままだった。薄暗い部屋の窓から日が差していた。そこのベッドにいたのは小さな小さな眠り姫。おとぎ話にでも登場しそうな、ふわふわの髪をした、かわいらしい少女だ。しかし頬は青ざめていて、閉ざされた瞼からつう、と涙がこぼれていた。

ラッカは小さな手をぎゅっと祈るようににぎると、少女の額にキスをした。すぐ戻るから、と呟いているのが聞こえた。傍らで見ていたエドでさえ、どこか胸の痛くなる光景だった。

「地上都市へ行くには支柱の内部を通れればいいんだけど、あいにく俺たちはここへ入れない」

ラッカたちトリビトは、地上へ降りることを許されていない。それをあえて降りようと言うのだ。ずっと抱えている不安は、今も警報を鳴らし続けている。「これで良かったのか」と危惧しながら、エドは口に出せない。

（だってこの街のことなんか、知らないんだし）

この支柱へたどり着くまでも、相当大変だった。エド一人で彷徨っていたらどれだけ時間が浪費されたことか。ここまでの道のりを

思い出して、エドはげっそりした。
白の街にある逆さまの建物から、二人は支柱へと徐々に近づいた。白の街の建物は、いくつもの回廊で結ばれている。建物同士で支えあっているのだ。トリビトたちはその間隙を縫うように、飛び回る。エドはそんなことができないから、ずいぶん大回りしてたどり着いた。
あれっ？　おかしいな、この路（みち）であってると思ったのに。
何度ラッカがそう唸っただろう。そのたび、またか、いい加減にしてよ、とエドは文句を繰り返した。しかし、ラッカが首をひねるのも仕方がない。そもそも、トリビトに路など必要ないのだから。
そして二人は白の街の深部から、支柱に張り付いたのだ。いろいろすることもあって、時間がかかってしまった。
エドは懐中時計のふたを開けた。もう四時に近い。リンはすぐに見つからないだろうと覚悟していたが……本日中に見つけられるだろうか。早くしないと日が暮れてしまう。
途中、師中の内部に忍び込めるかもしれない、とのことだった。そうできたら地上まで一気に降りられるはずだ。
「うまくいくかな」
「無理ならこのままじゃね？　そろそろアレ着ておけ。もう空気が汚れ始めてる」
エドは無言で、レインコートのような薄い上着から、マスクを取り出した。ここを降りる前に渡されたコートは、前を止めていても強風にもてあそばれている。これは装着者を汚れた環境からある程度守ってくれるものだ。エドにはサイズが大きくて、三回も袖をまくった。エドは知らなかったが、地上でリンも同じようなものを受け取っていた。
コートに加え、マスクも装着すると、不審者のできあがりである。フードもかぶると完璧だ。マスクは、息がこもって好きではない。「呼吸しにくいもんな」と笑ったラッカの装備は、エドのそれより厳重だった。まるでスペーススーツだ。全身を隙なく覆う薄いスー

ツは、やわらかくて頑丈だった。おまけに見た目ほど重くはないと言う。泡のような膜がラッカの顔と翼を包んでいる。エドには見慣れない装備だった。

「完全環境対策都市内部でも上と下じゃ全然違う。もう、この星は滅茶苦茶なんだ」

ぽつりと呟いたラッカが、印象的だった。ここまでしなければトリビトは生きていけない。彼らの身体は繊細で、地上の汚染に堪えられない。エドのように防護コートだけでは追いつかないのだ。気道以外にも皮膚や翼から毒素は身体へと浸入し、影響を与えるようだ。

軽やかに風と遊ぶトリビトには、まったく似合わない。

重石のような恰好だった。

（あれ、じゃああいつの義妹ってだいじょうぶなの？）

エドの知る限り、リンの住んでいた『フォーグル』は、戦争でずいぶん星の大地を汚したはずだ。そんな中を生きていられるのだろうか。

（もしかしたら……変異体、とか）

ごう、と吹く風が容赦なく子どもたちの身体を揺らす。考えごとをしている余裕はない。足を滑らせたらリンの二の舞だ。あのくもの巣が安全かどうか、その身で実証しようなどとは思わない。

「エトムント！　あの扉！」

は、とエドが前方を見ると、ラッカはエドよりもずいぶん先を行っている。指差しているのは、少し下った場所にある分厚い扉だ。エドはぐっと手すりをつかむ力を込め、降りるペースを速めた。

「入れるのか！？」

「わからない！　でもこれ、思ってた以上にキツイ」

扉にとりついたトリビトは、ああでもない、こうでもないと何やらいじっていた。エドと同じくここを降りるのは辛いらしく、わずかにホッとする。だが、ラッカの汗に胸騒ぎを覚えた。全力疾走をとげた直後のように、大量の汗が少年の顔を流れているのだ。

「くそ、やっぱ俺のＩＤじゃ開かない」
「ちょっと見せて」
エドがラッカを押しのけて扉を仔細に見る。まず目に入ったのは、２００という数字だった。現在二百階ということだろうか。皿のようにシステムを見つめていくうち、エドの口元に笑みが浮かぶ。これなら――開けられるかもしれない。
そう確信したとき、ラッカの体がゆっくりと傾いでいった。エドが息を呑む刹那、がしゃん、という音がこだまする。倒れ込む寸前で、彼は手すりにしがみついたのだ。そのままずるずるとしゃがみこむと、ラッカは眉間に手を当て、かぶりを振った。駆け寄ったエドに「心配ない」と言いたかったのだろうか、もう片方の手が左右に揺れている。しばしの後、
「ごめん、やっぱ、キツイ。こんなとこまで来たことなかったから……。でも、休んだらいけると、思うから」
身体への影響が出ているのだろうか。荒い息遣いのトリビトを見ているうち、エドの顔から余裕が消える。
「この内部に入れたら、マシになれる？」
「わからない……」
「じゃあ、ここを押し通って、誰かに見つかったらどうなると思う？」
これの返事もわからない、だった。エドの決断は早かった。――ここを通る。
今は戦時中ではないし、ここは女王さまの領地だ。もし捕まったとしても、乗り越えられるはず……。ラッカの安全を優先したい。
システム自体は旧式で、エドの知らない文字が並んでいた。うかつに触ってエラーが起こったら厄介だ。単なる認証エラーならまだしも、セキュリティに引っかかるとたまらない。
エドはポケットに手を突っ込むと、カードブックを取り出した。ラッカの持つＩＤカードと厚さや形状は同じだ。案の定リーダー（認証機器）に差し込むことができた。浮かんだ文字は『ＥＲＲＯＲ』

。エドのＩＤではやはりアウトだ。ここまでは、ラッカと同じである。
「大丈夫なのか」
「さあ。やるだけやってみる」
エドはさらに折りたたみ式の簡易パネルと、手持ちのコードを取り出した。トランクは手がふさがるのでラッカの家に置いてきたが、こういった器具はいくつか持ち歩いていたのだ。
カードブックと接続し、パネルに触れた。照合作業の後、使用者がエドであると認め、不透明なディスプレイが出現する。エドの指が、パネルを滑っていく。これはコンソール（操作卓）だ。立ち上げが面倒で普段の使用を控えているが、カードブックでは扱いが難しい場合、これが役に立つ。
「よし」
半透明のディスプレイに、大量の文字が現れた。目では追いつけないほどのスピードで流れていく。ウィンドウがいくつも出現し、目まぐるしく切り変わった。エドの指示に従い、リーダーの内容を読み取っているのだ。
（ラッカはこのまま外にいちゃいけない気がする）
エドの指は矢継ぎ早に動いた。セキュリティをどんどん突破していく。ここのネットワーク内部に直接介入するのが目的だ。
（ハッキングなんて、する羽目になるとは思わなかったけど）
芸は身を助くというが、嫌悪していた技術と知識が役立って、エドは苦笑した。ずっとゲーム感覚で教わってきた。凄腕ではないが、そこそこの腕前だと自負できるようになったころ、これが犯罪行為だと知った。正義感の強いエドは、ショックで怒り狂ったものだ。
以来、コンピューターとはカードブックを通じて接してきたが――こうして役立ってしまうため、なかなか縁が切れない。こくん、とエドは生唾を飲み込んだ。大丈夫。システムの破壊行為をしようというわけじゃない。ただ、誤認させるだけ。あとは……データの改ざんをすれば。

『お前にすっげぇ面白いもん教えてやるよ』
同じネコ族の、年上の友だちが気まぐれに教えてくれた。遊びだと思って、エドもどんどん吸収した。思えばワルイことばかり教わった気がする。これが犯罪だと知ったとき、怒髪天をつく勢いだったエドを笑ってなだめすかしてしまった、唯一の友だち。一人ぼっちだったエドを何かと気にかけてくれたあのヒト。今はどこにいるのだろう。
『覚えといて損はしない技術だぜ？　いつか役立つさ、絶対に。だってお前は女王さまのために働くんだもんな』

14

それなら、これぐらいできて当たり前だ。そんなことを平然とのたまったあのヒトは、いつも自信に溢れていて、不敵な目つきだった。あのときは「役立ってたまるか」とばかり激高したけれど。

ふ、と小さな笑みが零れ落ちた。そうだな、役に立った。この扉はもう、ないも同然――

「いけるのか？」

返事は、エドのにやりとした笑みだった。その笑みは強ばったものだったが、ゆっくりエドは首を縦に振る。起き上がったラッカの目の前で、エドが人差し指でキーを叩く。すると、半透明なディスプレイにパスコード認証、と文字が浮かんだ。ピーという音と共に扉がスライドしていく。エドが無言でこぶしを握りしめたのと、ラッカの歓声が上がったのは同時だった。

「おどろいた！　あんた、スパイかよ」

「まさか！　成功するとは、思ってなかった！」

ラッカがエドの背中をバン、とたたいた。緊張から開放されて、笑みが浮かぶ。

二人の少年は笑いあうと、この内部へと足を踏み出した。監視カメラが、二人の映像を管理者であるヴォルフガングへと送信していたなんて、露知らず。

かつん、と靴音が響いた。エドのグリーンの目が金に輝く。支柱の中は真っ暗だった。背中からの光が四角く黒を切り取っていたが、部屋の暗がりを追い払うには狭すぎる。ラッカが仏頂面になった。

「エトムント、何か見えないか」

エドがくすりと笑った。ラッカはトリビトで、鳥目だから暗がりでは何も見えないのだ。対するエドは夜が得意である。ラッカが顔を赤くして睨んでくるけど、エドはそ知らぬ顔でしっぽを揺らし、闇へ踏み出した。

「休めそうな場所は見当たらないね。灯りでもあればもうちょっと奥まで見通せるんだけど」

エドの台詞の途中、視界が白く塗り換わる。突然の光に網膜が焼かれ、二人は短い悲鳴をあげた。真っ白だった世界が徐々に輪郭をかたどっていく。手をかざしていたエドは、やっぱり、ともらした。煌々とした光の下、がらんとしたフロアが出現する。

「灯りって単語に反応したんだ。白の街にはないの？」

「この街のシステムを俺たちが使えるとでも？　こういうのは外の奴らが置いてっただけだ」

トリビトのための設備ではないと吐き捨てたラッカの膝が、がくんと曲がった。立っているのも本当は辛かったらしい。ラッカ、と叫んだエドに「大丈夫だ」と変わらずトリビトの少年は微笑んだ。エドは、彼を壁際まで引っ張っていく。

呼吸をするたび、ラッカの胸が大きく膨らんだ。辛そうだった。内部に入ったおかげで少しはマシかも、とラッカは言うが、気休めにならない。それが表情に出てなければいい、とエドは思う。後悔しているなんて、彼に悟らせてはならない。

並んで座っていると、不安がさざなみのように押し寄せる。ラッカを連れ出したのは間違いではなかったか、と。ひたひたと、恐怖が忍び込んでくる。

「そういえば、この街って変わってるね。色んな街を見たけど」

雲海から突き出た街は、特別の印が与えられたそれだと、すぐにわかった。

落ちてしまいそうな白の街は砂時計の砂のようで、中央に行くにつれて長くなる。近づいてみれば回廊がそれらを繋いで、互いを支えあっているのだとわかった。とくに杭のようにそびえるこの中心

の柱には、いくつもの回廊が伸びていた。
「おかしいって思ったろ。その通りさ」
うつむいたラッカが自嘲的で、エドは自分が地雷を踏んだと知った。
「ここは鳥かごだ。飛べない鳥ための檻なんだ。街じゃない。街とは呼べない。知ってるか？　愛玩用の鳥ってさ、逃げられないように翼を切られるんだ。俺たちは、それと同じ」
トリビトの場合は、この脆弱な身体を与えられた。
逃げられないように、そっと閉じ込められた。
「女王だって俺たちを救えない。俺たちは世界から切り離された存在なんだ」
「ラッカ、街は女王さまに守られてる。そんなの、キミたちが良く知ってるだろ？」
本国と密接している駅領だと言って良いはずだ。エンジャーグルやヴィーグエングは経済的に自立しているので、この差はエドの目にも明らかだった。オーウェインこそ女王さまの保護を受けている、最たる場所であり種族たちではないのか。
「守られてる？　閉じ込めてるの間違いだろ」
「ラッカ……？」
「こんなに弱くて、みっともない役立たずを隠しているだけだろ。飛ぶことしか能のない俺たちが、だれの目にもさらされないように。外の世界と遮断して」
「そんなことないよ」
「俺たちだって、望んでこうなったわけじゃないんだ！」
しんとした冷たい空間に放たれた言葉は、ラッカ自身へと返っていく。ざくり、ざくりと突き刺して、粉々に砕いてしまう。そうして彼らは自らを傷つけ、ボロボロの身体で寄り添いあって生きてきたのか。
――あんたは許せる？　納得ができる？
ラッカの言葉の意味を、遅れて理解した。人間について語ったあ

のとき、エドの場合、人間の罪は過去の話だった。それも直接の被害者ではなく、間接的なものだ。大切なヒトが泣くのは嫌だ。戦争を起こすのは嫌だ。……他人の嘆きを聞き続けた故の痛みだ。

ラッカの場合はちがう。

彼にとって人のしたことは、今もなお、続いている。直接つけられた傷は、今も隙あらば広がっていく。忘れようとしてもふとした拍子に蘇り、闇を撒き散らす。だからラッカたちトリビトは、何十年が経過した今も、忘れられない。

自分たちの存在そのものが、人間の罪の証なのだから。

「本当、嫌になる。星間列車もさ、いっそ来なければいいのに」

補給だけして、列車の乗客は決してそこから降りてこない。乗務員ですら最低限の接触しかしない。ステーションの職員は非常勤で、問題が起こらない限りここへはこない。システムによって管理されているのだ。トリビトはあらかじめ必要分を運ぶし、列車への搬送は機械任せである。それが、身体の弱いトリビトを気遣ってのことだとしても、彼らにとってどれだけ列車の発着が空しいか……、きっと外の民は考えてくれない。

哀れみだけで、遠巻きにした。トリビトたちは孤独で、この小さな世界に縛り付けられた。

出口はあってもそこから出られない。

「ラッカは、女王さまが信じられない……？」

耳をぺたんこにして、エドはひざを抱える。ラッカが恨むのは人族だけじゃなく、自分たちを早急に救ってくれなかった王へも向かっていたのが悲しかった。こんなにも守られているように見えたのに、それが彼らに届いていないことも。

「信じたかった。でも、シエラは今でも悪夢にうなされてる……、街も、俺も、何もかもが」

そのとき、何かがうごめく音をエドの耳は捉えた。かすかな、エドじゃなければ聞き逃すほどの音だ。ざわり、ざわりと足元が揺らいでいるような錯覚。何かがくる、と直感が告げた。

「なに……？」
不気味さに立ち上がったエドの耳が、音源を探して動いた。異常を察したラッカも、不安げに首を動かす。
（なんか、妙だ）
今さらながらネコ族の来訪者は奇妙さを感じていた。このホールは、二人が入ってきた扉以外に扉らしいものは一つもなかった。それどころか階段や小部屋といった、仕切りもなにもない。ただ、がらんとしたフロアがぽっかり口をあけているのみなのだ。
街を支えている支柱の大きさは、このホールよりも大きいはず。
（やってくる奴がいるなら、そのための通路があるはずなのに）
そんなものさえ、一つも見当たらない。
嫌な空気をあおるように、パッと照明までが消えた。エドがもう一度「灯り」と呟いたが、システムは何の反応も示さない。これは――より高位からの命令が下ったということだ。ぴくん、と猫の耳が動く。
「音がする。下から上へ何かが上がってくる。これは、エレベーター？」
防犯システムの稼動なら、この先何が起こるかわからない。文字通りシステムの手の内にふたりはいるのだ。
（でも、ここが重要機密を抱えてるなんて知らされてない。警告なしに侵入者を排除するような時代じゃないし。第一、僕程度の腕で入り込めたんだから）
そして、リンのように二人は人族でもない。
暗がりの中、耳をすませるエドの傍らで、ラッカが入ってきた扉へ飛びついた。しかし、
「なんで？　開かない……！　さっき開いたのに！」
がちゃガチャと扉を触っていたラッカが、助けを求めるようにエドを振り返った。カードブックを何度通しても、表示はエラーを告げるのだ。おそらく、外へ出るためのパスを変えられた。侵入者は逃さない、ということか。エドの尻尾は緊張でふくらんでいた。

「ラッカ、外へ出ちゃダメだよ。そのために中に入ったんだから」
「俺は平気だ。出るぞ、捕まるよりマシだ！」
奴らがくる、とトリビトの少年は声を荒げた。奴らとはトリビトを虐げた人族のことか。ここはもう人族は追い払われたのに。　過去の虜囚になっている、トリビト。女王さまはなぜ、彼らを安心させてやらないのだろう。理由があるんだ、とエドは無理やり納得しようとした。女王さまを疑うなんてこと、あってはならない。それともこれが――軽蔑する、と話してくださった理由なのか。……天井都市は、楽園に見えたのに。
「くそ、なんで、なんで開かないんだよ？　あいつらがやってきたらどうなるか――開け、開けよ！」
「ラッカ、扉が開いても出ちゃダメだ。今だって真っ青な顔してるんだから」
「追っ手がくるとわかって平然としてられるか。いやだ、俺はいやだ。シエラがいるんだ、もうあんな目に合わせちゃいけない、俺まで捕まったら一人にさせてしまう！」
「もう平和なんだ。人族は追い払われた。ここは女王さまの領地だ。あんな時代じゃないんだ！」
エドの抑制など、ラッカは聞いてくれない。連れてくるべきじゃなかった。そんな後悔があふれだす。行き道だけ教えてもらって、ラッカには戻ってもらえばよかった。無事に楽園へと帰さなければ――あの少女のもとへ返さなければならないのに。
そのとき視界の端に、ふと先ほどまでなかったものが、見えた。
「ラッカ、あれ」
エドは固い表情のまま、正面を凝視する。壁だった場所に通路ができていた。忽然と現れた。トリビトは不安そうに、きょろきょろしている。どうやら見えていないらしい。
「路ができている。さっきまでなかった路が」
音もなく内部が変化している。闇の中でなにかがうごめいている。ここにあるシステムは、旧式なんかじゃない。

声が震えるのを、自分が取り乱すのを、懸命にエドは自制する。ここでパニックに陥ればどうなるか、本能的な危険信号がちらついた。
「これとよく似た装置を知っているよ。システムが登録された者の思考を読み取るんだ。建物の作りさえ、簡単に変えることもできる。『シーカー』の技術だ。ここのは音声で動くんだと思っていた、けど」
耳の痛くなる悲鳴が上がった。ラッカがしゃにむにエドを突き飛ばす。
「ラッカ落ち着いて。足音は二人だけだ。他に変な音はしない。だから！」
落ち着いていられるか、とラッカは赤い目をたぎらせた。扉を蹴りつける彼の力は、エドじゃ抑えきれない。もともとラッカのほうが身体だって大きいのだ。暴れるトリビトの指先がエドの顔をかすめ、赤い血が流れた。いつの間にか、ラッカの指には鋭いかぎ爪が伸びている。それどころか、エドはラッカの力が増していくようで、しがみつくだけで精一杯だった。
――止められない。
「ラッカ！　何があっても守るから、信じて。突拍子もないことはしない、変なことは口走らない。おとなしく従うって約束を」
「そんなことゴメンだ。あいつらが来るんだぞ！」
「シエラを守るんじゃなかったのか！　わかっているのか、キミは、帰らなきゃならないんだろ！？」
「そうだよ。落ち着いてほしい」
割って入ってきた第三者の声に、エドは振り向くことができなかった。すうっと頭から血が引いていく。徐々に明るくなる室内のもと、彼らはやってきていた。ラッカに気をとられて、接近を許していたのだ。
（奥から灯りが）
彼らがやってきた場所に仄かな白い輝きがあった。現れた二人が

通り過ぎれば、また明かりは消えていく。そして今、エドとラッカの場所にも再び人工的な光が灯った。
予想に反して、エドが羽交い絞めにしているラッカは、静かだった。あの二人に目が釘付けになっているのだ。やってきたのは男が一人、女が一人だった。男はここにいるはずのない人族のようだ。ひょろりとした体格は手足が長く、一見若者のように思える。黒髪の短髪に、青い目をしていた。何故ここにいるのだろう。人族は追放されたのではなかったのか。
わからない。
だが、武装しているようすはない。エドとラッカに対する敵意も感じられない。
一方の女は、折りたたまれた翼が背にあった。トリビトである。ただしラッカとは正反対の真っ黒な翼だった。髪の色も肌も服も黒い。唯一同じなのは、その赤い瞳だけ。彼女は少女と呼んでも差し障りない年頃で、不透明な微笑を浮かべている。

15

奇妙な組み合わせだった。
なぜ、この場に女性を――それも、威圧することもできない少女を――人族は連れているのだろう。
最初に緊張を破ったのは、身体から強張りを抜くように呼吸をした人族の男だった。彼は少し困ったように少年たちを見つめ、
「すぐに戻ってくれないか」
「え……？」
「こんなところまで降りてはいけない。早く天井都市へ戻ってくれないか。話ならその途中で聞こう。歩けるね？」
人族の男は一定の距離をあけて止まった。男は眉尻を下げて微笑んでいる。それが誰かに似ているようで、エドには違和感があった。他種族の区別は難しい。黒髪で青い目の人族に、知り合いなどいない。記憶を探っても誰とも重ならない。
困惑を抱えるエドの腕から、ラッカがずるりと落ちた。ぺたんとしゃがんだ白いトリビトは、呆然と、呟いた。
「姉さん……？」
暗がりに少年の震える声が散った。
「姉さん、姉さんなのか？」
振り返ったエドの脇を、ラッカがすり抜けていく。エドが止めるのも聞かず、彼はつまずきながら躍り出た。奥に控えた黒髪の少女を目指すのだ。言われてみれば、黒いトリビトの彼女とラッカは似通ったところがあった。ほっそりしたあごや、手足の形、目元なんかがそっくりだ。だが、彼女はラッカとは真逆ではないか。パーツが似ていても、ラッカは真っ白な少年だ。
「姉さん。姉さんなんだろ？　俺だよ、わからない？　ラッカだよ！」
「ラッカ！　彼女は真っ黒じゃないか。キミの姉なんかじゃ――」

我に返ったエドが引き離そうと腕をつかむと、白い少年は乱暴に振り払った。
「そんなことないっ！　間違えるわけがない。姉さんは人間に連れて行かれた。ずっとずっと、探していたんだ！」
ラッカの言葉が引き金となって、別の誰かの台詞が頭に響いた気がした。ラッカの態度、ラッカの表情。エドにも覚えのある感情だった。願いが叶ったと喜んだのに、横から水をさされ激しく反発した、生々しい記憶。ずっと胸にしまっていたものが、浮上する。
『リリィは……リーゼロッテはお前とはいられない。わかるだろう！　この状態じゃ、どうしようもないんだ』
これはエドに向かって放たれた言葉だ。あれは、そう、年上の友人の台詞。ぴくりとも動かない姉を抱えた、彼の台詞。あんな風に怒気をあらわにした彼を見たのは、初めてだった。
『そんなことない！　リィ姉さんはここにいるじゃないか！』
姉は魂の抜けた人形のように、友人に抱えられていた。呼んでも揺さぶってもエドを見つめてくれない瞳。ちがう、うそだ、と頑なに否定したのはエド自身。泣きじゃくって手を伸ばしたのに、今も空をつかむばかりで。
（姉さん）
知らず、ラッカと同じ言葉を唇がなぞっていた。脳裏をよぎったのは、まだエドが一人ぼっちじゃなかった頃のこと。あの頃は姉さんがいたのに――
ラッカが黒の街へ案内を買って出たのは、捕らわれた家族について探りたかったのだと、遅まきながら気づいた。なんのかんのと理由をつけて、一緒に降りてくれる誰かを探していたのだ。
「姉さん、シエラが待ってるんだ。帰ろう。一緒に、白の街（オーバールウ）へ帰ろうよ」
エドの腕から、ラッカの身体がするりと抜け出た。トリビトの少年は勢いづいたまま、倒れるようにして『姉』の腕を取る。頭を彼女の胸に押し付けて、ラッカは呼気をひそめた。姉さん、と肩を震

わせながら繰り返すのだ。
　しかし冷たい刃は、容赦なく降りかかった。
「残念ながら……、彼女は古い記憶を持たないよ」
「どういう意味だ！」
　叫んだのはラッカだった。
「きみの姉だというのは記録上本当だ。でもきみが弟だと、彼女はわからない」
　背の高い、ひょろりとした男は眉間に皺をよせて、うなる。
「彼女は家族がわからない。きみが喚いても届かない。話すこともできない。彼女は黒種になってしまったんだ。――ちゃんと調べてから来るべきだった。よりにもよって会わせてしまうなんて」
　黒いトリビトは、小首をかしげてラッカを見つめていた。弟を映す瞳は「どうしたの」と告げているが、それは機械的な仮面のような笑みだ。身内へ向ける、あたたかなものではない。生きた笑顔ではない。戦慄したラッカのようすが、痛々しい。
「……姉さんに何をした。黒種ってなんだ。どうして俺がわからないんだよ。姉さん、姉さんっ。俺だよ、弟のラッカだよ！　わからないの？」
　黒種の少女を揺さぶるラッカは強張った顔をしていた。黒種の少女は、自分がなにを呼びかけられているのかさえ、理解してないようだった。ラッカが、項垂れる。
「そんな……じゃあ、父さんと母さんも？　生きていても俺たちがわからないのか……？」
「私たちがしたことは、彼女を延命させただけだ。そのために失った部分も大きいが、彼女はこうして生きている。きみのご両親は、残念ながら助けられなかったんだ」
「うそだ。うそだ！　お前が姉さんをこんな風にしたのか！　うそを言うな。姉さんが、俺たちを忘れるわけが、な、い……？」
　激昂しているラッカの膝が、突然折り曲がった。え、という声はラッカ自身が発したものだ。なぜ自分が倒れたのか判らないらしく、

起き上がろうとして失敗していた。「ラッカ！？」とエドが少年の肩を抱きとめたが、それに応じることさえできていない。先ほどと同じく眩暈がするのか、ラッカはかがんだ状態で頭を押さえ込んでいた。額にびっちりと汗を浮かべて。

「診せて」

それまで動かなかった人族が、顔色を変えて寄ってきた。ラッカの首筋へと指先を伸ばす。それをエドが弾いた。ラッカを守るように抱きしめて、睨みつけた。これ以上近づくことは許さない、と威嚇して。

ラッカは、頭を押さえてぶるぶると震えている。頭痛がするのか、歯を食いしばっていた。こんな状態の彼を、さらに追い詰めるような真似はできなかった。

「無理もない……。白種の身体じゃここでもすでに危険なんだ。早く戻らないと手遅れになる」

男は、背後に控えた黒種の女性へ「マーサ」と呼びかけた。彼女は持っていたスーツケースを広げる。そこから注射器を取り出した。中に水色の液体が満たされている。エドは息を呑んだ。

「何なんですか、それは！？」

「何をしているんだ。彼を苦しめたくないだろう！？」

エドが気おされた隙を突いて、男はラッカの腕を取った。なんだ、このヒトは本当にラッカを案じているのか。判断に迷う。男の言うことが本当なら、ラッカは助かるのだ。だが、注射針を見たラッカは青ざめた。

「やめろ、嫌だ、なんだそれは！」

腕を振り回して抵抗する。鋭い爪が、男を掻く。

注射器が破損しないよう身を引いた男は、激怒した。

「これは薬だ。きみの回復を手伝うためのものだ。黒種に落ちていいのか？　投与が遅れると死ぬ可能性もある。助ける手段を持つ私に――見殺しにしろと言うのか！」

「人間が、助ける？　俺を助けるだって？　俺たちをこんなにした

のはお前たちだろうが！　ふざけんなよ、信用できるか、気持ち悪い！　俺に触るな！」
白かった肌を真っ赤に染めて、ラッカは人間を睨みつけた。頬も、鼻も赤く、エドのつかんだ肩も熱かった。ぜいぜいと息をしながらも、精一杯虚勢を張っているのだ。身体の不自由さのため、逃げられないと悟っていながら。
近づいたら、殺してやる。それぐらいの気迫がエドにも伝わってきた。
「マーサ」
人間の一言に、ラッカを黒種の女性が抱きすくめた。
「な……っ、ねえさ……っ」
凍りついた少年とは対照的に、彼女は微笑んでいた。先ほどとまったく変わらない笑みで、嫌がるラッカの動きを封じるために片腕を背中で捻り、床へ押さえつける。小さくラッカが悲鳴を発しても、躊躇なく彼女はそれをしてのけた。弟の言葉より、人間の男の命令を優先したのだ。
ラッカの心がぐしゃりと潰れた。
そんな音が、聞こえた気がした。
注射はすぐに終わり、開放されたラッカはぐったりと倒れた。焦点を結ばない虚ろな目で「うそだ、うそ……」と繰り返していた。憎んでいる人間の前で、無防備な姿をさらしたのだ。静かになったトリビトの少年からは、抵抗するためのエネルギーが抜けきっていて、エドは見ていられなかった。まるで、抜け殻だ。
「これはトリビトにだけ感染するんだが……坊やは大丈夫かな」
坊やと呼ばれ、エドは少々気分を害しつつ、「エトムントです」と名乗る。男はホッとしたようだった。エドくんだねと確認され、ネコ族の少年がうなずく。
「平気です。特に身体の異常は感じられません。……さっきの薬は」
「毒の進行を抑えるための薬だよ。危険なものではない。とにかく、彼を天井都市（オーバールウ）へ運ばなければ」

男は、敵ではなさそうだった。
しかし信用できない。先ほどのやりかたはラッカに酷だ。それを承知でこの人は選んだ。
ラッカはエドが運ぶと申し出た。連れて行く途中で彼の意識が覚醒した場合、エドのほうが混乱は少ないと判断したのだ。躊躇う男をけん制し、ラッカを支えてエドは立ち上がる。
一歩、一歩と踏み出した。大丈夫、歩ける。
「外にいたときから、立っているのさえ辛そうでした。だからここへ入ったんです。さっきの……死ぬというのは……本当ですか。そして――あなたはどなたですか？　ここにまだ人族がいるなんて」
「エドくんの想像通り、私はトリビトの研究者だった一人だ。ここの管理を女王さまより仰せつかっている。名前はヴォルフガング。私で三人目になる」
女王さまから任命された管理者だ、ということがエドをホッとさせた。それなら、ヴォルフガングと名乗る彼は味方だ。しかし人間であり、さらには、
「三人目？」
管理者は淡く笑い、「こっちだ」と通路を進んでいく。建物の内部がどんどん作りかえられていくのがわかった。二人を覆う光は、壁が発光しているのだと途中エドは悟った。
新たな路が、敷かれていく。殺風景で素っ気ない路が。
「僕は、ヴォルフガングという人間のコピーだ。この街の管理者として生きるためだけに存在している」
「コピーって……まさか、クローン……？」
それは禁止されている技術だった。手足や、臓器、身体の一部ならば養体・養肢として医療的に使用されることはあるとしても、意思を持ち人格を持つ身体のコピーは違法だったはずだ。しかし、女王さまが許可していると言う。疑惑と嫌悪の入り混じった眼差しに、男は微苦笑を返した。
「ここは、どうしても第三者の手がいる。トリビトは二種に分かれ

てしまっていて、彼ら自身が自分たちを管理できない状況だ。とくに黒種たちは意思が希薄で、呆然と座り込んでしまう者も多い。それらをまとめ、彼らの意思を尊重するのも私の役目なんだ」

ラッカのように、トリビトは身体が弱い。繊細で、脆弱で、ふとした拍子に絶滅してしまう可能性さえある。

「それなら、あなたじゃなくとも」

「傷ついたトリビトがさらに追い詰められないようにと、女王さまのご配慮だよ。彼らの生態は特異だ。異種族の研究者たちが押し寄せたら、再び傷ついてしまう。少なくとも今はまだ、そうした目にあうのはよくない」

先ほどのラッカのパニックや、リンが降りただけで騒然となった街のようすを思えば、正しいのかもしれない。女王さまはトリビトたちを見限ったわけじゃないのだ。しかし、なんて皮肉なのだろう。彼らを追い詰めた者たちの手を借りねば、種として維持することもできないのか。

（今は時間が必要なんだ）

いつかトリビトたちの傷が癒えれば、違った対処をすることもできる。

（だけど、もう開放されて百年近く経った。どれだけの時間が必要だと……？）

時がとまったようなトリビトの感覚が、ずれているのだ。この世界では長命な種族と短命な種族との乖離（かいり）が深刻なことになっていた。寿命だけではない。さまざまな種族同士で溝ができている。それぞれで価値観が違い、寿命が違い、主張が違う。とくに、人族は長く生きても一五〇年が限界だろう。普通の人族たちは八〇余りでこの世からいなくなっていくのだ。トリビトの存在さえ、彼らは忘れてしまうに違いない。

あまりにも種として脆弱すぎやしないか。エドはそのあり方に不安を覚えた。肩でぐったりとしているラッカでさえ、異常だ。身体も精神も、彼らはキレイ過ぎる。繊細で脆く、ガラス細工のようだ。

「私が任されたのは、研究者として彼らに責任があるからなんだ。僕もトリビトたちが好きだから、この仕事も苦ではないし……」
私と僕、と使い分けているこの管理者が、エドには不思議だった。こんなヒトがトリビトを追い詰めたのだろうか。男は、エドが凝視しているのに気づいて苦笑した。
「どうしても接触の多くなる黒種たちはともかく、白種たちとは接触を避けてきたから、この子が知らないのは当然なんだ」
嫌な事実を教えてしまった、とヴォルフガングが付け足す。
「これは私たちの罪なのだと、わかっているけど。ダメだね、つい忘れてしまう。自分は罪人なのだと」

16

罪人、という言葉が重たく響いた。それを静かに受け入れている男が少年二人へ向ける眼差しは、やさしい。

「教えて下さい。あなた以外に、トリビトを管理する人族がいるの」

「いいや、私一人だ。ほかに人族や研究者を入れるのはやめるよう、進言もしたのも私だ。他種族に介入されることを、彼らは極度に恐れているからね。そして私には、ここを離れられない理由がある。それを女王さまはご理解くださっている」

エドは、生唾を飲んだ。外と切り離された世界でたった一人暮らさねばならないなら、それは『罰』と呼べるのではないか。己を憎む異種族の世話をし続けるための生しか、残っていないならば。

（それなのに、どうしてこのヒトは穏やかなんだろう）

やさしい眼差しは愛情さえうかがえた。だけどトリビトは、あなたを許さないだろうに。

生まれてから死ぬまで、一生をトリビトにささげたって。

「あなたはトリビトを好きだと言いました。それは、どうしてですか」

しばし足音だけが静寂を揺らした後、管理者はしずかに口を開いた。

「天使という存在知っているかい」

人族の持つ妄想の産物だと、エドは渋面になった。人族の信仰するメジャーな宗教に登場する、翼を持った神の御使いである。エドの表情で答えを知った男は、少しだけ苦笑した。

「人間は愚かでね、夢を見るんだよ。その夢の実現に向かって走って、走って、走って……こんなところまで来てしまった。そのために犠牲になったたくさんのものを一切見ずに、ただ夢中になって追い求めるんだ」

救いを求めるように「今よりもっと」を目指してきた。現状に満

足できない貪欲さと好奇心は、可能性に気づいたら止まれない。
「そして、ふと後ろを振り返れば……そこにあるのは自分の見えていた光と同じだけ濃い闇だ。幾度となく後悔してきたのに、人は光が見えればまた走ってしまう」
その結果が戦争であり、人族の貧困だ。肥大し続けた彼らは、滅びの道を歩んでいたと気づかなかったのか。
「私たちはね、トリビトを見て『天使』だと思ってしまったんだ。ここが『楽園』だと」
今では鳥かごでしかない。トリビトは羽ばたくための翼も動かせず、生殺し状態にされている。
「彼らがこうなってしまったのは、その夢のせいだから。私は彼らを守りたいと思う。ただ安穏と暮らしてもらいたいんだ」
それが、償いなのか。
ネコ族の少年はまぶたをゆっくり伏せた。エドのような子どもにもきっちり説明をしてくれる彼に好感を持つと同時に……そんな説明を聞いてしまったラッカのようすが気になった。ラッカは依然、ぶつぶつ繰言を発している。
「あんなの、うそだ。信じない……俺は信じない……姉さん……。うそだ……」
ラッカ、と呼びかけてもエドの声なんか聞こえていない。その悲痛さに胸が詰まる。少し無言で歩を進めてから、管理者はエドを振り返った。
「それで、エドくんもさっきの列車でやってきたのかな。ここへ降りた原因は、リンと名乗った少年かい？」
意外な情報に、エドは息を飲んだ。
「あいつを知っているんですか！？」
手短にエドが状況を説明し終えると、エレベーターが目前に迫っていた。
「よかった。あの子はこのマーサが見つけてきてくれたんだ。今は私の部屋にいる。映像できみを見たとき、そうじゃないかと思った

んだ」
「あいつは無事なんですか。ケガなんてしていませんか」
「無事だよ。すり傷と打撲がいくつかある程度だから安心していい。……強い子だね。喚くこともせず、次にどうしたらいいのか懸命に考えていたよ。甘えられない、と必死で立ち上がろうとしていた」
そうですか、とエドは腰砕けになりそうな身体を持ち直した。ラッカの言ったとおり、あの網がリンを助けてくれたのだ。よかった、よかった、と思ううちに視界が揺らめいて、エドは慌ててぐっと気持ちを強くする。それなら、早く迎えに行かないと。
「さあ、この子を天井都市へ連れて行こう」
しかし、ヴォルフはエレベーターに乗ろうとするエドを、突如呼び止めた。危険かもしれない、と忠告するのだ。ヴォルフは眉間に皺を寄せ、
「トリビトたちのようすが、おかしい……。街が静かなのにざわついている。どういうことだろう、こんな状態は初めてだ」
エドはリンのせいだ、とピンときた。ヴォルフもすぐそれに思い立ったらしく、
「そうだった。あの子はトリビトと接触してしまったから黒の街へ……」
気配はするのに決して姿を見せなかったトリビトたち。物陰からエドをずっと監視していた彼ら。いったいどれだけの悪意がリンを襲ったのだろう。
「トリビトの様子がわかるのですか？」
「ああ、私は電子チップ（ＩＣ）を埋め込まれているんだ。一人で管理するには限界があるから」
機械を自在に操れる力を持つ彼は、やろうと思えばこの街を一人で制圧してしまえるのだろうか。
背筋にぞくりと悪寒が走る。少年の畏怖に気づいた管理者は、苦い笑みを傾ける。
「もっとも、私自身を戒める暗示もある。そうじゃなければこの街

を任されることもなかっただろう。とにかく、外へ出るのは止めたほうがいい。トリビトは平和を好む性質だが――この星が悪化の一途をたどったのは、彼らの暴走も原因の一つだ。不用意に出て行くのは危険だ」

「人族が星を変えたと言われていますよ。あなたがたがそこまでトリビト追い詰めたということでは？」

エドの声は平坦で、冷たい響きを含んでいた。それは人族からの物言いだ、とカチンときたのだ。

「私はトリビトを守りたかった。しかし双方を押さえることはできなかったんだ。こんな結果はだれも望んでいなかった。現状は、トリビトを守るための処置だったと言ってもいい」

「そんなのは支配者側の言い分に過ぎない！」

声は、エドの予想を超えて鋭くとがっていた。目をわずかに見開いたヴォルフから、エドは視線をそらした。

「人族の傲慢はトリビトを傷つけるんです。あなたの言う安穏とした生活の果てが、これです。……幸せだと言えるのですか」

そもそも何故、人族は夢なんか見るのだろう。どうして他種族を羨むのだろう。他種族を受け入れないのだろう。彼らの文明は偉大だったのに、自らの手でどうして破壊しようとしたのだろう。

一度噴出した憤りはすぐに鎮火しなかった。ああ、やっぱり僕は人族が嫌いなんだ……。嫌でも自分の感情に気づかされてしまう。そして、冷静じゃなくなってしまう。今さら過去を責めても仕方がないとわかっているのだ。人族は、それ相応の代償をすでに支払っている。大きな損失だとわかっているだろう。

リンは機械音痴で、風呂さえまともに入れなかった。当たり前にあるはずのシステムだって扱えないほど、彼らの文明は低下しているのだ。

人族は、技術の継承を行わなかった。確かに開発・進化は彼らの力だっただろう。だが、それを受け継ぐものがいなかった。全盛期、記憶野でさえ機械に頼っていたせいで、彼らの技術はすべてコンピ

ュータの中につまっていた。あれらと共存できてさえいれば、きっと現在が変わっていたはずなのに。異種族は『ヒト』ではないと言う。道具か、自分たちより下位の存在だと言う。彼らは新しい時代に取り残されている。

（トリビトは、その犠牲となった最たる種族）

なまじ外見が似ていたせいで、人族の憧れとして映ってしまったのだ。翼があれば、と。

人間は、だから愚かだ。

エドの失望と悲しみが伝わったのか、それともぐったりしているラッカを目の前にして思うところがあったのか、管理者は謝罪を口にした。

「すまない。言いかたに気をつけよう。ただ、トリビトたちは一度火がついたら止められない。もし外へ出たとき、危険が及ぶかもしれないことを忠告したかった」

「……気をつけます。それでもラッカまで攻撃するとは思えませんから」

そうして二人はヴォルフの危惧通り猛烈な反発にあい、白の街（オーバールウ）を追い返されたのだ。

「どうして？　ラッカは仲間じゃないのか！？　具合が悪いんだ、お願いだからラッカだけでも、だれか！」

なぜ、どうして、とエドが訴えてもトリビトは聞いてくれなかった。あの赤い目をたぎらせ、トリビトの持つ鉤爪や悲鳴、石やバリケードでもって拒絶する。近づくこともできない。支柱から出てきたものはすべて敵だと思っているのか。リンの存在がこれほど彼らを脅かしたのか。

「くるな！　そこから出てくるな！　消えろ、出て行け！」

「人間を入れるな。人間の仲間を入れるな！　踏み込ませるな！我々は二度とあんな悲劇を繰り返さない！　人間などに従わない！」

口々にそんなことを叫んでいた。もっと酷い何かを言っていただろうが、エドは覚えていない。彼らの目は狂気が渦巻いていた。こ

れが、楽しそうに空を舞っていた彼らなのか。列車の窓から見たあの穏やかさが、微塵もない。
「だれか、ラッカを助けて！　だれか」
エドの叫びが空しく、白の街にこだました。立ち上がれないラッカをかばったエドの額に、なにかが当たる。衝撃に戦慄した。何故？　ラッカも一緒にいるのに。じわり、とエドの額から広がる赤い色と痛み。今もなお止むことのない罵声と集中する投擲。ラッカは白の種でトリビトだ。どうして彼らは、それがわからない。
（ラッカは仲間じゃないのか？）
同じ問いかけが、今度は猜疑心とともにエドを打った。敵意が全身に叩きつけられる。エドは異端視された少年へ覆いかぶさって、唇をかんだ。ラッカを守らなければ。なぜトリビトがラッカを拒絶するのかわからない。だが、こうなったのはエドの責任だ。
そこに今度は別の煌きが飛んでくる。身を盾にしたエドの足に灼熱が走った。
「……っ！」
悲鳴は、あげなかった。エドのズボンが赤く染まっていく。身体の芯が凍えた。鋭い刃は同じ仲間であるはずのラッカを狙っていたのだ。ラッカがどうなってもいいのか？　ぎゅ、とラッカをかばう腕に力をこめて、エドが大きく息を吸ったときだ。
「エド、もういいよ……」
静かな小さな声を、耳が拾った。か細いそれが聞こえたのは、きっとエトムントただ一人だけ。ハッとなって腕の中の少年を見下ろせば、彼は青白い顔のまま少しだけ微笑んだ。
「もういい、から……。ありがとな……」
その瞬間、エドの中のなにかが崩壊した。必死になってこらえてきた何かが、強い感情となって少年を動かす。エドの縦長の虹彩は細くなり、金色に光った。怒りで眩暈さえしそうだ。
「仲間が倒れてるんだぞ。お前ら、ほんとうにトリビトか。ラッカが何をしたって言うんだ！　説明しろ、なぜ僕らを攻撃する！？

僕らが何をしたんだよ！？」
　そんな叫びもトリビトの罵倒にかき消された。だが、頭に上った血は収まらない。リンが、僕とラッカが何をした。敵意を向けている相手が誰なのか、本当にわかっているのか。大人が寄ってたかってなじる相手が、どうして子ども（ぼくら）なんだ。この街は平和じゃなかったのか！
　だがそんな声は我を忘れたトリビトたちに届くはずもなく、じりじりと追い込まれていく。大きな翼を広げて威嚇してくる彼らが、エドの目には化け物のように映った。血走った目でつばを飛ばして二人を罵ってくる。ナイフやフォークなんかの調理器具から椅子や家具さえ、落とせるものは落ちてきた。ここに武器らしい武器が加われば、いったいどうなっただろう。
　ラッカをかばって立ちはだかったエドは、せめて屈しないと誓った。ここで折れたらリンの二の舞だ。しかも、ただ落とされるだけで済むとは思えない。吊し上げられ、八つ裂きにされるかも。
　そこへ我慢ならなくなったヴォルフの出現で、さらにトリビトたちはパニックを起こした。そのようすはリンのときと比べ物にならなかっただろう。その隙に二人は支柱へと引きずり戻されたのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

17

「ぼくが、降りてしまったから」
　顔面を蒼白にしたリンがポツリとつぶやいたのは、エドの独白が終わってからだった。なぜトリビトであるラッカがこんなところで眠っているのか、気が付いてしまったのだ。エドが慌ててリンの手をつかむ。
「ちがう。キミはトリビトに会いたかった、それだけだ。何も悪いことはしていない。ここのヒトビトが異常なんだ」
「だってエド、このヒトが戻れないのはぼくのせいだよ！　エドに、エドにケガまでさせて……っ。どうしたらいいの？　白の街へ行ってラッカを助けてって言えば何とかなるの？」
「今、キミが行っても無駄だよ！　煽るだけだってわからない？」
　エドがぴしゃりとリンを叱りつける。
「トリビトは百年も昔に取り残されているんだ。目の前でラッカがパニックを起こしたのを僕は見た。白の街で人々の狂ったようすだってこの目で見た。あれはもう異常だとしか言いようがないよ。キミも見たんだろう」
　子ども一人に蜘蛛の子を散らしたように消えたトリビト。その後、ざわりざわりと広がった波紋。膨れ上がった殺気と憎悪。何も知らない少年へ向けるには、あまりに過激な黒い感情。
「この街の歪みがキミにぶつけられるのは、おかしいんだ。人族だからなんて理由にならないね。どうしてあんな過激になれるの。だってキミはトリビトに会いたかった、手紙を出したかった、それだけだ。何の罪があるの。人族そのものの罪だって？　そんなの、キミたちは充分支払ったじゃないか！」
　トリビトたちなら暴走しても罪にならないのか、とエドがしっぽを逆立てた。
「こんなことは馬鹿げている。そうだろ？」

「だけど、だけどね、エド。じゃあこのヒトは、ラッカは、どうしたら助かるの？」
リンはあの妹（シエラ）を見たのだ。エイダ（いもうと）とよく似た女の子を。あの子がどんな思いでリンをなじったのか知って、ショックを隠せない。
「人間（ぼくら）がそんなことをしたなんて……知らなかったから」
弱々しい小さな声でつぶやいて、リンが背中を丸めて立っている。
（こうなると、わかっていたから）
やさしいリンが、傷つくとわかっていたから。きちんと説明しなかったことをエドは悔やんだ。是が非でも、嫌われても止めるべきだったのだ。気軽に行動した結果として突きつけるには、あまりに、重い。いずれ知らなければならなかったことだとしても。
（でも、今じゃなくてよかったはずなのに）
子どもたちの言い合いに水を差したのは、沈黙していたヴォルフだった。
「……最下層なら」
ためらう口調は躊躇い交じりに発せられた。彼はリンとよく似た青い瞳を、子どもたちへ向ける。
「ラッカは、なんとかなるかもしれない。この街には最盛期の技術が眠っているからね」
「じゃあ、ぼくらもそこへ」
リンが目を輝かせた。
「二人の立ち入りは認めない」
「何か、見られちゃまずいものでも？」
「後悔したくないなら、見ないほうがいいと言っているんだよ」
ちらりと意識を失っているラッカを管理者が見た。当然、ラッカにも見せるつもりはないのだろう。知って欲しくない、と彼は言っているのだ。エドがリンに対して行ったような警告と同じ意味で。
最下層には、人族がトリビトに対して行った倫理にもとる何かがあるのか。自分の中のなにかを崩壊させるものなのか。想像したく

もなかった。その不安が伝染したのか、怯えた眼差しのリンが、ヴォルフにかみつくエドの腕をぎゅっとつかむ。少年たちの怯えに気づいたヴォルフが、ごめんね、と苦笑した。
「本当はね、その子を助けられないままでもあそこへの道は閉ざしたいんだ。トリビト一人の価値より、あの場所のほうがずっと重要だから。でも、管理者として助けられるトリビトは助けたいと思う。これ以上黒種を増やしたくはないんだ」
黒種(かれら)は、悲しいから。
そう言ったヴォルフの表情は、どこか切ない。
「隣に部屋を用意したから、二人で使って欲しい。お腹もすいてないかな」
リンがきょとんとする。エドが懐中時計をぱくんと開いた。
「もう十九時を過ぎてたんだ」
そういえば、ずっとしゃべっていたせいで、のどがカラカラだった。まだ外はほんのりと明るいけども。
「そうだよ。標準時刻ならば夜だ。トリビトたちも活動を停止し始めている」
「ラッカのことは？　僕らに手伝えることがあるなら言ってください」
「二人の手を借りなくても大丈夫。ほら、クタクタじゃないのかな」
指摘されるまでもなかった。十九時であると自覚したとたん、腹が減った。エドは昼から何も口にしていない。頭や手足の痛みも戻ってくる。特に切り裂かれた足が、痛い。そうだ、怪我をしていたのだ。応急処置を済ませていたが、まだ手当てを完了したとは言い切れない。ずきん、ずきん、ずきん、と興奮によって遠のいていた痛みが蘇ってくる。
「明日になればしてもらうことも増えるだろう。だから今はちゃんと休息をとるんだ。いいね？　二人の着替えも用意しておく」
しぶしぶエドが了承する。リンが隣でほっと息をついた。なんだよ、僕が反発するとでも思ったの。ちょっとしたことに、苛立つ自

分が嫌だ。
にこりと微笑んで出て行こうとしたヴォルフに、エドはやりきれない視線を突き刺した。
「僕らは、秘密を探りたいわけじゃない。過去に振り回されたくないだけなんだ」
「それでも、過去は追いかけてくるよ。無関係ではいられない。……だれも」
閉ざされた扉に、管理者の姿が消える。くそ、と吐き捨てたエドは、振り返って保護カプセルを覗くと、思いをこらえるように拳をふるわせた。リンがここに来ただけで掘り起こされた過去がある。この先も、同じ事態の起こる可能性が十分予測できた。所在無くたたずむリンの存在が、過去を蘇らせるのだ。
それもエドの癇に障る。リンが小さくなる必要などないのに。こんなつもりなど、なかったのに。
「隣の部屋へ行こう。あのヒトが言ったように、僕らは休まなきゃ」
親指をエドは噛んだ。自分の無力さが腹立たしかった。

一人になったヴォルフが呟いたのは、二人のいる部屋からずいぶん離れてからだった。
「夜が明けると、彼らの怒りがおさまってくれればいいが……」
ヴォルフが見据えるのは、天井都市だ。茜色の日差しは血の色を連想させる。じきに本格的な夜が訪れるのだ。抗うように無数の白種たちが飛び交っていた。いつもの穏やかな雰囲気はなく、荒々しい感情が渦巻いている。耳を澄ませば、あの鳴き声が聞こえてきそうだ。ぴぃぃぃぃ、ともきぃぃぃぃとも聞こえる、あの声が。
「止められるだろうか。あの時と、同じように」
こんなことなら、外見だけでも他種族のものであったらよかった。

自分はオリジナルのコピーでしかない。中身（記憶）さえ継承できたなら、容れモノなどどうでも良いのではないか――。ヴォルフはそこまで考えて苦々しくため息をこぼす。無意味なのだとわかっていた。人間は星の数ほどいる。これはトリビトが克服しなければならない問題だ。

それに、姿かたちを変えることは、逃げることと同じだった。罰を背負うなら、このままの姿でなければ意味がない。ヴォルフガングという人間でなければならないのだ。

「……こうなることを見越して、あの子を呼んだのだかな」

小さな人族の少年。きっとあの子が鍵として選ばれたのだろう。不思議とヴォルフには察しがついた。面影が記憶と重なったのだ。ならば今の事件も、偶然ではないのかもしれない。こうなる可能性を見越していたように感じる。

（僕に動けと）

（彼女を目覚めさせろ、と？）

きっかけは、ささいなことなのだ。小さなひずみ一つで、たわめられたストレスは爆発する。トリビトは『温厚になるよう』作られた種だ。だけどああなってしまったら、同族でさえ見殺しにする。人間が、あそこまで彼らを追い詰めた。そんな風に彼らを『作り変えた』。

ネコ族の少年は正しい。人間は傲慢で、愚かで、どうしようもない。

だがそれは、人間だけに限った話ではない――

ヴォルフは背後に立った黒いトリビトに気づき、息を呑んだ。立ち止まると彼女はやってくる。長い黒髪が艶やかにゆれた。マーサだ。

「こんなところまで付いてきてしまったのか。ダメだよ、すぐに戻らなければ」

黒種たちに、ここの空気は毒だ。キレイ過ぎるのだ。彼女を促すヴォルフだったが、細い指先が伸びてきて動けなくなった。頬に暖

かな感触がする。マーサが微笑んだまま少し首を傾けた。
どうかしたの。
音声にならない問いかけが、聞こえてくるようだ。
どうかしたの。
ヴォルフの僅かな動揺を読み取って、問いかけてくれる。心配というと、違うかもしれない。彼らに深い意味はないのかもしれない。管理者の心の揺らぎに関心があるだけなのかも。
「なんでもないよ、マーサ。なんでも……」
本当の弟に出会っても彼女はもうわからない。繋がりは感じても、肉親だと理解できないのかもしれない。リンをいち早く見つけてヴォルフに知らせてくれたのは、無意識に弟の面影を探していたのだろうか。
細い指を自分からはがし、ヴォルフは彼女の思いを拒むように視線をそらした。やさしくて悲しい黒種たちと管理者は、決して同じものにはなれない。
「きみも、上へ戻りたいだろうね……。黒種にしてしまって、守ってあげられなくて、ごめんね……」

「ラッカの妹と会えないかな」
エドがそんなことを言い出したのは、シャワーを浴びて着替えてからだった。管理者は子供服を探し出してくれたようで、白いシャツとズボンを身に着けていた。白種たちとお揃いである。
エドがリンと同じシンプルな格好をしているのは、不思議だった。リンの知る限り、エドはパジャマだってフリルのついた服なのだ。そうしていると、ぼくとあまり違わないんだ、なんてリンは改めて思った。
二人とも、同じ子どもだ。無力な子ども。

リンとエドは、シンプルなベッドの上にいた。刺繍の入ったひらひらしたシーツでもなく、羽毛の布団でもないベッドだ。シングルで、二つ並んであった。エドは不満そうにため息をこぼしたものだ。

管理者の用意してくれた部屋は広く、少し離れたところに食事のできるテーブルと椅子もある。だが、窓は縦長はめ殺しのものが四つ並んでいるだけだった。リンの手のひらほどの大きさしかない。もしかしたら、トリビトたちを警戒しているのかもしれなかった。

食事も終えて（エドは予想通り大量に食べた。ずいぶんお腹がすいていたらしい）、さあ寝るぞ、という頃合だった。

「妹って……あの子？」

「そう、キミを黒の街へ落とした子」

エドは身づくろいをしている。ネコ族の習性なのか、尻尾の毛を念入りにブラッシングしているのだ。耳や髪の手入れも怠らない。それゆえか、リンが濡れたままの髪で横になるとぷんぷん怒った。

「傷むでしょ、ちゃんと乾かして梳かしなよ」と叱られる。その影響か、鳥の巣状態だったリンの頭は、日ごとまともになっていく。

「あの子を説得できたらなって。きっと悪い子じゃないと思う。キミを傷つけて泣いてしまうような子なんだ。ラッカが薬で眠らせているから……今も眠ってるかもしれないけど。あの子を説得できれば、他のトリビトたちも話を聞いてくれると思うんだ」

「でも、白の街に出たらトリビトがいるよ。エドが出て行っても、きっと……」

「だから何とかして話ができないかなって。あのね、僕はここに下りてくる前に、本国へ連絡取っちゃったんだ。ラッカに無理言って通信機貸してもらって」

エドの持つ『カードブック』は、星をまたいで通信できない。普段は列車の回線を利用していたのだ。あっけらかんと、エドはそんな告白をする。

「近日中に迎えの船が着く手はずになってる。だから、その前に騒ぎをおさめる必要があるわけ」

リンがどうして、と尋ねる前にエドは回答を続けた。
「列車のあるなしに関わらず、僕らは白の街に上がらないとここから出られない。――そうでしょう？　いつまでもこの街にいられない。……ラッカのことは気にかかるけど、行かなきゃならないから」
緑に金の混じった目が、輝きを増した。少し前まで沈んでいたエドが嘘のようである。リンは手回しのよさに言葉なかった。エドは、子どもであることを言訳に使わない。大人が解決してくれるのを待てばいいのに、待ってられない、と動こうとする。自分で考えて、自分の足で、エドは歩こうとする。他人の導きなど必要がないとでも言うように。
そんな風に考えられるエドが、まぶしかった。一人だと認識したとたん、ひざを抱えるしかできなかったリンとは大違いだ。身がすくんで、動けなかった。アニエスと連絡を取ることさえ躊躇って、蹲った。ヴォルフの庇護に安堵して、助けられるままだったリンとは。
工芸の街（ヴィーグエング）でもそうだった。エドは、立ちつくしたリンの背中を押してくれた。エドを見ていたら元気が出てきた。

18

（ぼくとエドの違いってなんだろう。どうして、エドは迷いなく進めるんだろう）

その強さは、どこから出てくるの。

「キミは、鞄を探しに行かなきゃいけないしね」

ああ、そうだ。リンは失くしたリュックを見つけなければならない。待ってて、とヴォルフに言われ、その通りにしていた。大丈夫だよ、という言葉の優しさに身を委ねていた。自分から動くことを、すでに止めていた。――それじゃいけない。リンのリュックだ。リンが探さなければ。

「じゃ、寝るよ。ライトを落とすけど……。どうかしたの？　具合でも悪い？」

ぼんやりエドを見つめていたリンは、ふるふると首を振った。さえない顔のまま「なんでもないよ。ちょっと眠いだけ」と笑ってみせる。エドがリンの額に手のひらを当てる。

「熱はない、かな？　ねぇ、頭のこぶとか大丈夫？　調子悪いなら、隠さず教えてくれなきゃダメだからね」

うん、とリンはうなずいた。エドが笑みを返し、ライトを絞る。横になったリンは、天井をうつろに仰いだ。

そう、なんでもない。

エドをうらやましいと思うのはおかしい。

エドに背を向けて、リンは瞼を下ろした。エドは寝つきがいい。もう寝息が聞こえてくる。リンも、瞼を閉じてじっとしていれば、じきに眠ることができるはずだ。

不思議だ。お昼から寝てばかりだった。もう寝られないと思っていたのに、夜の十時を過ぎると身体は「くたくただよ」と訴えてくる。そして眠りの沼へ落ちていくのだ。深く、深く……

夜が、街を覆う。静寂が支配する。
するとなぜか、世界にリン一人だけになってしまったような気持ちになった。
真っ暗なこの世界で、ただ一人、自分だけが異質なもののような、弾かれているような、不安が襲ってくるのだ。

ぼくは、この旅に、何を望んでいたのだろう。
平和を崩すつもりなんか、なかったのに。

見たことのない異質な世界。
リンのいるべき場所とあまりにかけ離れた箱庭。
ただ、終わりを目指すだけじゃ、いけないのだろうか。

＊　＊　＊　＊

19

目覚めは刺激的なものとなった。
太陽が昇り始めた早朝のことだ。最初は音がしたと思った。ずず……ぅん、とでも言うような重たい音が。そして支柱が、揺れた。リンはがばりと飛び起きた。ベッドについた両手が、全身が、振動を伝えてくる。
「なに？　……地震？」
エドが眠気をふんだんに含んだ欠伸をした。半身を起こしても、頭がゆらゆらと揺れている。普段ならまだ眠っている時間なので、この反応は当然だ。
「わかんない。地震っぽいけど」
エドとは反対に目が冴えてしまったリンは、天井や足元を見つめた。地鳴りのような腹に響く低音はもう消えたが、不吉な予感がしたのだ。今も微細な振動が残っている。
「ここって高所だから、余計に大きく感じたのかも。もうおさまったみたいだね」
懐中時計で時間を確認すると六時を過ぎたところだった。早朝に起きるのが苦ではないリンの目はパッチリ覚めてしまったが、くああ、と伸びをして再びエドは寝入ってしまう。
「エド、朝だよ。起きなきゃ」
「まだ寝れるでしょ。七時半には支度するから、寝かせて」
もう、とリンが唇を尖らせて、縦長の窓から外をうかがったときだ。音声がどこからともなく響いた。
『リンくん、エドくん、起きているかな』
管理者の声だ。はい、とリンは返事して、きょろりと室内を見渡した。ぴくぴくと耳を動かしたエドが、上、上、と天井を指差す。だが、そこにあるのはのっぺりとした天井だけだ。何か機器が埋め込まれているのだろうか。エドが煩そうに上半身を起こした。

「何の用ですか、こんな早朝から。六時になったばかりなのに」
『すまない。だが、すぐそちらへ迎えに行く。準備しておいてくれるかな』
エドが胡乱な目つきになった。睡眠を邪魔されて、険しさがいつもの三割増しになっている。
「さっきの地震と、関係が？」
『言いにくいが、トリビトが、支柱への出入り口を攻撃しているんだよ』
は、と二人の目が点になった。言いにくい、と言いながら、管理者はとんでもない事実をさらりと告白するものだ。
「え、え？　攻撃って、攻撃って」
耳をすませるとガァン、ガァンと、甲高い音が聞こえ、リンが息を詰めた。まさか、本当に？　エドが慌てて細い窓にはりつく。ガラスに頬を押し付けて無理やり上部を仰ぎ――「げ」とうめいた。
「白いトリビトが何人かで体当たりしてる。手に何か持って……槍……じゃないと思うけど、あれでどうにかできると、本気で考えてるのかな」
リンも同じようにしたが、よくわからない。目を凝らしても、ネコ族のエドと同じ世界は見えないのだ。だが、雲の切れ間から何かが動いていることはわかった。あれがトリビトだろうか。
『そこは天井都市に近い。念のため、下の階へ避難してもらおうと思っている』

すぐに、ヴォルフはやってきた。急な連絡をよこした彼だったが、いたって冷静に「それじゃあ行こう」と少年二人を促した。まるで、台風が近づいてきたからお家へ帰りましょう、とでも言うような対応だ。事態を深刻に捉えて待っていたリンとエドは拍子抜けした。

「白種たちは武器を持ってないからね。この支柱はそう簡単に陥落はしないよ」
それなら移動しなくても良いのではないか。リンがしどろもどろ尋ねると、管理者は苦笑した。念のためだよ、とだけ彼は教えてくれる。
「避難するのは、僕らが直接狙われるかもしれないって意味だよ。あのトリビトたちに見つかったら、何されるかわからないってこと」
淡々と喋るエドを見下ろして、ヴォルフが苦笑した。肯定の意だ。
僕らとエドは言ったが、窓を破壊して直に白種たちが現れた場合、真っ先に狙われるのは人族のリンに違いない。今度は、何をされただろう？　人間がいたぞ、と吊し上げられるだけじゃ、黒の街へ落とされるだけじゃ、きっと済まない。ぞくりとした悪寒が、背筋に走った。
リンの冷たくなった手に、何かが触れた。エドだ。冷静であれと、繋ぎとめてくれている。――落ち着いて。諦めないで。そう言われた気がした。そうだ。それを防ぐために、二人はさらなる下層へ身を隠すのだ。だいじょうぶ、ぼくは一人じゃない。
「あの、ラッカは？」
「昨晩から処置を施している。この街の地下で」
「助かりますか」
「彼と、状況次第だ。だが、打てる手は打つよ」
再び足元が揺れた。今度は先ほどより揺れが大きい。悲鳴をあげたリンの身体が傾いだ。エドがつかんだ手を引き寄せて、壁際による。少年たちは二人で支えあって、揺れが収まるのを待った。揺れに動じなかった管理者は、しっかりと立って虚空を睨み、何かを呟いている。小さな声なので、しっかりとは聞き取れない。
「……想より揺れが大きい。……ったな、天井都市（オーバールウ）は……なのか……。彼らは……状況をどう……だろう……」
彼の渋面は、良い状況ではないことを知らせるには十分だった。
「これが続くと、あなたは考えているんですね」

エドが尋ねた。ヴォルフは苦笑で応じる。男は、少年たちを連れて支柱を歩き出した。三人の靴音が大きく反響するのが不気味で、リンはエドの背中を追いかけた。エドはリンの手をしっかり握り締めて、街の管理者を睨んでいる。

「彼らの気が済めば収まるだろう。そう長い時間はかからないはずだ。ただ、被害がね」

「被害？」

「支柱の上部が破壊されるのは構わないんだ。僕らはいざとなったら、下部へ逃げ込めばいい。だが、星間ステーションが彼らにどう映るかわからなくてね……。白の街全体のようすが気にかかるんだ。この街自体が、かなり古いものだから」

な、と少年二人が絶句した。

「待ってください。あなたは、街が破壊される可能性もあると踏んでるの？　そんな……自分たちの街でしょう？」

「だが現実に、街に設置したカメラは次々に破壊されてる。可能性を否定はできない。確認するにも、表立って私が動くわけにもいかないからね」

ヴォルフが再び彼らの目に触れたら、暴動は激化する気がした。

「これを鎮める手段は？」

「私は彼らを見守ることしかできない。そのための管理者なんだ」

「役に立ってないじゃないですか！」

まったくだ、とヴォルフが困った笑みを浮かべた。それを一番歯がゆく思っているのは、トリビトを守りたいと言っていたヴォルフ自身なのだと、リンにはわかった。ネコ族の少年が、ばつの悪いようすで顔をそらす。悪気はないが、思ったことがぽろりと出てしまったのだろう。エドが必死なのは、自分たちが出て行くためだけではない。巻き込んでしまったラッカの治療のためでもある。もし、この揺れが原因で機器に支障が出たら、ラッカはどうなるのだろう。

「外部へ応援を頼んじゃえば、すぐにこんな暴動なんて……」

「それは最終手段だよ。他種族を嫌う彼らを、力でねじ伏せるやり

方はしたくない」
だけど、とエドは言い募り、口を閉ざした。ヴォルフがすべて承知の上で話してくれていると悟ったからだ。リンとエドの意見を求めているわけではないのだ。ぺたんこになったエドの耳と、ぶらんとさがった尻尾がさみしい。
「あの、エド。昨日言っていた……あの子に聞いてみるのは？」
リンがおずおずと話を振った。エドは最初、「あの子」が誰をさすかわからなかったようだが――すぐに瞳を輝かせる。
「そうだ、シエラ！」
うん、とリンがうなずく。
「でも、シエラがどうなっているのかわからない。薬で眠っているって言っていたけど、連絡が取れるかどうか。あの――ヴォルフさん！」
昨晩話していた内容を伝えると、ヴォルフはわずかに沈黙した。何もない空間を見つめ「ああ、あの子だね。部屋にいる……」とやがて言った。ヴォルフはラッカの妹がどうなっているか、探ってくれていたのだ。リンとエドは喜色を浮かべた。とにかく、シエラは無事だ。暴走にも加担していない。
「話がしたいんです、彼女と。もしかしたら彼らを止めてくれるかもしれない」
「それは、そうだうけど……賛同はしかねないよ」
「なぜですか」
「危険だから」
ばっさりと、ヴォルフはエドの案を切り捨てた。
「よく考えて。ラッカまでも彼らは攻撃したんだ。シエラが話を聞いてくれるかどうか、わからない。それに今度は、あの子まで狙われてしまう可能性が出てくる」
「……だけど……それぐらいしか、僕にできることはありません。説得じゃなくても、あの子にラッカがどうなっているか伝えたいんです。行方を気にしていると思う。拒絶されても構わない。それが

ラッカを巻き込んだ僕の役目だから！」
　ぎゅっとエドが、リンをつかむ手に力を込める。リンは応じるように握り返し、エドと並んでヴォルフを仰ぐ。すると厳しい目で少年たちを見下ろしていた管理者が、ふと表情を和らげた。
「白の街へ行かないと、約束できるかな。危険なことはしない、僕の指示に従うと」
「できます。話がしたいだけだから」
「……いいだろう。通信（デンワ）装置のところまで案内するよ。だが僕は、ラッカの具合も診なければならない。機器は精密だからね」
　はい、とエドが大きくうなずいた。
「リン君はどうするのかな」
「え？　あの、ぼくは――」
「荷物を探しに行くんです。そうでしょ？」
　エドといっしょに行きたい。そう主張することはできなかった。そうだ。荷物を探すのはリンの役目だ。だけど今、離れ離れになるのは嫌だった。この繋いだ手を放すのは。
「ほら、しっかりしなよ。これ、使ったらきっとすぐに見つかるよ」
　意気が消沈したリンを慰めるように、エドがリンの腕に何かをはめた。一見すると幅広のブレスレッドのようだ。予想外のアイテムにえ、とリンは驚きを隠せなかった。リンの細い腕に合わせて、輪はきゅっと締まる。腕からするりと落ちることもないようだ。何をくれたの、とドキドキして喜ぶリンに、エドはにこりと微笑んだ。
「これは受信機だよ。キミの荷物には発信機がついているからね」
　和やかだった空気に亀裂が走った。は、とリンが硬直する。エドがそのブレスレッドに触れた。半透明のディスプレイが現れる。
「ほら、このマークがキミだよ。今は発信機がわからないけど、見つかったら同じように表示されるから。操作は簡単でしょ？」
「ああうん、これならぼくにも――じゃなくて、エド！　発信機ってなに？　そんなのいつの間に！」
「僕じゃなくて、アベルさんだよ。工芸の街であの人が最初に出会

ったの、キミじゃない。そのときらしいよ」
あ、とリンは思い出した。アベルに抱きしめられたのだ。そういえば、あの人はブレスレッドをしていなかったか。
「その後離ればなれになったキミを探すのに、使っていたんだ。もっとも、あの人が追いかけてたのはエルザのほうだったけど」
「聞いてないよ！　どうして教えてくれなかったの」
そんな大事なことなら、教えて欲しかった。リンの非難を、「忘れていたんだ」とエドが肩をすくめて受け流す。
「ごめん、バタバタしてたから。だけど、これを持って探索すればきっと見つかると思う。旅をするなら、鞄は必要なものでしょ。列車のチケットだけじゃなくて、大切なものもいっぱいあるんだから」
リンは神妙な面持ちで受信機を見つめる。そうだ。あのリュックには着替えやお金のほかにも、手放したくないものが詰まっているのだ。リンと家族を繋ぐものたちが。
「そうだね、鞄を探すなら早いほうがいい。マーサと合流しよう。黒の街へ行くなら、彼女が案内してくれる」
リンの表情が強張った。昨日の、空っぽな笑顔が脳裏を過ぎったからだ。
三人はエレベーターでいくつかの階を降りた。マーサと合流した後、エド・ヴォルフペアと分かれる手はずだ。お昼まで別行動する話にまとまった。リンは自分の緊張を悟った。不安が晴れないのだ。エドとまた離れ離れになるのも怖い。
「大丈夫。黒種たちは何もしない。とくにマーサは優しい子なんだ。リン君のことを、ずっと気にかけていたよ」
ヴォルフに励まされているうちに、エレベーターが止まった。ゆっくりと、扉が開いていく。そこに、黒種の少女が三人を待っていた。
「早かったね、マーサ」
ヴォルフが声をかけても、彼女はぴくりとも反応しなかった。凍りついた笑顔を浮かべるだけだ。かつてこの笑みは、白い翼を持つ

少年に向けられていた。ぬくもりを持って。やさしさを持って。
そう考えていると、少し胸が痛かった。黒種たちは、もともと白の街に暮らしていた白種なのだ。彼らにも家族がいて、兄弟がいた。今はしゃべることもなく、家族の記憶もない。「何かをなくした」ということだけは、わかっているヒトたち。
リンはぎゅうっとまぶたを下ろす。だいじょうぶ、ぼくはまだ覚えている。失くしてなんかない。アニエス、ローラおばあちゃん、テッサ、ニコラ、そしてエイダ。時々、顔を思い出せなくなることに気づいていた。頭の中いっぱいにいたみんなが、記憶の端から零れ落ちていくのだ。
だけどだいじょうぶ、ぼくは、まだ。

20

「リンくん、夢に囚われちゃいけないよ。きみを待ってる人がいるんだろう？」
リンはハッとなった。これも、黒種たちの能力なのだろうか。この思いが浮かぶのも、家族が無性に恋しくなるのも？
「エドくんも同じだよ。二人とも、忘れないで。いいね」
エドはグリーンの瞳を人族の男へ向ける。そう言われたことが意外だったかのように、少し口を開けて。
「それから、これを。通行書みたいなものだから、はめていてくれるかな」
ヴォルフからそれぞれ手渡されたのは、シンプルなシルバーの指輪だった。リンは人差し指に、エドは中指に指輪をはめ込む。急にお洒落をしたみたいで、変な気持ちだ。
「それじゃあ、行こうか」
エドがあごを引いた。足先はすでに通路へと向かっている。二人の姿が、リンからどんどん離れていく。
エド、と思わずリンは声をかけていた。友人が振り返る。
「あ、その……気をつけて」
離れるのは不安だ――と口にできなかった。気をつけて、気をつけて。ケガなんてしないで。あのトリビトたちに捕まらないで。色んな思いを込めて。
ネコ族の少年はリンの躊躇いを察したのだろう。胸をそらして少し傾けた顔に、にやりと笑みを乗せた。だれにものを言ってるの？
なんて台詞まで聞こえてきそうな、ふてぶてしい態度だ。
「言ったでしょ、危なくなりそうなら、すぐ逃げるから。そっちこそ気をつけなよ。受信機の使いかた、わかってるよね」
リンがうん、と頷くと、彼もまた満足そうに頷き返した。「またあとでね」、とエドはあっさり通路の奥に消えてしまった。そうだ。

昼には合流する。列車を飛び出したあのときとは、工芸の街ではぐれたときとは、違う。
エレベーターで一気に地上まで下りて改めて見渡した街は、空気が肌に張り付くように重かった。光が遮られて薄暗いだけじゃなく、黒いもやが辺り一面をおおっていて不気味だ。うつろな目のヒトたちがふらふらと通り過ぎていく。生気がなく、自分の居場所を探してさまよう姿は、お化けのよう。
不意にぎゅっと手のひらを握り返されて、リンはマーサを見上げた。彼女は相変わらず静かな微笑のままだ。――どうしたの。そう問いかけてくれている。リンがぎこちなく笑みを作ると、彼女はゆっくりと歩き出した。その背にある黒い翼は、上空をに張られた幾重もの網にさえぎられて、きっと空を飛べない。きれいで大きな黒翼なのに、ずっと折りたたまれたままだ。
（エイダ）
不意に妹を思い出していた。黒種は空を飛べないヒトばかりだが、黒の街にあの子が混ざるのは嫌だった。しかし白の街なら平気かというと、そうじゃない。トリビトが優雅に舞う姿を目にしたとき、暗い感情がふわと浮かび上がった。リンでさえあだったのだ。エイダは、どう感じるだろう。
（言えない）
エイダには、この街のことを、言えない。言いたくない。手紙にトリビトへ会うことを、触れなければ良かった。良いことを報告できないなら、伝えないほうがマシだ。まして、リンがこんな目にあったと知ったら傷つくだろう。悲しむだろう。
どれぐらい歩いたのか……入り組んだ街を迷わず進むマーサの足が止まった。視線を上げたリンは、呆気にとられた。建物の間に、忽然と巨大な瓦礫の山が出現していたのだ。街の残骸と、よくわからない機材・廃材が積まれてあった。それも一つだけじゃなく、五つほどもある。これを片付けるには途方もない時間がかかるはずだ。え、とマーサを仰ぐと、彼女はリンの手を離してふらふらとその山

へ向かって行く。
（ここに、ぼくは落ちてきた？）
目覚めたとき、すでに建物の中にリンはいたため覚えていない。
呆然としていると、何かが上空から落ちてきた。大きな物体は、網に引っかかりながらこの場所へ寄せられて、がちゃん、がたん、と山の上を転がった。目が覚めたとき、何故かラスの街にいるのだと勘違いしたのは、この音のせいでもあった。がちゃん、がたん、という音を聞いてリンは育ってきたのだ。
山の中には、黒い翼のトリビトが何人もいた。彼らは黙々とこの瓦礫の撤去作業を行っている。黒種たちの服が薄汚れているのは、作業着だったからなのか。そんな作業も、ラスの街を思い出させた。ただ、ラスの工場はいつだって賑やかだった。それは怒鳴り声や笑い声だったり、誰かの聞いていた音楽や歌ううただったり、機械の駆動音だったり、呼び出しの放送だったり……絶え間ない生活の音がしていた。明るくて活気があった。
だが、黒種たちには会話の必要がない。そのせいか、余計に淡々とした印象を与えた。作業に使われている機械も当然ながら見たことがないものだ。同じ工場でも、ふるさととはまったく違う。
ぼんやりしていると、どこかへ消えたマーサがやってきて、リンの手を引く。ぴぴぴ、と受信機がアラーム音を発した。リンの荷物はこの辺りにあるのか。確認すると、そう遠くない。きょろきょろしながら進めば、ヒト集りを発見した。ガラクタの山頂付近で、黒種たちが落ち着きなくうろうろしているのだ。しかも、四方からトリビトがどんどん顔を覗かせる。その数は見る間に増えていく。
リンはぎゅ、とマーサの手を握り締めた。やっぱり、トリビトは怖い。集まっていると嫌な感じがする。だが、発信機はその方向を指している――
「あっ」
リンはヒトビトに向かって一心不乱に駆けた。一瞬だけ見えた、あれは……。

崩れそうな足元もものともせず、リンは一直線に走った。手や服が汚れるのも構わず、獣のように四肢を使って急な瓦礫をよじ登る。見つけた。あんなところにあった。
「ぼくのリュック！」
足場を選ぶ余裕もなかった。何度も蹴躓いて山を崩した。ゆらゆらと立つ黒種たちの脇をすり抜け、ひたすら荷物だけを目指す。引っかかっていたリュックは、ボロボロだった。何かの下敷きになったのか黒ずんで、破れていた。だれかが無理に引っ張ったのか。もしくは落ちたリン自身が、ぺしゃんこに潰したのかもしれない。
中身が零れ落ちないよう、リュックを慎重にリンは持ち上げて息を吐く。思いのほかあっさりと戻ってきた。ぎゅう、と力いっぱい抱きしめていたら、泣きたくなった。よかった。よかった、見つかった。だいじな、かばん。
不意に視界が影ってリンは顔を上げ――ぎくりと顔色を変えた。大勢の黒種たちに、少年は囲まれていたのだ。

かつん、かつん、と二人分の足音が長い通路に響く。リンと別れてから、エドは隣を歩く管理者をずっと意識していた。まだ信じきっていないのだ、このヒトを。人族というのもあるだろうが、それだけじゃない違和をエドはずっと感じていた。
「あなたは、まだ僕らに何かを隠していませんか」
傍らのヴォルフを見ずに尋ねたエドと同様、彼も前方を向いたまま、
「二人に知っていて欲しいこと、二人が知りたいことはもう話したよ」
「でも……スッキリとしなくて。何かが引っかかっているんです」
「そういうことはよくあるね。しかし今はこんな状況だし、きみた

ちは優先しなければならないことがある。それが終わってからゆっくり考えるのはどうかな」
普段なら切り替えられる頭が、霞がかったままハッキリとしない。頭にもやを抱えたままでいるのは、気持ちが悪かった。この長い廊下は一本しかないのに、迷宮へ踏み込んだような不安を煽る。
「……あいつは」
ぽつ、とこぼしたエドはふと思い出した。
「あいつには、トリビトの妹がいるんです」
「リンくんに？　いや、でも、さすがに人間からトリビトの妹はできないよ」
「ええ、知っています。血の繋がらない妹なんだと言っていました。あいつは、戦争孤児らしくて……アニエスというヒトが子どもたちを引き取って育ててるみたいで。きっとその妹もそうして引き取られたんだと思います」
ああ。
エドは自分の言いたいことがなにか、わかったような気がした。
「あいつの妹は、翼が片方しかないんです。それも小さな翼だと、言っていました」
環境の破壊された、お世辞にも空気のきれいだと言い難い星で、生きているトリビト。天井都市を見て喜んでいたようすからして、妹は白種なのだ。年頃が同じぐらいのラッカの妹は、エドよりも年上かもしれないと言っていたのを思い出す。あのシエラ、と呼ばれた女の子は、ヒトのやってきたことを知っている。今もなお怯えている。
それなら、リンの妹は？
「そういうトリビトも、多いのですか」
「いいや。ここには――白種には、いないだろうね」
「トリビトは……いえ、白種はここから出て、生きていけるものなのですか」
俺たちは、鳥かごの鳥だ。

そう言ったラッカを思い出す。長身の管理者は、ずっとエトムントのほうを見ようとしない。やがて呟かれた「いいや」という重たい返事も、充分に予想がついた。そうだ。エドはリンの妹を、ここを降りる途中、突然変異なのだろうかと訝ったのだった。だけど、もしかしたら――

いやな可能性に気付いて、エドは足を止めていた。知らず、口を手でおおっている。

白種と黒種に分かれてしまったトリビトたち。脆弱な細い糸のような生命力。それと相反するリンの妹。そして、昨日は聞き流してしまった男の言葉。

人間は愚かでね、夢を見るんだよ。

私たちはトリビトを見て『天使』だと思ってしまったんだ。

「僕は、あなたがたがトリビトに対してなにを行ったか、知っているつもりでした。人族が彼らをこんな場所に閉じ込めて、出られない体にしたのだと。本来のトリビトは、こうじゃなかったんですね。白も黒もない、自由な種族だったはずなんだ。――だとしたら、その過程でアイツの妹は生まれたのですか？　そういう『半端』なトリビトは他にもいたんじゃありませんか」

ふたりの足元にはうごめく闇が眠っている。元研究者は言ったのだ。街の最下層に最盛期の技術が眠っている、と。生きているトリビトたちより重要だ、と。それはどういう意味で？　人族の持つテクノロジーの脅威を、エドは聞いている。圧倒的な技術力を。現在でこそ衰退してそれらの多くを失った彼らだが、当時は数多の同胞を支配していたのだ。

管理者とは、トリビトだけではなく、その技術と研究成果を守る番人なのだとしたら？

忌まわしい過去と知りつつ、消し去ることもできないものが、この地下にあるのだとしたら？

「トリビトの研究機関は、ここだけではないのですね？　あなたたちは、ここで何を……彼らをどうしようとしていたんだ」
　先を進んでいた研究者のコピーは、ゆっくりと振り返った。サファイアのような青い目が、氷の冷たさでエドを見下ろした。
「それを知って、きみはどうするんだい」
　感情の消えた管理者は、機械のようだった。彼はエドが危険人物であると判断したら、躊躇なくエドをどうにかしてしまいそうだ。この人族は、街とトリビトを守るために存在している。まして、この支柱は彼のテリトリーだ。指先一つ動かさずエドを除去してしまうことは、可能なのだ。
　それだけのセキュリティがあったことを、エドはハッキングして知っている。この壁が、今にも少年を覆いつくしても不思議ではない。薄い氷の上を、歩いている。エドはこくん、とつばを呑み込んだ。回答を間違ってはいけない。知りすぎては、寿命を縮める羽目になる。その権限を、目の前の人族は女王さまより賜っているはずだ。そう、彼は昨日何気なく警告していたのだから。
　後悔したくないなら、見ないほうがいいと――
「別に、どうもしませんよ。何もできません。女王さまが判断なされたことだから」
　エドは金の瞳をきらめかせた。ともすれば、震えそうになる身体を叱咤する。呑まれるな、怖気づくな。壁についた手を離し、止まった足を動かしていく。
「僕らは、過去を掘り起こすために来たんじゃない。あいつにもこんなこと話したくないし、知って欲しくない。その気持ちは、同じだと思っています」
　管理者の突き刺さるような視線を、背中で少年は意識した。
「でも一つだけ。あいつの義妹（いもうと）は、ここの技術があれば空を飛べますか？」
　答えを半ば予期していた問いに、返事は戻ってこなかった。その沈黙が、返答なのだ。

「僕らは、前に進むしかできないってことなんですね」
世界は変わろうとしている。それは、事実だ。人族もちらほらと中立の街（エンジャーグル）へやってくるようになった。同時にエドたち『こちら側』の存在も、ゆっくりと『向こう側』を受け入れ始めている。平和を望んでいる。
過去を忘れろとは、言わない。ここで起こった出来事は、なかったことにできない。だから、トリビトたちは平和に静かに暮らして欲しいと思う。人間の影におびえることなく、笑顔でいて欲しいと。
列車の窓から覗いた彼らの箱庭は、長閑だったから。
「あなたがトリビトのためだけにいるんじゃないってことは、わかりました。この足元に想像通りのものがあったとして、それを守る理由はわからないけど」

21

「賢い子だね。参ってしまうよ」
「……やめてください。本当に賢かったら、今頃列車の中にいます」
ふっと、全身に絡まっていたプレッシャーが解け、エドは息を吐き出した。知らず、呼吸を止めていたのだ。ぴりりとした緊張と、危険が去っていく。エドは、正解を言うことができたのか。
かつん、こつん、と足音が響き、ヴォルフが隣に並んだ。エドは前を見たまま、微笑する。ぬくもりのこもらない笑みだった。
「子ども扱いされるのは嫌いです。だけど僕は大人じゃないから、知らないことが多過ぎて利用される。上手い言葉も出てこないし、誰も守れない」
「しかし、知らないままでいる選択もできるんだね。きみを子どもだなんて思えないよ」
くす、とヴォルフが笑いをこぼした。
知らないよりは知って選択したい。自分の道を選びたい。だが、時に知らないことの方が正しいこともある。
「そう言いながら子ども扱いするくせに。やっぱり人族って嫌いです」
「人族は、私の目からしても哀れで愚かだった。でもそれは君たちも変わらないよ」
「それはどういう――」
嫌いな人族と一緒くたにされて問い返す前に、一つの扉が見えた。ヴォルフがその横に備え付けられたパネルに触れる。スライドした扉の先には見慣れた機械が置いてあった。見慣れた、といってもエドの知るそれとは、ずいぶん型が違っているが。壁一面には、真っ黒なモニターが並んでいた。
（旧型？）
そういえば、ここへ下りる前にラッカから借りた通信（デンワ）機も、予想

外に大きくて使い方がわからなかったものだ。あれと似ている。ぽん、と機器をヴォルフが触った。
「さあ、ここだ。でも音声のみだよ」
「案外不便なんですね。あなたは管理者なのに」
「会話のために設置されたものではないからね。私が下手に接触を試みたらどうなるか、知っているだろう？」
エドは肩をすくめた。
「たかが管理者が街を支配しないようプログラムされているんだ。ここを統べているのは女王さまお一人だけだから。――使い方はわかるかな」
たぶん、とエドが返事をすると、ヴォルフが機器を立ち上げた。起動スイッチもなにも押さず、なにも触れず、コンピュータが動き出す。そんな芸当ができるのは、ヴォルフがここの管理者だからだ。先ほどの緊張を思い返し、エドはゾッとする。
「それじゃあ僕は、ラッカのところへ戻るよ。まだ気にかかることがあるから」
はい、とエドはその背中を見送って、安堵の息を吐いた。冷たいな、と思った。エド自身が、この街が、この部屋が、ヴォルフが、トリビトが、冷たいな、と。あたたかいものも確かに存在するのに、そんなものは覆い隠されてしまっているようだ。リンのやさしさでさえ、かすんでしまう。
向き直った通信機に触れれば、映像がすぐさま現れて驚いた。それは、かわいらしい部屋だった。ぬいぐるみがあって、全体的に丸いデザインの、ピンクと白を基調とした部屋だ。前方には、ふわふわのベッドにうつぶせた眠り姫がいる。エドも一度入ったシエラの部屋だ。まさか、ダイレクトにここが映し出されると予想していなかった。ヴォルフが設定していったのだろうと想像はついたが。
（トリビトたちって、ここまで監視されてたんだ）
本人たちにそうと気づかれず、こんな私的なところまで。そういえば管理者は言っていたではないか。部屋にいる、と。その意味を

考えもしなかった自分に、エドは憤った。
（トリビトのデータ取得が目的でも、やりすぎじゃないのか）
しかもここは、女の子の部屋だ！
嫌な気分だった。だけど現実ではトリビトが暴走をしていて、エドはこのシステムを活用するわけだ。必要な処置なのか。しかしこれを使ってコンタクトを取れば、彼らに監視という事実を教える羽目になる。
（あのヒトは、自分に課されたものを破ろうとしている？）
気になったが、エドはこの事実を脇へやった。改めてモニターに映ったシエラが暴動に加わっていないとわかって、ホッとした。ラッカが与えた薬のお陰なのか。
お兄ちゃん……。
そう言って涙の筋を作っていた小さな少女。無事を祈るラッカ横顔が、頭をよぎる。
そのとき、何かが叩きつけられた激しい音がした。カメラが物騒な音を拾っている。がんがん、と何かをぶつけている音だ。そんな現状を知らず、こんこんと小さなトリビトは眠っていた。躊躇ってはいられない。
「シエラ、聞こえる？　シエラ」
ラッカは攻撃された。
同じトリビトなのに、リンを探すエドと一緒にいただけで。危険だからと言った管理者を思い出した。そうだ。トリビトだからといって安全ではない。よぎった不安を煽るように、騒音は近づいている。
「シエラ、シエラ！　聞こえる？　起きるんだ、目を覚まして、シエラ！」
臍をかみながら、エドは根気強く呼びかけた。声が大きくなりすぎないよう注意を払って。やがて、少女が小さく身をよじる。「だれ……？　お兄ちゃ……？」と目をこすった少女に、エドが安心したときだった。

轟音がした。今朝聞いたようなレベルではない、もっと大きな音だ。ぶれる映像だけでなく、実際にエドの耳にも届いたほどの巨大な音だった。

黒種たちは三メートルほど距離を開けてリンの周りに集まってきていた。かばんを囲んでいたときより、心なしか数が増えている。リンはリュックを抱きしめて一歩後退した。彼らは無言だった。赤い瞳は、白種たちと違って感情が出てこない。彼らはリンに危害を加えたりしない。ヴォルフにそう聞いていたのに、リンの身体は自然と逃げるためにきびすを返す。だが、後ろを振り返ってぎくりとした。そこにも黒種たちが現れていたのだ。

「ひ……っ」

白の街のできごとが脳裏をかすった。逃がすな！　と包囲されたあれを。焦って周囲を見渡せば、そこかしこにトリビトの姿があった。鉄くずの間から、リンにはわからない機器の陰から、黒い霧の中から、彼らはゆっくりと現れる。心臓が高鳴った。パニックと恐怖が再びリンを襲う。

だが、黒種たちは一定間隔をあけて近づくと、そこでひざを付いた。魂が抜けたようにぺたん、としゃがむのだ。リンにこれ以上近づいてはならない、とでも言うように。一人がそうすると、次から次へと彼らはひざを曲げていく。瞼を閉じて、うなだれていく。

（ああ、ぼくの記憶に）

（きっと……あのヒトたちはぼくの記憶に寄せられた）

だから、かばんに惹かれて集まっていたのだろう。今はリンの高ぶった思いを求めて、リンの記憶にすがろうしている。集まったヒトたちの表情が穏やかで温かくて、リンの胸はずきりと痛んだ。ヴォルフの言葉が蘇る。ほんとうだ。彼らは――なんて悲しいんだろ

う。
これはリンの思いであって、彼らのものではない。リュックにこもった欠片もリンと家族たちのもので、彼らと何も関係がない。それなのに、どうしてこんなにも、幸せそうな顔をしているのだろう。
胸が痛くて、切なかった。
リンには、どうしようもできないのだから。
リンの隣に、いつの間にかマーサさんが立っていた。彼女はリンの手を取って頬に当てた。このヒトも、寂しいのだろうか。身体を動かせない。家族の記憶が次々に脳裏を走り去る。
ほらリン、あったかいでしょう？
そう言ってリンの首にマフラーを巻いてくれたのは、姉のテレサだった。真っ赤で長いマフラーは、ローラおばあちゃんの手編みだ。テレサは白いマフラーと帽子をかぶっている。ニット帽には花のコサージュがついていた。女の子らしいテレサに、よく似合っている。
手袋もあるんだぞ。これで、冬も寒くないって。よかったな、リン。
そう言ったのは、兄のニコラだ。かがんで、リンの手にマフラーと同じ赤い手袋をはめてくれた。ニコラもマフラーをしていた。白と紺のストライプだ。それに、紺のベストを着ている。何やら大人みたいで、かっこいい。
雪、早く降らないかな？
そう言って顔を覗かせたのは、もこもこの薄いピンクのセーターを着た妹のエイダだ。フードがついているおばあちゃんの力作だ。小さな白い翼が背中から出ていた。エイダは頬を赤く染めて、ニコニコと嬉しそうにしていた。
そうだな、今年は去年よりでっけぇ雪だるま作ろうぜ。二階から飛び乗れるぐらいの奴。
ニコラがエイダを抱き上げた。テレサは「どうやって作るのよ」と声を上げて笑う。
――ああ。

これは、去年の記憶だ。去年の秋に、ローラおばあちゃんが家族全員へニットを編んでくれたのだ。この、リュックの破れ目からこぼれた赤いマフラーがそれだ。涙がこぼれそうになって、リンは目をこすった。きりきりと、胸がいたくて、苦しい。呼吸がつまる。

みんなに、会いたくて、たまらなくなる。

あのあたたかな輪の中に、いたはずなのに。

ぐい、と手を引かれた。「行きましょう」とマーサが眼差しを向けてくる。その微笑は温かいけれど、どこか寂しかった。こくん、とあごを引くと、リンは故郷を思い出さないよう、別のことを考える。

そうだ、ここはぼくの居場所なんかじゃない。

黒種たちにいくら同情しても、リンは足を止めていられない。

だが、異様な音がとどろいた。重たく大きな何かが崩れたような音だ。最初は、今朝と同じく、トリビトが支柱へ攻撃しているのかと思ったがそうではない。そんな、やわな音ではない。

リンが四方に目を走らせたところで、おかしなところはなかった。だが、先ほどまで座っていたトリビトたちはおどおどと立ち上がる。そこへ、ぴいぃぃぃ、という甲高い音が響いた。呼応するように別所からも聞こえてくる。黒種たちが、鳴いているのだ。

ぎゅ、とマーサにしがみついたリンは、空から細かな何かが降ってきているのに気づいた。これは、雨？

どくん、とリンの胸が高鳴った。どくん、どくん、と心臓が鳴る。オーウェインは世界を切り取ったような、巨大なドーム都市である。雨など降るはずがない。ならばこれは……

黒種たちの鳴き声は、いまや周囲から聞こえてきた。その中であの低い轟音が、大きく混ざりこむ。リンは、油の切れた人形のように、ゆっくりと首をそらした。目をギリギリまで見開いて、ぎゅっとマーサの手を握り締めて。

「そんな、うそだ」

わが目を疑いたかった。支柱近くにある建物が、揺れていた。支

柱の方向に折れ曲がっていく。ありえなかった。何かが、建物を押しているのだ。建物のきしむ音が、轟音の正体だった。ぱらぱらと降ってくるのは、その欠片だ。トリビトたちが、建物を使って支柱を攻撃しようとしている！

あれが落ちたら、どうなるのだろう。

周囲を見渡せば、鳴き声をあげる黒種たちしかいない。マーサでさえ、呆然と白の街を見上げるばかりだった。何かの欠落した種族、という言葉にリンは再びゾッとした。どうして、このヒトたちは動かない。悲鳴をあげるばかりで、逃げようともしない。危険だとわかっているだろうに！

「ここにいちゃ、ダメなのに」

思わず口をついて出た台詞だが、黒種たちに伝わるはずもない。リンはマーサの手を引いた。

「お願い、ねぇ、マーサさん！　みんなに逃げてって、言って！ここにいたらぺしゃんこになっちゃう。ねぇ、マーサさん、お願い！　逃げてって言って！」

リンの声がこだまするその場所に向かって、天井都市が崩壊しようとしていた。

「始まってしまったようだね」

暗がりを歩くヴォルフは、逐一送られてくる情報を頭の中で処理しながらぽつりと零していた。足音だけが響く通路を、灯りもささずに進んでいく。踏み出すたび、積もった埃がふわりと舞った。何年――何十年とだれも入った形跡のないここの空気は、重くヴォルフに絡みつく。

薄汚れたプレートを掲げた扉は、今かいまかと来訪者を待っていたが、彼はそれらに見向きもしなかった。足元に灯った淡いグリー

ンの光を頼りに、奥へ、おくへ。暗がりだけを睨んでいた。
ネコ族の少年と別れた彼は、黒の街を越え、さらに地下へきていた。足取りは重く、表情もかたい。淀んだ空気に染められて、徐々に険しいものへ変わっていく。
やがてたどり着いたのは、通路の幅もある大きくて重たい扉だった。ここで行き止まりなのだ。確認するためにこすったプレートは『ゆりかご』と記してあった。扉のパネルを操作しようと指を伸ばし……ヴォルフは拳で扉を叩いた。ダン、と音が響く。傷一つつけられるはずもなく、扉は微動だにしない。
ここは、封じなければならない場所だ。しかし、決してなくしてはいけない。その日がこなければ、時と共に朽ちていくだけ、ネコ族の少年が言い当てた禁忌の扉。
何かに耐えるようにして、ヴォルフは解除コードを口にする。指紋や網膜、脳波、音声……厳重なチェックの末に、扉がゆっくりとスライドしていく。オーウェイン深部にある、もっとも重要なその場所は、幻想的な青い光に満ちていた。
（ああ、久しぶり、アリア）

22

天井の高い部屋は、ちょっとしたホールのようだった。その中央で少女が一人、赤ん坊のように丸くなっている。人間ならば十六ほどの歳のころ。白いワンピースの裾と、長い髪がゆらりゆらりとたゆたう。燐光を発する水と、眠る少女は、巨大カプセルの中にあった。

それは『ゆりかご』と呼ばれる装置だ。ラッカが収まったものの四倍はある大きなカプセルで、天井まで届いていた。まるで水槽のようだ。何本もの束になったコードと機器が、宝を守るようにそっと『ゆりかご』を持ち上げていた。微細な機械音と、あちらこちらで明滅する小さな輝きは、この部屋が今もなお「生きている」ことを示している。ヴォルフが無視してきた施設を含め、だれも立ち入らなくなった今もなお、街の地下は稼働していたのだ。

かつん、かつん、と靴音が大きく反響した。ヴォルフは複雑な色で少女を見つめ、ゆっくりと歩み寄る。苦痛に似た顔は、泣きそうにも見えただろう。鼻の奥がつんと痛んで、ヴォルフは呼吸さえ苦しくなる。

少女は、記憶と同じ姿をしていた。いや、引き継いだ記憶のまま、と言うべきか。先ほどは久しぶりと思ったが、厳密には、『彼』が少女と会うのは初めてだ。しかし、そう思えない。『ゆりかご』へ触れる指が、かすかに震える。

「アリア」

後悔と甘さの入り混じった声は、掠れた小さなものだった。それが届いたのだろうか、少女の瞼がぴくりと震える。かすかな変化だったが――

（ヴォルフ……。会いにきてくれたの）

突如聞こえた『声』に、ヴォルフはカプセルからパッと手を離した。まさか彼女が目覚めていたとは。くすくす、と笑う気配がする。

だが、眼前の少女は瞼をおろしたままだ。青い水の中で、長い髪をゆらめかせ、ひざを抱いて眠っている。
「きみなのか、アリア」
（そう。ヴォルフ……ヴォルフ……）
黒種たちの機械的な交信とは違う、感情のこもった『声』だった。ヴォルフの頭に、彼女が直接話しかけてくれているのか。記憶通りの、蜜のような愛しい声。
（何年ぶり……あなたに会えるなんて。ずっとずっと、待っていた。会いたかった）　彼女が話している『ヴォルフ』は、自分じゃない。オリジナルのヴォルフはとうにこの世を去っている――そうと知りつつ、目が離せなかった。彼女と初対面には思えない。胸がきりきりと締め付けられた。それだけ、オリジナルはこの少女を大切にしていたのか。
自分はただの『管理者』であり、少女の知っている『ヴォルフガング』ではない。彼の容姿を持ち、彼の記憶を持つ、まったく別の存在である。そんなことは、わかっていた、はずなのに。
動揺をなんとかヴォルフは抑え、深呼吸を繰り返す。今は感傷に浸っている場合ではなかった。『管理者』として、することをしなければならないのだ。
「力を、貸してくれないか。……アリア」
ヴォルフがそう切り出したとき、足元が揺れた。ガタガタガタ、と機器が音を立てる。立っていられず、ヴォルフはカプセルに手をついた。大きい。先ほど遭遇した揺れとは、比較にならない。落雷のような轟音。しなる天井に、ぎくりとなる。部屋はこの揺れにびくともしなかったが――今の音は、街の一部が崩壊した音だ。天井都市の欠片が、地上落下したのだ。
（まずいな。予想していたとはいえ、被害が大きい）
ここは、決して新しい街ではない。地上都市や、メイン機能がぎっしり詰まった支柱部分はともかく、白種たちが住む天井都市はろくな修復もしないまま何十年と経過していた。人族であるヴォルフ

が、手を出せる領域ではなかったのだ。これまで、ゴミ収集等を行う雑用ロボットでだましだまし補整してきた。それでも老朽化は免れない。もともと脆くなっていたところに、白種たちの暴動だ。本格的な修理はいずれ……、と後回しにしてきたツケがこれである。

長時間も陽光に耐えられない白種たちのために、設計された街だった。建物が下方に向かって建てられたのも、そのせいだ。しかし今、街が端から崩れている。トリビトの手によって破壊されている。今は欠片程度だが、これ以上被害が出たら、基盤となる黒の街まで滅茶苦茶になる。星間列車も停車できなくなる。地下設備まで影響を受けるとは思わないが……トリビトの絶滅という最悪のシナリオも目に浮かんだ。

彼らは、破滅の道だと知りつつも、走り出したら止められないのだ。脅威が去ったと確信できるようになるまで、ひたすら衝動に身を任せる。

（あのときが、そうだった）

混乱に飲み込まれ、トリビトは牙を剥いた。

『王』の嘆きに、施設全体が、震えた。

（だが今は『王』がいない。この暴動は、鎮められる）

要たる『王』の不在は、トリビトの精神的安定を欠く要因となってきた。現在は、彼らを希望や滅びへ誘うものがいない。心の拠りどころがない。ゆえに混乱は一気に爆発した。きぃぃぃぃ、という声が、きっと外では、響いている。

（ここまで私たちは罪深いか）

ただ、姿を見せただけで、決死の拒絶だ。当然の報いかもしれないけども。

「アリア、ずっとここに閉じ込めておいて、虫が良すぎるとは思う。私を恨んでいるとも。だが、この街を失うわけにはいかない。お願いだ、アリア。彼らを――」

ヴォルフは、台詞の途中で言葉を失った。目の前にアリアの幻影が現れたのだ。彼女は微笑みながら細い人差し指で自分の唇を押さ

えた。それ以上言わなくてもいいから、と。ヴォルフを覗きこむ少女の幻は、巨大な水槽のなかで消えてまた現れる。
これも、彼女たちの持つ不思議な力だった。一か所に安定できないのは、彼女の力が全快ではないためか。
そうと、わかっているのに。
（知っているわ。ざわめきがここにも届いてくる。みんなの叫びが聞こえる。悲しい声が）
「君を解放する。君が王になれば、あれは止まる」
胸が、痛くなる。
切羽詰った状況なのに、アリアの存在だけですべてが見えなくなった。触れたい。この子を抱きしめたい。他のことなどどうでもいい。アリアがいてくれるなら、それだけで。醜い欲求に抗えない。だが、そんなヴォルフを少女は現実に引き戻した。
（ダメ、ヴォルフ）
ガラスに触れるヴォルフの手と合わさるように、手のひらを重ねてくる少女の幻。ゆらゆらと、長い髪が漂った。淡い微笑みは、容姿とは裏腹に大人びたものだ。諦観のにじんだ、少し寂しげな目でヴォルフを見つめる眼差し。ふっとその姿が消え、わずかに離れたところでまた現れる。
（そこは、私の場所じゃないわ。もうそこへは戻らない。戻ってはいけない。そのために私は、ここにいるんじゃない。そうでしょう？）
再び消える彼女。
（静まればいいの、感情が。彼らは怖いだけなのよ。まだ、怒りに囚われてない子もいるわ。だいじょうぶ。私たちは、そんなに弱くない）
我侭な子どもへ言い聞かせるようだ。アリアの感情と同時に幼い少女の映像が、ヴォルフへ流れてきた。『視えた』のは、他のトリビトたちのように暴走していない子ども。真っ白なワンピースを小さな両手で握りしめた少女。大きな口で何かを喚いているが、その

目は自らの意思を宿したものだとわかった。
シエラだった。

シエラを映していたディスプレイが、低い地鳴りのような音と共に途切れた。やっとあの子とコンタクトが取れそうだったのに！エドが歯噛みした瞬間、足元が揺れる。たまらず、少年はコンソールにかじりついた。悲鳴をこらえて揺れがおさまるのを待つ。何が起こったのかわからない。モニターを見れば、すべての映像がとぎれている。
「なんだ、今の」
胸騒ぎがして、エドは通信を再度起動させた。とにかく何が起こったのか知りたかった。再び映ったシエラの部屋は、たくさんあったぬいぐるみが散乱している。戸棚やクローゼットがベッドの上に倒れていた。エドは凍りついた。部屋のあるじが映っていない！
「シエラ？　シエラ？　無事なのか。おい、返事をしてシエラ！」
声を大にして、エドは呼びかけた。遠慮をしている場合ではない。床には粉々に砕けた鏡と電球の破片が、飛び散っている。血の、赤い色がないことが、救いだ。しかし、胸騒ぎが収まらない。
「シエラ！　お願いだ、聞こえているなら、返事を――」
「だれよ！　シエラ、シエラってヒトの名前連呼するのは。聞いたことのない声だわ。よそ者ね？」
ヒステリックな尖り声に、エドは鼻白む。そうだった。眠っている姿しか知らなかったが、この子がリンを突き落としたのだ。わすれていた。ラッカもこんな感じだったではないか。
（でも、ラッカより酷いよ！）
ふわふわした白い髪のお姫さまは、大そうご立腹のようだ。キンキンした声で、キャンキャン子犬のように騒ぐのだからたまらない。もっと大人しい女の子を想像していたのに。トリビトというのは、

総じてこうなのだろうか。
「ちょっと、返事しなさいよ！　さっきまで偉そうに呼んでいたくせに。どこにいるの、出てきなさいよ。勝手に部屋へ入っておいて、姿も見せないつもり？」
けんか腰のお姫さまに、エドはたじろいだ。キミの声がうるさいんだよ、とは懸命にも口にしなかった。言い合いにきたわけではないのだ。それに、姿も見せず語りかけるだけでは、不信に思うのも当然だろう。まずは、自分が落ち着かなければ。エドは先ほどの揺れによって転がったイスを運び、腰を下ろした。大きく息を吐く。
「今は声だけでゴメン。僕はエトムント・エスツェット。ネコ族で、昨日停車した列車で来たんだ。シエラ――先に言っておくけど、僕は敵じゃない。キミと話がしたくて、デンワしてる。そこは安全？　しゃべってて平気？」
「どういう意味？　あたしのこと、知ってるの？　あなた、どこにいるの？」
部屋にあるモニターの一つに、不安げにきょろきょろと視線を彷徨わせる少女が映し出された。きっと、今まで隠れていたのだろう。些細な物音にビクつく姿が見える。目立ったケガがなくて、エドは安堵した。
エドの指が監視装置のコンソールを滑る。シエラの現在地が安全かどうか確認したかったのだ。シエラの部屋以外も、きっと映し出せるはずだ。ヴォルフが何やら設定していったが、操作できれば何とかなる。しかし、見慣れぬ言語が現れてエドは臍をかんだ。なんて書いてあるか、わからない。
（くそ、そういえば共通語じゃなかったんだ）
愛用のカード型コンピュータで、手際よく装置と接続する。昨日、侵入したルートからもう一度ハッキングしようとしたのだ。だが、警告を受ける。どうやら同じ手段は使えないらしい。
（ああもう、あのヒト、手際いいんだから！　――って待てよ）
ヴォルフから受け取った指輪を、見つめた。これは通行書――つ

まりこの街のＩＤである。エドは試しに読取り機（リーダー）へ翳してみた。あのヒトの言葉が本当なら、これが鍵になっているはず。
当りだ。エドの唇が口角を上げた。ヴォルフが起動せずにいった機器が立ち上がる。だが、文字は読めないままだ。カードブックを経由して表示させれば何とかできるはず。エドは作業をしながら、シエラへ話しかけた。
「しゃべるときは、できるだけ静かに。シエラ、僕の声は、聞こえてる？」
最後はボリュームを絞ってエドは尋ねた。映像の中のシエラがうなずいている。
「何よ、偉そうに。聞こえてるわ。もっと小さくても平気よ。……あなた、街がどうなってるか、知ってるの？　この騒ぎが何なのか」
「……知ってるよ。キミの仲間が暴走してるってこと。街が危険だってこと。キミがラッカの妹だってこと。待ってね。今、どうなってるか確認しているから」
「お兄ちゃんを知ってるの！？」
作業中の指が、止まった。エドの目に飛び込んだシエラの顔は、パッと華やいでいたのだ。警戒心が一気に和らいだのがわかる。エドは自分の顔に苦味が走ったのを感じた。脳裏に、眠ったままのラッカが過ぎっていく。

23

「知ってるよ。僕は、昨日ラッカに案内してもらったんだ。今は、支柱の中にいる」
「支柱！？　そんな――どうやって？　あたしたちでさえ入れないのよ。よそ者のあなたが、どうやって入ったの」
　静かに、とエドは警告する。声が大きくなっていたシエラは「いけない」と口を押さえた。
「僕は、キミたちより機械（マシン）に慣れてるから」
「じゃあ、お兄ちゃんもそこにいるの？　お兄ちゃんがどこにいるか、あなたは知ってる？　傍にいてくれるって言ってたのに、いないの」
　エドがどう答えようか考えた時だ。シエラが悲鳴を発した。それのすぐ後にエドの足元も揺れ、コンソールに再度かじりつく羽目になる。作業が中断され、エドは苛立ちに拳を机にぶつけた。
「またかっ、もう、何なんだよ。さっきより大きくなってないか」
　管理者であるヴォルフは、支柱は安全だと言っていたが、こうも頻繁に揺れると本当かどうか怪しくなってくる。もしかしてトリビトたちが支柱内部へ押し入った音ではないのか――
　外を覗いたシエラが、息を呑んで飛び退った。窓から離れ、青ざめた顔を両手で押さえて、震えている。
「どうしたの、シエラ」
「うそ……どうしてみんな、街を壊してるの。あたしたちの家なのに」
「待って、じゃあ今の揺れは」
「わからないの！？　建物が、支柱へぶつけられた音よ！　支柱へみんなが攻撃してるのよ！」
　エドはとんでもない事態が、一瞬理解できなかった。しかし、すぐさま思い出す。そうだ、ヴォルフが言っていたではないか。この

街はかなり古いものだ、と。あのヒトは、ここまで予想していたのだろうか。
黒の街へ向かったリンは、無事なのか。
エドのコンソールを走る指がスピードを増した。状況を一刻も早く把握したかった。できることなら、シエラを安全な場所へ避難させたい。倒れたラッカの顔が、先ほどから脳裏をちらついてばかりだ。リンが無事であることも、確認したい。
「シエラ、そこは平気？　隠れていて大丈夫そう？」
「わからない。わからないよ、そんなの。何かみんな怖い。ねぇ、お兄ちゃんは？　一緒にいないの？」
「泣かないで、シエラ。つまり、キミの仲間たちは、キミの声も聞こえないの？」
「そんなの、わかるわけないでしょ！？　ようすが変だって言ってるじゃない！　おかしいのよ、みんな！」
叫んだシエラの目から涙がぽとぽと落ちていった。感情の高ぶりに顔を真っ赤にして、肩で息をしていた。唇をかんだトリビトの少女へ、エドは何と声をかけたらいいかわからなくなる。うつむいて、ぎゅっとワンピースをつかんだ、この子に。
（ラッカがあんな状態だなんて）
少女の拠りどころである兄は意識が戻らず、最悪、黒種になるかもしれないだなんて。……この子を置いていってしまうかもしれないだなんて。
（トリビトたちを説得してくれ、だなんて、言えるわけない）
静寂が舞い降りたところへガラガラ、と何かの崩れる音がした。エドまで聞こえたのだ。かなり大きいか、すぐ近くで発せられたのだ。息を呑んだのはシエラもエドも同時だった。鼓動の音さえうるさく聞こえる刹那が、どれぐらい過ぎただろう。ほっと息をついたのはシエラが先だった。我をなくしたトリビトがいつ現れることか。もたついていられない。一刻も早く、シエラを避難させなければ。妹が傷つくことを、ラッカは望んでいないのだから。

（だけど僕は、あいつを列車に乗せないと）
女王さまから頼まれた願いは、細い両肩にずっしりと重たい。こんなところで躓いていられないのだ。
（でも）
ラッカの姿が頭にちらつく。エドの頼みをきいてくれたからこそ、倒れた彼の姿が。ごめんなと、もういいよと、言った彼の声が。
迷ったのはわずかな時間だっただろう。エドは、モニターに向かって口を開いていた。
「落ち着いて聞いて。ラッカは……キミのお兄さんは僕を助けてくれたんだ。そのせいで街へ戻れない状況に陥っている」
「なに？　どういうこと？」
シエラの怯えた表情を見るのは、辛かった。これからどれだけ残酷な台詞を吐くのかと思うと、口をつぐみたくなる。だけど、エドは重い声で告げた。
「ここを離れて地上都市へ下りようとしたんだ。だけど、キミたちトリビトは、それを許してはくれなかった。ラッカは――倒れたきり、今もまだ目覚めない」
沈黙は、身を切るような痛みを伴っていた。

「どういうことよ」
シエラの声色は、冗談を言ったら許さないと告げていた。ラッカが倒れたこと、目を覚まさないこと、白の街に戻れないことを説明したあとの、第一声がこれだった。少女はモニターに映るベッドにしゃがみ、きつく膝を抱いている。うつむいていても、恐れと憤りの混ざった表情（かお）をしているのだと、想像がついた。
「どういうことよ、エトムント・エスツェット！　みんながお兄ちゃんを攻撃するなんて、ありえないわよ！　あなたのせいなんでしょ！？」

返答するのに時間がかかった。エドはトリビトに詳しくはない。だけど、ここでウソは言えない。
「僕には、トリビトの事情がわからない。だけど、ナイフまで飛んできたんだ。ラッカを狙っていた。それだけは確かだ」
エドは自分の太ももに刺さった光を思い出した。バリケードまで作ったあの拒絶は、相当なものだった。子どもでも、容赦ない。アレを見ていないシエラには、到底わかるまい。
「ねぇ、お兄ちゃんはどこにいるの。会わせて……会わせてよ！あなたの言うことは全部嘘なんだわ！　みんなが、そんなことするはず、ないじゃない」
「窓の外を見たんだろ、シエラ。これが――キミたちトリビトなんだ」
エドが、コンソールのキーをぽん、と弾いた。それを合図に、壁一面に並ぶモニタが、どこかの映像をいっせいに映し出す。いくつかが白の街を、いくつかが黒の街を、いくつかが支柱を。建物の外側、内側……あらゆる角度の映像が現れた。ヴォルフがエドとラッカの侵入を察知するのも当然だろう。最初から筒抜けだったと今ならわかる。
リアルタイムに送られてくる映像は、エドに鳥肌を立てさせた。暴走しているトリビトが、夢でも幻でもないと実感できる。彼らは手に、武器となる刃物やパイプなんかの棒を持っていた。獲物を探すように、ぎらぎらと赤い目をたぎらせている。恐ろしい形相をしていた。
これが、トリビトだ。
リンのように、何も知らない子どもにさえ怯え、逃げ惑い、憎しみと悪意をぶつけたのがトリビトだ。現にか弱そうなシエラだって、駅へ戻ろうとしたリンを傷つけた。その事実は変えられない。
「ちがう。みんながそんなことするはずない。ちがう！」
幼子のように彼女は駄々をこねた。耳をふさぎ、首を振る。信じない。信じたくない、と。お兄ちゃんに会わせて、と何度も繰り返

す。
「ラッカは黒の街で治療を受けてるんだ。今は会わせられないよ。だけど、手は尽くしてみると、言ってくれた。ラッカは助けられるだろうと」
「何よ、それ。あなたが、助けてくれるんじゃないの」
その指摘に、エドは沈黙した。だれが、助けてくれるの。そう尋ねられるのが怖かった。
「……人間、なのね」
重たい声は、確信を抱いているようだった。エドはわずかに目を見開く。知らず、こくんとうなずいている自分に気づき、「そうだよ」と声に出した。この声も、暗い色をしていた。
「知っていたわ。ううん、そうじゃないかって思ってた。この騒ぎだもの、それしかないわ」
自嘲気味の笑いだった。
「だってあたしたち、街のことさえろくに知らないのよ。入れない場所とか、使えない機械もいっぱいある。でも、この街はずっと維持されてきた。誰かがあたしたちを見ていたのも、知っているわ。……姿を見せない誰かが、この街にいるって」
姿は見せないのではなく見せられないのだと推測もつく。そうなれば、人族と結びつくのも容易い。この街に慣れない者なら、必ず誰かの手を借りるはずだ。
「そんなの、お兄ちゃんだって言ってたことよ。だから、あたしたちはずっと怖かったの。支柱から人間が出てこないか、いつも怯えていた。あたし……人間がしたことってほんとはあまり覚えてない。でも、みんなの傷ついたことは、知ってるのよ」
ラッカは、この街にだれかがいると知っていたから、あれほど取り乱したのか。奴らがくると喚いたのは、人間の存在を確信していたから。
（ああ、だからあの人は、一人だけで姿を見せなかったんだ）
ヴォルフが黒種と一緒に現れたのは、翼を持つものの身近にいる

存在だと示すためだったのだ。女性を伴ったのは、敵意のない証拠として。結果、ラッカには辛い事実を教えてしまったけれど。
「だから――あたしは、あの子が許せなかったの。やっとみんな、空を飛べるようになったの。やっと、笑顔が戻りだしたのよ。なのにあの子がかき乱した。今も、こんなことになってる！　許せなかったの。許せないのっ。お兄ちゃんまでいなくなったのは、あの子のせいよ。人間なんか嫌い、嫌い。大っ嫌い！　どうして、奪っていくの？　あたしたちが、何をしたのよ！」
　自分の腕に顔をうずめる白い少女は、小刻みに身体を震えさせた。立ち上がるのも嫌と拒絶しているようで、エドはどう声をかけたらいいかわからなくなる。この激しい拒絶はラッカと同じだ。
　何かがまた落ちたのか、腹に響く低音がした。足元が、かすかに揺れる。エドには聞こえないが、トリビトたちの悲鳴は今も空を覆っているのだろう。
「キミが、突き落とした人族には……妹がいるんだ」　ぽつ、とそう呟いたのは何故だったのだろう。ラッカにはあれほど否定されたのに、ましてやこの少女が、リンを突き落とした張本人なのに。
「背に、小さな翼を持ったトリビトの、妹が」
　シエラの肩がびくん、とはねた。エドはそれに構わない。
「あいつはね、キミたちに会いたくて列車を下りたんだ。ダメだって言ったのに、聞かなかった。傷つくだけだから降りるなって、何度も言ったのに」
「……や。……たくない」
「キミにそっくりなんだって、シエラ。もうちょっと小さいらしいけど、かわいい妹なんだって」
「聞きたくない、やめて」
　知るのが怖いのか。憎みたい相手にも、家族がいて愛する者がいて、自分たちと変わらないのだと、知るのが恐ろしいのか。非情であり、酷薄な人族のイメージを崩されたくないのか。自らの罪悪から逃れたいために？

シエラは耳をふさいで小さくなっている。聞こえてくる嗚咽は、少女が泣いているのだと教えてくれた。シエラだって、リンがなにも知らないとわかっているのだ。
「もうこの街に、キミたちを虐げた人族はいないんだよ」
「聞きたくないったら！」
「聞いて！」
エドは思わず身を乗り出していた。
「いるのは、何も知らないあいつと、キミたちを守ろうと奔走しているヒトが一人だけ。彼は、自分の罪を償おうと一生を捧げて、キミたちが幸せに安心して暮らせるように願っている。……キミたちは、その彼さえ追い出そうとしている」
「そんなの、知らない……っ。あたしたちは守られたいなんて思ったことない」
「だけど、僕はラッカを助けたいんだ」
シエラがゆっくりと顔を上げた。涙でぐちゃぐちゃの顔だった。
「僕も人族は嫌いだけど、あのヒトがラッカを助けてくれるって信じてる。このままじゃ、黒の街はぺしゃんこになってしまう。そうなったら、ラッカの治療もままならない。シエラ、だから……」
卑怯者だ。
シエラ、だから……と言いかけた先に並ぶ言葉は、エドとリンを助けるものしかなかった。もしこの少女が、トリビトたちを静められたとしても、ラッカが無事に回復する保証はない。ラッカを治療するのに万全な体制は整えやすくなるだろう。しかしラッカが回復したとしても、また白の街に戻ってこられるかわからない。――彼は一度、仲間に見捨てられたのだ。その傷は、きっと深い。
（なのに僕は、シエラにそうしろと頼むんだ？）
（自分は安全な場所にいて、あの子だけに背負わせるんだ？）
（二人の傍からすぐにいなくなるこの僕が？）
ラッカを人質のように使っておいて。
すがるように周囲を見る小さなトリビトに。

ラッカと同じ目にあう危険を、承知で。

「あたしは、どうしたらいいの」

言い合いの途切れ目に、その台詞は響いた。彼女は涙でぐちゃぐちゃだった顔を両手でこすっていた。しゃくりあげながら申し出てくれた彼女に、すまない気持ちでいっぱいになる。だが、エドが口を動かそうとしたときだ。不意にシエラが立ち上がった。きょろきょろと目を四方へ向けている。その表情は不思議そうで、不安そうだった。窓際まで彼女がふらふらと歩いていく。どうしたの、とエドが尋ねれば、シエラは「聞こえないの」と答えた。

「この歌は、なに」

「……え？　僕には、何もきこえ――」

耳のよさを自覚しているエドが訝しげになったとき、かすかな音を捕らえた。ネコの耳がぴくりと動く。

24

「呼んでる……あたしを？　あなたはだれ？　どうして、あたしを呼ぶの？」

戸惑いながら、エドは感覚を研ぎ澄ませた。確かにこれは、歌だ。だれかの、歌声。

それは小さくて、小さくて、耳を澄まさなければきっと聞こえない。聞こうとしなければ、気づかない。細い女の人の声だ。

一体どこから、だれが歌っているのだろう。ともすればかき消されそうな旋律に、別の音がつと混ざる。え、と視線を移したディスプレイでは、シエラがたたんだ翼を広げようとしていた。小さなトリビトの身体に不釣合いな大きな翼が、存在を示す。

シエラ、というエドの呼びかけは届いたはずだった。しかし彼女は、白い両手を胸にあてがったままだ。瞳は焦点を結んでいない。その唇から紡がれているのは、歌。エドが息を呑んだ。少女の声が、先ほどから聞こえる歌声に重なり合っていく。

ネコ族のエドにはわからない言葉だった。トリビトの言葉なのか。メロディだけが鼓膜をふるわせる。それは徐々に大きくなり、波のように引いていき、うねって空へ上っていく。

（なんだろう）

不思議と胸が痛くなってエドは瞬いた。その拍子に頬へぽた、と落ちたのは涙だ。

「え……？」

どうして自分が涙を流しているのか、エドにはわからなかった。ただ切なくて、悲しい。歌とともにあふれ出す何かが、自分を満たしていく。やさしくてやるせない歌声を聴くうちに、わけがわからないまま、胸が張り裂けそうになる。涙が止まらない。

唐突に、小さな部屋で怯えていたトリビトの少女が、ふらりと窓枠に手をかけた。ぎょっとしたエドがシエラ、と声を大にした。制

止も聞こえないのか。シエラは操られるように宙へと身を投げ出す。
「シエラ！」
モニタにかじりついても、彼女を引っ張りあげる手は届きやしない。愕然となったエドが通路へ向かったとき、耳に飛び込んできたのは……先ほどよりも大きな歌声だった。より強く繊細に、メロディは大きくなっていく。

「だけどアリア、この子は……」
ヴォルフが連れてきた少年の妹。いつもヴォルフを助けてくれるマーサの妹。ネコ族の少年が会いたいと言っていた小さなトリビト。それがヴォルフの知るシエラだ。暴走していない白種がまだいたとしても、この子ひとりが何になるだろう。
（私がいなくてもここは、だいじょうぶ。この子がいる）
アリアの幻が、ふんわりと笑む。
「だけど」
この小さな女の子は、王ではない。ただの白種の子どもだ。こんな子がどうやってあの群れを止められるだろう？
男の不安を抑えるように微笑んで、幻は消えた。立ち尽くすヴォルフの目に映るのは、透明な器の中で膝を抱えている少女のみ。こんこんと眠り続けるかつての女王――そして間断なく聞こえていた微細な機械音が、戻ってくる。今あったことはすべて夢だったのでは、なんて思わせるほど、静かな空間が染み入った。
つとヴォルフが天井を見上げた。間髪いれず地響きが起こり、足元がわずかに揺れる。――これは、夢ではない。今もなお、地上ではトリビトたちが暴走をしているのだ。
そして、彼女はまだ、ここから出てこない。
落胆を隠せない男の耳に、ふと歌が触れた。パッと振り返った『ゆりかご』に眠る彼女の様子は、最前と何も変わらない。けれど、

聞こえるこの『声』は確かにアリアのものだった。
女王の歌だ。
地下にわだかまる暗がりに自ら囚われた彼女の、小さな小さな声。それが、地下から街をおおっていくのがわかった。壊れ物を守るようにそっと包み込んでいく。
しかし囚われたままのアリアでは、充分な力が発揮できていなかった。不完全な歌声は、きっとトリビトたちに届かない。どれぐらいのヒトビトがこの声に気づくだろう。まだ、あの鳴き声は空に響いている。
そう思ったとき、新たな旋律が加わった。幼い少女の声だ。それが、アリアの声を補うように力強く、徐々に大きくなっていく。二つの歌声はやがてぴたりと重なり合い、威力を増した。知らず、ヴォルフは息を呑んでいた。
――女王の素質を持たない、ただの白種の少女だったはず。
脳裏に浮かぶ小さな少女は、頼りなく兄の影にかくれている姿だった。これが、あの少女の力だと言うのか。
（ちがう。あの子の声がこんなに通るはずがない）
（アリア、きみがあの子の思いを広げてくれたのか）
彼女の思いがヒトビトの間を抜けていく。だいじょうぶ、と微笑んで出てこなかったアリアの言葉が、やっと理解できた気がした。徐々にではあるが、トリビトの嘆きがおさまってきている。
呆然としていた時間は短かった。ヴォルフはきびすを返し『ゆりかご』から一歩を踏み出す。管理者としてすべきことは他にもあった。トリビトの少年も救わなければならないし、黒種たちも気にかかる。今のところ犠牲者が出ていないのも、先ほどから引っかかっていた。まさか彼らが自主的に動いたとも思えない。
（避難を命じてはいるけど、どうしたら「避難する」ことができるのか、わかっただろうか）
今更ながらにそう管理者は考えた。アリアに気を取られて、本来の仕事をすっかり忘れていたのだ。

「行かなくては」
自分のいるべき場所は、こんな暗がりではない。オリジナルのヴォルフとは違い、自分は管理者なのだから。
決意した背中に、甘い声が投げかけられた。
（大好き、ヴォルフ。あなたがあの頃のあなたじゃなくても）
――また、会えるよね。
黒の街、その最深部の扉が再び閉ざされる直前、そんな思いが響く。ヴォルフが振り返ったときには、分厚い扉は音を立てて閉まっていた。男の手のひらに、爪が食い込んでいく。
「そうだね。また会おう。私の……アリア」
そう呟いたヴォルフの顔は、切なげにゆがんでいた。
地上へ戻る道すがら情報を集めていた彼は、ここでやっと奇妙なことに気がついた。黒種たちが支柱に集まってきているのだ。正確に言うならば、この地下への入り口付近に。避難するために、自主的に彼らが集まったのだろうか。そう考えてヴォルフは否定した。こんなところまで彼らが入り込むはずがない。
だれが彼らをここまで導いたのか。
その疑問はすぐに解けた。走り出したヴォルフの足が止まったのは、件の入り口付近へたどり着いたときだ。百を超える黒種たちがそこにうずくまっている。だが彼らは不安そうな表情を浮かべてはいなかった。どこか恍惚とした……夢を見ているような目をしている。
異常を訝る管理者の目に映ったのは、黒種たちに傅かれた少年の姿だった。真っ青な顔で闇を見つめている人族の。
「リンくん！？」
黒種をかき分けてヴォルフが呼びかけても、少年は応じない。魂を抜かれたように、虚ろに立っている。やっとの思いで小さな肩をつかんだヴォルフは、異常なのは黒種ではなく少年のほうなのだと知った。リンは、ヴォルフに揺さぶられるままになっているのだ。小さな身体は、手を引かれれば簡単に倒れ込んだ。息を詰めたヴォ

ルフが、わずかに顔をゆがめる。察しがついてしまった。この子がこの場所にいるならば――

「……見たんだね」

管理者は、少年を抱きしめた。されるがままになっていた少年の腕が、ヴォルフの腰あたりをつかむ。まるで、助けを求めるように弱々しく。

「見てしまったんだね……」

リンの背中が大きく揺れた。そう、少年は見たのだ。この地下に埋められた闇を。ここに、何が隠されていたのかを、知ってしまったのだ。

「突然……白の街が崩れてきて、どうしたらいいか、わかんなくて」

うん、と男はぎゅっと抱きしめる腕に力を込めた。

「みんな、鳴くばかりで、動いてくれなくて、だからぼく、みんなをここに連れてきたらいいって……思って。そうしたら、支柱のほうにたくさん落ちてきて、逃げようとしたら、指輪が……ここの入口を……」

少年の腕に引っかかった鞄を見て、ヴォルフは小さな頭をなでた。この子は、自分の記憶をばら撒いて黒種たちを動かしたのだろう。荷物の一つ一つにこめられた思いを開放して、支柱まで懸命に集めてくれたのだろう。少年こそ恐ろしい思いをした一人なのに、できることを必死になって探してくれたのだ。そして、ここまで迷い込んでしまった。

旅人二人の安否を知るために渡した指輪が、こう作用するとは思いもしなかった。地下への入口は、ヴォルフ以外には閉ざされたままのはずだ。瓦礫が落ちてきたことによって、誤作動を起こしたのか。

（血は争えない、か）

（できれば、知らないでいて欲しかった）

エドの行方も念のために検索し、ため息を零したくなった。こちらもリンに負けず劣らず、ヴォルフの予想を上回ってくれる。危険

は冒さないと約束したのに、あの指輪を利用してシステムに侵入していた。ロックを外し、天井都市へと向かっているらしい。
ヴォルフは、少年二人にリングを渡したことを、後悔していた。列車が行ってしまい、二人はすぐに旅立てなくなった。街に滞在することは、支柱にいることだ。白の街も黒の街も、彼らには居心地が悪いから。だが、支柱内部では常にセキュリティが付いて回る。二人の自由を確保するためには、構わないか、と思ったのだ。
（もっと、注意を払っているべきだったか）
だが、ネコ族の少年と違って、リンがここへやってきてしまったのは、事故だ。避難しようとしただけだった。何より傷ついたのは、この子自身だ。そっと、ヴォルフは少年の頭を撫でるように押さえた。
「きみが、みんなをここまで連れてきてくれたんだね。マーサたちを守ってくれた」
「守ってなんか、ないです……。ぼくは、ここへ来ちゃいけなかったんだ」
がくん、と少年の身体が折れ曲がった。立っていられなくなったのだ。ずるずるとしゃがみ込む少年が、小さな声で「エイダ」とつぶやいたのが聞こえた。震える身体と呼吸ができなくなるほどの激しい息遣いに、ヴォルフが「ゆっくり息をするんだ」と厳しく言う。痙攣をおこしかけていた少年は、ぐっとこらえるように自身を抱きしめた。その小さな背中をさすってやって、ヴォルフは背後の闇へ視線を向ける。
（無理もない）
こんな小さな子どもが知るには、闇は深すぎる。まるで「この先へ進むな」という警告のようだ。これが試練だとしたら、厳しすぎる。
少年の呼吸が落ち着きだした頃、ヴォルフは言った。
「歌が、きこえるかい」
うた、と繰り返す少年へ、彼はうなずきかけた。耳を澄ませてご

らん、と言うと少年は声を探すように目線をさまよわせた。
「争わないで、怒らないでって歌っているんだよ」
腕の中にいる少年は、力なくうつむいている。
「これを歌っているのはシエラだ。会ったことがあるだろう？」
こくん、とわずかに頭が動いた。
「もう、白種たちもきみを怒っていないよ。もう、だいじょうぶ。——戻ろう。こんな場所にいつまでもいちゃいけない」
薄暗いけれど闇よりは明るい光が、その場所を包み込んでいた。地上への扉が開けられたのだ。

エドが我武者羅になって白の街へ飛び出したとき、彼らは一様にしゃがんでいた。まるで黒種のように、だれもが膝をついていたのだ。涙を溢れさせる者も中にはいた。黒種たちと違うのは、そこに感情があることか。身構えたエドに気づいても、一瞥するだけだった。その態度が不気味で、「だいじょうぶですか」と思わず声をかけてしまうほどだ。
「ええ」
焦点を結ばない目で、トリビトは反射のようにこたえ、やがて血まみれの両手で顔をおおった。ケガで真っ赤になっていた。人形のように整った顔を押さえたそのヒトは、震える声で、
「いや、わからない。わからないのです。ただ悲しくて、たまらない……どうして……」
激情に身をゆだねていた彼らは、記憶があやふやになっていた。一種の狂乱状態だったため、あまり覚えていないと口をそろえた。もしかしたらあの歌声が、狂気と一緒に記憶も奪ったのかもしれない。
暴れている者はいなかった。街を見渡して、自らがしでかした事態に呆然となっていた。肩を落とす彼らが痛々しい。まるで、心が

抜け落ちたような有様だ。ぺたん、と座り込んでいたトリビトたちの間を、エドはぬって走った。どこもかしこもけが人と瓦礫だらけだ。けがの程度は軽傷である者が多かったが、中には運悪く瓦礫に巻き込まれた者もいる。

我をなくして暴れたトリビトたちは、指を潰したり、手足を骨折している者が多かった。自身を省みることなく、暴走した結果だ。これがもし戦争だったとしても、彼らは躊躇わなかったに違いない。もしかしたら命さえ、簡単に投げ捨てたかも。

そう考えると、ゾッとなって、エドは走っていた。

『トリビトは平和を好む性質だが――この星が悪化の一途をたどったのは、彼らの暴走も原因の一つだ』

そう言った管理者を思い出す。くそ、と口から悪態が漏れる。白の街は、三割ほどが削り取られ一割ほどが倒壊の危険があった。もともと老朽化の進んでいた街なのだ。ひびが入れば、あとは早く、少しの力でたちまち落ちていく。

25

「くそ、まともなところは――無事なところはないのか！」
目指したのはラッカの家だ。記憶の通りに走ったが、どこもかしこも崩れている。
「どうして、ここまで……っ」
どこを見ても、瓦礫とけが人ばかりだ！
街の最上部は平らな面ばかりだが、そこにも亀裂は生じていた。大きな亀裂だ。下手をすれば、白の街は半分以上も地上都市へ落下したのではないか。その可能性にエドの身がすくむ。
通りがかった星間ステーションは、案の定破壊されていた。ぐしゃりと凹んだ扉や、分解された線路、屋根の落とされたホーム……。陽の降る駅内部は、見るも無残な姿をさらしていた。駅員が常駐していなかったのは、せめてもの救いである。
トリビトたちの憎しみが、そこかしこに現われていた。これが、人族や女王に対する憎悪なのか。
何かに引かれるように、エドは中に入っていた。ラッカの家に行かなければ。シエラを探さなければ。そう思うのに足が、こちらへ踏み出していく。しつらえてあったベンチや乗車券売り場は、ぺしゃんこだった。スポットのように、歪んだ屋根から光の筋が、粉々の足元を照らしている。戦慄していると、見覚えのある姿が横たわっていた。
「シエラ！」
シエラだったのだ。こんなところにいた！　だが赤い血が、真っ白な少女を汚している。息をのんで抱え起こした。ぬらりとした感触に、ゾッとなる。白い肌がとろどころ裂けていて、頭からもシエラは血を流しているのだ。
（これは、僕がやった）
腕が赤に染まるのも構わず、エドはその頭を抱き寄せた。青白い

少女の身体から、熱が消えていくのではないかと怖かった。ラッカと同じ目にあわせたのか。僕がそうなるよう仕向けたのか。息ができなくなる。カチカチと歯がなって、震えていることに気づいた。崩れたホームの天井からは光が二人を照らしていたのに、暗がりに落ちたような錯覚さえした。

シエラの、弱々しい声が聞こえるまでは。

「あなた、エド……？」

エドが目を見開いてうなずくと、彼女は少しだけ、微笑んだ。

「あたし、ちゃんとできたかな。ちゃんと、やれた……？」

そう言って、エドを見るのだ。助けてとも恨みごとも言わなかった。これでよかったんだよね、とエドを見るのだ。答えを求める眼差しに、なにも返してやれなかった。どう返せばいいのか、わからなかった。

ふっと彼女が意識を失うと、たまらず彼女をおぶってエドは支柱に急いだ。小さな身体は、簡単に持ち上げられた。こんなにもシエラは儚くて、守るべき存在だったのだ。

（僕は、正しかったのだろうか）

もっと他に方法はなかったのだろうか。だれかに罪を押し付けたのではないだろうか！できることを探した。今できるベストだと思う手段を。だが、誤ってなかったか、自信がもてない。

シエラはこんこんと丸一日眠り続けた。眠る兄の隣に並べると、一組の人形のようだった。包帯が巻かれ、服を着替えたシエラから赤は取り除かれたが、痛々しさは変わらない。二人がこうなったのは自分のせいだと青ざめるエドの肩を、ヴォルフが力強くつかんだ。

「シエラは、持っている力をすべて、強制的に放出したんだ。眠ることで回復しているから、大丈夫だよ。腕の骨折と足を捻挫しているようだが、命に別状もない。安心していい」

管理者がそっと様子を診て言う。よかった、と何度もエドは繰り返した。ラッカに続いてシエラまで目覚めない事態に陥るのは、耐えられない。

「あの祈りの歌を聴いたかな。あれは、一種の奇跡だった。この子の踏ん張りがあったからこそ、この街は失われずに済んだんだ。シエラを説得してくれて、ありがとう」
「そんなお礼、言われる資格なんて……！」
簡易チェアに座って、拳を握りしめるエドに、管理者はわずかに微笑を向けただけだ。ネコ族の少年が慰めを必要としてないことを、承知していた。その役目は、ヴォルフではないのだ。
静かに彼が扉を抜けたところで、今度はひざを抱えるリンがいた。鞄を抱きしめながら、エドがトリビトの兄妹を看ている間、ずっとそうしていたのをヴォルフは知っている。
「入っていいんだよ、リンくん」
照明を落とした廊下で、リンは無言で首を左右に振る。
「じゃあ、向こうで休まないかい。一緒にお茶をしよう。僕もそろそろ休憩したいから」
リンは両手に顔を埋めて、首を振るばかりだ。管理者が上着を脱いで、リンにかぶせた。
「日が落ちるとそこは冷えてくる。これを羽織っていて。あとでもう一度来る。ご飯は、食べられるね？」
返事がないリンの頭を、そっと大人の手が撫でていく。
だれもが、傷だらけだった。

トリビトたちは最初のショックから抜け出して、寄り添うように復興作業を始めた。その表情は決して晴れやかなものではないが、とヴォルフが教えてくれたのだ。最初の一晩は、ため息と痛みに対する呻き声と、すすり泣く声が響いていた。たった一日で激変するほど、この街はずっと歪みを抱えていたのだ。
（その引き金を、僕らは引いてしまった）
管理者は二人のせいではないと繰り返してくれたが――

「騙しだましやってきたからね。そろそろ限界だったんだ」
そのヴォルフこそ、トリビトが心配で一睡もしていないようだった。疲れた素振りは見せなかったけれど。
昨晩、二人へ早々に眠るよう告げた彼は、管理者としての能力をずっと駆使していたのだろう。白の街へ意識を傾ける傍ら、暗い夜のうちに黒の街の視察へ出ていた。彼は動ける黒種たちを率いて情報を集め、次々に対策を立てていたのだ。
たった一人で。
この街を預かるものとして。守るものとして。睡眠時間を削って。
管理者としての能力を超えて、だれよりも街の復興に努めている。
「黒の街は大丈夫そうだよ。もともと、白の街のサポートをこなす場所だったからね」
彼が気遣ってくれているのだと、すぐにエドはわかった。黒種たちの被害は、白種たちよりも大きいのだ。リンくんが彼らを連れて避難してくれたおかげだよ、とヴォルフは言うけれど、それは全体の何パーセントだ？　それだけで何とかできるような被害だったか？
（本当なら、僕らの相手している余裕なんか、ないのに）
子ども扱いできないねと言った彼が、だれよりも二人を子どもとして見ていた。
だから、エドは天井都市への仲介者を名乗り出たのだ。少しでも、役に立ちたい。自分でも何かできるはずだと思いたかった。
「エド、ぼくも行く」
「ダメだよ」
後に続こうとするリンが、どうして、と訴えてもエドはにべなく却下した。
「ダメだ。白種たちはまだ怯えているから、キミが向かったら逆効果だよ」
「でも……」
本音はリンの安全を優先したのだった。何より、リンの変化が気にかかる。表面上は何事もない風を装っていたが、黒の街へ落され

てからのリンは沈みっぱなしだ。よく笑う性格だったのに、口数もぐっと減ってしまった。予想していたとはいえ、リンの元気のなさが一番堪えた。迂闊に天井都市へ上がってしまったら、さらにリンは傷ついてしまう。それだけは、避けたい。

「キミはここで休んでいて。ね？」

リンは両手をだらりと下げて、言葉なくうつむいた。そんな旅の連れから逃げ出すように、エドは天井都市へあがったのだった。

街をざっと見て回れば、トリビトたちはいくつかのグループに別れていた。そのリーダー数人を探し、通信機を渡すことが仕事だ。移動するトリビトを探すのは結構な手間だ。使い方を教えて回るだけで一日が費やされた。だが、通信機のお陰で、支柱サイドも逐一問題を把握できる。現地にとって必要な物資や器具を送れるというわけだ。

「あの、ケガ人については、軽傷者でもちょっと見逃せないかも。指や手をダメにしているヒトが……案外多くて。手当をしないといけないのに、おざなりになってしまってるんです。それから……食事と衣類となんといっても手が足りてません。あともしかしたら建物ごと黒の街に落とされたヒトや、倒壊に巻き込まれたヒトとかの――」

報告していくエドの耳に、ヴォルフの了解が聞こえる。助かるよ、と言われると少し後ろめたい。

とりあえず支柱の上部を臨時で開放することが決まった。こうなった以上、天井都市との関わりを避けるだなんて言ってられないからだ。現実的な生活必需品は、列車によって運ばれてきたり支柱からトリビトへ支給されていた。ただし、白の街へはそうとわからないよう無人の店なんかに卸していたので、白種たちは仰天だ。彼らはなんの疑問もなく、それらシステムの恩恵を授かっていたのだ。

「まさか、支柱や列車のものだったとは……」

そんなつぶやきが聞こえて、エドはこの街の特異さを意識した。白種たちは手厚く保護されていたのだ。食べるものも、住む場所も、

身につける服も何もかもを与えられ続けていたのだ。しかし、そんなシステムさえ彼らは自らの手で破壊した。これからは自分たちが、自分たちを支えなければならない。少なくとも、街が復興するまでは。

だけど、とエドはため息をついた。生活ができるように解放されたフロアは、がらんとしていた。トリビトたちはここへ入ろうとしない。

（トリビトの性質上、支柱という場所が生活しにくいのかもしれないけど）

空を飛び交う彼らは、街を下へ下へ延ばすことで居住区を完成させていた。支柱の中では、圧迫感があるのかもしれない。

（でもやっぱ、人族の助けを不気味に思っているんだ。これが大きい）

今まで、助けられていたことさえ気付かずにいたのだ。トリビトたちの戸惑いを感じる。

「エド」

ぎくんとしたのは、こんな場所で自分を呼ばれるとは思わなかったからだ。血相をかえて振り返った先に、トリビトの少女がいた。

「シエラ……」

彼女も頭や手足に包帯を巻いている。白種のなかではシエラだけ、この支柱に足を踏み入れていた。だが、それさえ「兄がいる」という理由付きだ。彼女だってラッカがこんな状態でなければ――。

ふるふると首を振って、エドはシエラへ笑いかけた。

「具合はどう？」

「うん、お兄ちゃんはまだ目を覚まさないよ……」

シエラの体調を尋ねたのに、彼女の頭はラッカのことでいっぱいだった。ラッカはこの上部フロアでずっと眠っている。先日とは逆に、妹がぎゅっと兄の手を握っていた。目覚めからてずっと、祈るように彼女はそばを離れない。快調とは言い難い体で、無理に起き上がってラッカへ寄り添っている。

その絆の深さに、エドは目を背けたくなった。ラッカが姉に見せた執着を再び見ているようで、辛い。
（僕も、あんな風だったんだ、きっと）
封じていた過去が胸の内にあふれて口をつぐんだエドとは反対に、シエラは躊躇いがちにエドを見た。
「あの、あの子、どこにいるの」
「あの子？」
「あたしが……突き落した子」
謝りたいの、とシエラは言った。ここにいるかと思ったのに、探したけど見つからないの、と。エドの目が見開かれる。
「あたし、酷いことをしたから。あたし、お兄ちゃんの言うことをちゃんと聞けばよかった。そうしたら、みんな平静でいられたし、お兄ちゃんもああならなかった。……あの子のせいだって思ってたけど、違ったの。あたしが、バカだったと思ってる」
あの子のせいじゃなかった、ときれいな顔をゆがませるシエラは、ぎゅっとスカートのすそを握っていた。逃げ出さないように必死に足をとどめている。
「ここに、連れてきてもいい……」
それは問いかけと言うより、エド自身の考えがぽとりと落ちた台詞だ。リンを激しく拒絶したシエラが、ぎゅっと目をつむる。そして結んだ唇のまま、うん、とあごを引く。そのまま前髪の下に顔を隠した彼女を、エドは複雑な色で見つめた。
「この部屋に、あいつを連れて来てもいいの？」
今度のはハッキリとした問いかけである。もう一度、シエラがうなずく。耳まで真っ赤にして、彼女は真剣に申し出てくれたのだ。
全身に電流が走った気がした。目の前に落ちてくる光は支柱のライトなのに、何かが開けたような気持ちになった。
「待ってて、すぐに連れてくるから。あいつを引っ張ってくるから！」
人族だというだけで傷ついた友だちを、ちゃんと知ってくれる切

っ掛けをやっとつかんだ。その事実に胸が詰まった。会いたいと願ったトリビトに、やっとリンは会える。

（そうだよ、世界は動いている。変わっているんだから――トリビトだって）

諦めていたはずだった。

分かり合えることもなく、二人はここを発つはずだった。

勢いづいて踵を返したエドを、再びシエラが止めた。エド、と呼んで。振り向いた猫の瞳が映したのは、いろんなものを含んだ笑顔の小さなトリビト。どういう顔をしていいかわからず、結局くずれた笑顔になったというような。

彼女は耳を澄まさなければ聞こえないほどのか細い声で、一言だけ「ありがとう……」とつぶやいた。

＊　＊　＊　＊

26

予定していた刻限、『白と黒の王国』の青空にひとつの影がよぎった。

きた。

エドはそれを目にしたとたん、駈け出していた。あれはエドが呼んだ迎えの船に違いない。連絡通りにやってきた船は、シャトルを街におろした。星間ステーションや街の残骸を目の当たりにして、本艇で着陸するのを取りやめたようだった。

シャトルが着地する場所を探してさ迷うのを追いかけたのは、エドとリンの少年たちだ。その二人に遅れて、街の管理者であるヴォルフもゆっくり歩く。三人は頭まですっぽりフードをかぶり、トリビトたちの活動が鈍る夜を選んでここまで来たのだ。

二人がこの街に降り立ってから三日が過ぎた。街が半壊してから三日が。

その間にヴォルフの手伝いをしたり、旅の支度を彼らは整えた。リンのメガネもヴォルフが修理してくれた。残念ながらぼろぼろの服までは元通りにならなかったが、今身に着けている少年たちの服はヴォルフが用意してくれたものである。

三日間は目まぐるしく過ぎて、本当はもっとこの街にエドは留まりたかった。けれど、それはいけないと管理者が首を振った。だからエドとリンは荷物を持ってここにいる。すっきりしない心境のまま、このステーションで一晩を明かしたのだ。

少し開けた場所に着地したシャトルは、朝日のなかで輝いていた。小さく見えたが、間近で見るととても大きい。夢中で追いかけた二人が見守る中、その扉がひょいと持ち上がる。中から吐き出された人影は、同時にできた段差に足を引っ掛けて奇妙な悲鳴をあげた。

「……」

どう反応していいかわからない三人の視線が注ぐ中、両膝をつい

た影はぴょこん、と身を起こした。見覚えのある耳をピンと立たせ、ぱたぱたと服を叩いて整え――必死に手を振るのだ。逆光から徐々に読み取れたその姿に、少年二人はぽかんとする。

「え？　フーリーさん？」

びっくり眼でつぶやいたのはリンだった。ウサギ族の警察官は真剣な顔をして瓦礫を踏み越えていた。

「エドくん、リンくん！」

その顔をエドがちゃんと確認する前に、がばりと二人を抱きしめられる。え、と少年たちが驚きを口にする前に、回された腕は強い力がこめられた。

「二人とも元気そうだね。無事でよかった。本当によかった。ニュースを聞いてびっくりしていたんだよ」

フーリーにぎりぎりと二人は締め付けられてあえぐ。肩口でもがくエドは、ぺしぺしと彼を叩いた。

「フーリーさ……は、はなし……」

「苦しいってば！」

エドが突き飛ばすようにして逃げると、ようやく「ごめん、つい」と潤んだ瞳でウサギ族の警察官は二人を解放する。鼻をすすっている彼は、再会に感極まっているようだった。

「トリビトの街で、観光客が巻き込まれる騒動があったって聞いたんだよ。すぐに君たちを思い出した。安否を列車に問い合わせたりもしたんだ。この話が舞い込むまでは、どうしたらいいかもわからなくて」

よかった。よかった、と繰り返すフーリーはぽたぽたと子どものように涙を落とした。そんな大人を前に、リンとエドは顔を合わせる。ぺたんと座った彼に、エドはハンカチを差し出して「泣かないでよ」とぶっきらぼうに言い、リンは無言で隣に腰を落として大きな手に触れた。するとますます盛大にいい大人が泣くのだから堪らない。

フーリーが泣いている間に、シャトルからは続々とヒトが降りて

きていた。どうやら半壊したオーウェインの調査をするようだ。彼らと話をしているのはヴォルフで、子どもたちの口を挟む隙なんてなさそうだった。続々と下ろされているのは食べ物や資材などさまざまである。

（でも、この街には触れちゃいけない暗部がある）

エドはふと笑みを消した。

（どこまで干渉を許すかで、今後、街のあり方も変わるんだろうな）

もうトリビトだけの楽園でい続けるのは難しいのかもしれない。

それとも、ヴォルフはこれを望んでいたのか――

「ところで、どうしてあなたがここに？　もっと適任のヒトはいたでしょ」

エドはやっと涙が収まり始めた警察に尋ねる。エド、と諌めるように言ったのはリンだったが、気にしない。エドが応援を頼んだのはこのヒトではなかったのだ。フーリーは鼻をすすりつつ、

「私は坊やたちと面識があるからね。その方がいいだろうという話だったよ。ああ、私を推薦してくれたのがアベルさんだったんだ。彼は、その、いろいろ問題があってこれないけれど」

こちら側の世界で人族にこれ以上介入されては堪らない、という意思を感じ、エドはうっすらと唇を曲げた。同時に、アベルがフーリーを指定した理由が気にかかる。

（僕らのこと、あのヒトがそこまで気にかけてくれてるなんて知らなかったけど。むしろ、エルザに何かあったと睨むべき？　いや、それならアベルさん自身が出張ってきてもよさそうだし）

エド自身、先日の逮捕劇には納得のいかない箇所が多かったのだ。なんせ彼女は二十年を逃げ続けてきた。あんな呆気ない幕切れは、彼女らしくない。

（もしかしたら――脱獄とか）

これは調べてみないと、とエドが好奇心を疼かせている傍らで、フーリーは少し心配そうにリンを覗いていた。

「どうしたんだい、元気がないね。どこか怪我でもしたのかい」

「え、あ……えと……、そんなことないです」
まごつきながら否定したリンを、じいっとウサギ族は泣きはらした目で見つめている。瞼を伏せたリンの態度は、明らかに逃げ腰だ。リンへさらに話しかけようとするフーリーを、「こっちきて」とエドが慌てて引っ張った。ぐいぐい服をつかんで、問答無用で立ち上がらせる。少し離れた場所で、キッと睨みつけた。尻尾がピンと持ち上がる。
「あのね、ちょっとは気遣ってもらえませんか。あいつ、トリビトのことで傷だらけなんだってわかるでしょ。心も、身体も」
「そういえば、エド君。君も足を――」
「僕のことはどうでもいいんです。あいつは人族で、この街はトリビトの街なんだってこと忘れてませんか。あなたや僕は大丈夫でも、ここではそうじゃなかったってこと。だから苦しんでいるんだってこと。本当にわからないんですか？」
まくし立てたエドの剣幕に押されて、フーリーは口をつぐんだ。面食らった彼は、やがて難しい顔になる。それをじっと仰いだエドは、次にそっとリンを窺った。人族の少年は、浮かない表情のまま瓦礫に座っていた。ぽつねん、と路上に視線を投げている。やっぱり、この街に降りたのは間違いだったのだ……。
フーリーはそんな子どもたちを見やって、首をひねった。
「だからって、放っておくのは逆効果じゃないかなぁ。落ち込んでいるなら、なおのこと傍にいてあげたほうが嬉しいと思うよ。ああやって一人ぼっちでいるのは、寂しいからね」
近くにいてあげなくていいのかい？
そんなことを言われ、エドがまじまじとフーリーを見上げた。
「坊やたちは、友だちなんだろう？」
なにかおかしなことを言ったかなぁ。
にこ、と子どものような笑顔でフーリーは肩をすくめた。勢いついて反論しようとしたが、エドはどう返せばいいかわからない。直球で指摘されれば、抱えた懸念などちっぽけに思えたせいだ。

（でも横でぐちゃぐちゃ言われたら苛立たない？　放っておいて欲しいって思わない？）
　こんなときは構って欲しいものなのか。距離をおくのは間違っているのだろうか。そんな考えで埋め尽くされたエドを、やおらフーリーが抱き上げた。高い高い、と小さな子どもにするように、だ。短い悲鳴を上げたエドは一瞬絶句した。「何するんですかいきなり！」と猛烈に抗議する。しかしフーリーは片手で少年を抱えると、どこ吹く風で時計を確認している。
「出発までもうちょっと時間があるからね。それまで好きにしていよう」
「下ろしてください！　仕事があるんでしょ！　こんなことしている余裕なんか――」
「私の仕事は、坊やたちの傍にいることだからねぇ。難しいことを考えるのは大人の役目だよ。――おーいリンくーん！」
　言葉にならない悲鳴を発して、エドはますます暴れた。リンに見られた、というショックがまずでかい。フーリーはそんなエドをがっちり抱え、にやりと目を弓なりに細くした。それは、いたずら小僧が何かを企んだ笑みだ。エドの顔が引きつった刹那、大きく彼はジャンプする。うわあああ！　と今度は声に出して悲鳴を上げたエドを、びっくりしたリンが仰いだのはその直後。周辺にいた大人たちも目を丸くした。子どもの遊びだとわかると、笑みをこぼして作業に戻っていく。
　呼気荒くフーリーを散々引っかいたエドが、ぼさぼさ頭で降り立ったのは、数回のジャンプを繰り返してからだった。面白かったのと、面白いと思ったことへの屈辱と、叫んでしまった気恥ずかしさで「……くそ」と漏らしている。
「よし！　じゃあ次はリンくんだ！」
「えっ？　あの、ぼくはいいです……」
　顔中に引っかき傷を作っているのに、フーリーはめげない。すぐさま身構え、「十、九、八……」と大声でカウントダウンしていく。

リンがあわてて四方へ目を飛ばした。逃げられる場所を探したのだ。エドがそのリンの肩を叩く。
「逃げるよ！　ほら」
その顔に、先ほどまでの不安は見えなかった。走り出した二人は、わたわたとヴォルフたちのいる集まりに向かう。
「ゼロ！」
まぁてぇ！　とフーリーが追いかけた頃には、リンの笑顔が灯っていた。

宇宙船に乗り込んだ二人には、小さな部屋があてがわれた。列車に慣れていたエドは、その窮屈さに「狭！」と文句をこぼす。ベッドを二つ並べただけでいっぱいいっぱいの部屋だった。そのベッドだって列車のような広さはないし、ふかふかしたものでもない。ぶうぶう文句を言っているエドがトランクをしまったころ、フーリーが姿を見せた。そろそろ出発するとのこと。
ヴォルフに別れを済ませていた二人は、改めて景色の見える場所へ案内してもらった。ヴォルフの手を振る姿が見えた。それが小さくなるにつれ、明らかになっていく街の全貌に、子どもたちは言葉をなくす。
フーリーがあれだけ泣き喚いた理由も、わかった気がした。それだけ、ひどい有様だったのだ。くもの巣のようなネットには、巨大な街の破片がいくつも突き刺さり、黒の街は影に埋もれながら残骸をまいていた。そして白の街は――今にも崩れそうなアンバランスさをさらしている。ちょっとした振動ひとつで、今にも崩壊が始まりそうで、二人の目釘付けになる。
絶望的な視界をよぎったのは白い翼だった。たった一人だけ、彼らを見送るように空を旋回している。シエラかもしれなかった。
ふとエドの手に、何かが触れた。それは、小さく震えているリン

の手だ。手のひらを返してエドがぎゅっと握れば、リンの肩から少し力が抜けたようにも思えた。
だんだん、白と黒の街から、遠ざかっていく。目を凝らしても細部がわからなくなって、やがて世界は雲に包まれた。それさえ小さくなったころ、少年二人を促すためにトンっと背を押される。フーリーだった。

狭いシャワーを借りてエドが出たら、リンは備え付けのテーブルに向かっていた。
「あ。手紙、書いてるの？」
エドが尋ねると、リンがうん、とうなずく。だけどペンはすらすらと動いておらず、「大好きなアニエスとみんなへ」で止まっている。しばらく待ってみても、そこから先には進む気配がない。リンはやっぱりどこか沈んだ面持ちで、何か考えているようだった。
「ラッカ……、目覚めなかったね。ヴォルフさんは大丈夫そうだって言ってくれたけど。はやく目覚めてくれるといいよね」
うん、とリンは言う。
「最後に見えたトリビト、きっとシエラだよね。ステーションには着てくれなかったけど、ちゃんとさよならできたね」
うん、とリンはもう一度言う。
「シャワーあけたから、入っていいんだよ。それともお茶にする？そういえば少しおなかすいたよね」
リンは三度、うん、とうなずく。エドの台詞など右から左へ抜けているようだ。
オーウェインへ来る前もこんな調子だったが、あの時はホームシックが原因だった。だけど今度のは……
（傍にいてあげるほうが嬉しい。僕らは友だちなんだから？）
フーリーの言葉を繰り返してみても、まだエドは納得していなか

った。だって、一緒にいてもどう声をかけていいかわからないし、一緒にいても何もしてあげることができないからだ。今もこうして、エドはこっそりため息をついている。本当にそれだけのことが力になっているかどうか、確信が持てない。

（僕ならそっとしておいて欲しいって思うもんな）

だけど久々に見た屈託のないリンの笑顔にホッとしたのは事実だ。しかし、自分ではそうしてあげられなかった。話しかけてみても、この通りだ。フーリーのようになかなかできない。

机に向かっているリンを残し、エドは船内を歩き回る。食べられるものがないか探していたのだ。小さな客人のことは誰もが承知しているらしく、すれ違うたびに声をかけられる。ご飯について尋ねると、食事は部屋へ運んでもらえることがわかった。そして、今は食事の時間ではないことも。やんわり部屋に戻るよう勧められたが、猫の少年は気にしない。

（お腹すいたんだよね。そういえば、あの街じゃろくなもの食べれなかったし）

列車にいたころは、食堂車へ向かいさえすれば、いつでもご飯にありつけたのに。まったく不便だ。

そうして奥へ奥へ進んだころ、不穏な言葉が耳に飛び込んできた。

「それで、行方不明の列車とは、まだ連絡がつかないのですか？」

フーリーの声である。息を呑んだエドは、思わず足を止めて耳をすませた。

――難しいことを考えるのは、大人の役目だとフーリーは言った。子どもには知らされていない理由があって、彼らはここにいる。

（そういうことだと思ったよ！）

どうやら問題は、これからも二人にのしかかってくるようだった。

てがみ

大好きなアニエスとみんなへ。

お元気ですか？　ぼくは元気です。
みんなも、元気ですか？　エイダはケガとかしてませんか？

オーウェインは変わった町でした。
上と下で町が二つあって、白と黒に分かれてました。

アニエスやみんなに話したいことが、いっぱいあります。
聞いてほしくて、いつも会いたいなって思います。
だけどぼく、がんばるね。ちゃんとがんばるから心配しないでください。

それじゃあお元気で。
またお手紙を出します。

リン・ユイより。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8659j/

白と黒の王国

2010年10月8日11時56分発行